
戦国異端記

YAMASAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国異端記

【Nコード】

N9517L

【作者名】

YAMASAN

【あらすじ】

よくある戦国転生ものです。

転生するのは宇喜多秀家。

島流しフラグをさけるため幼少から必死に頑張る。

戦記物とラノベの中間ぐらいをいけたらいいなあと思っています。

気軽に読んでください。

不定期連載になると思いますが読んでいただけたら最高です。

プロローグ

元龜^{げんき}3年。

俺はこの世に二度目の生を受けた。

何を言ってるのかわかんないと思うが、俺自身よくわからない。気づけばわけのわからないところに飛ばされていた。

ちなみに今俺は0歳である。

頭の中ではいろいろ考えているがどうやら俺がしゃべっても「ばぶう」としか言えないらしい。

はいはいをしようと試みているが筋肉が足りない。

3歩ほど歩いたところで転んでしまい鼻をぶつけてしまった。

めっちゃ痛くて泣き叫んだら乳母と思われる女の人俺をあやしてくれた。

乳の大きい人でこれも子供の役得であろう。

ついでに乳も吸わせてもらう。子供ってすばらしい。っとこんなことを考えてる場合じゃない。

ここどこだよ。畳に障子^{しじ}、ものすごく代表的な日本家屋である。代表的過ぎてセンスが古臭い部分がある。

どうやら俺はこの坊ちゃんであるらしい。

生まれたとき周りにたくさん人がいてびっくりした。

みんなが俺の誕生を喜んでいる。前世の俺もこうやって喜んでくれたのかなあ。

前世の俺はどうなっているのか。死んでいるのだろうか。

思い出そうと記憶をさかのぼってみるがどうしても思い出せない。記憶に靄がかかっているようでどうしてこんなところで赤ちゃんをやっているのかまったくわからない。

まあ諦めるしかないのか。そのうち思い出すだろう。

なんていったってまだ生まれたばかりだしな。

元龜^{げんき}3年っていつだよ。

俺は頭を抱える。

せめて西暦に直して欲しいものだ。

俺の知ってる日本なのかも疑問が残るところだ。

もしかしたらどこかの異世界に飛ばされたのかもしれない。

今の俺では質問もできないので仕方なくなすがままにされるしかない状況である。

1ヶ月ぐらい時間が経過すると血相かけた顔が飛び込んできた。隣に女性も一緒である。

確かこの人は俺を産んだ女性だった気がする。

生まれたとき一度しか会ったことがないため記憶が薄い。

男の方は40台〜50台前半だろう。端正な顔立ちをしている。イケメンだ。

「お福、よくやったぞ。元気な男の子だ」

「はい。ありがとうございます。お館様」
時代劇かよ。

と突っ込みを入れたが発せられた声は「ばぶう」としかならなかった。

「おい。しゃべったぞ。なかなか聡明そうな顔をしているではないか。将来が楽しみだ」

「お館様に似たのでしょうか」

「これで我が宇喜田の家も安泰だな」

「京では織田がばっこしていると聞き及んでいますが、大丈夫でしょうか？」

「お前が気にすることではない。何、田舎物の織田なぞすぐに追いつかれるさ」

織田！？ 宇喜田！？

「ばぶうばぶう」

精一杯驚きの声を発するも間の抜けた声になってしまふ。

「ほう、織田に反応するとは将来大物になるかも知れんな」

「この子も宇喜田の家を心配しているのでしょうか。お館様せめてこの子が大きくなるまで健在でいてください」

「大事無い。女子が心配することではないわ」

そうついてて高笑いする。

2人が去って言った後、混乱した頭を落ち着けると状況を整理してみる。

今の二人は俺の両親であろう。

一方は俺を生んでくれた人だから見覚えがある。

そしてたぶんここは多分日本だろう。

建物もこれでもかというほどの代表的な日本家屋であるし、着ている服も時代劇に出て来るような格好であるが

日本服であろう。たぶん……。

時代は？平成ではない。絶対に。

俺はわけのわからないうちに赤ちゃんになり、日本の、平成ではない時代に飛ばされたということか。

なんてこった。

放心している場合じゃない。

情報を。情報を集めなくては。

確か2人が宇喜田、とか織田、とか言ってたよな。

宇喜田、織田この両家が歴史上に並び立つのは戦国時代しかない。

おいおい。物騒すぎるだろ。よりによって戦国時代かよ。

我が宇喜田家ということは俺は宇喜田家の子供ということか。

まさか宇喜田秀家じゃないだろうな。

もしそうだったらあのおっさんは宇喜田直家かよ。

宇喜田直家……

歴史は前世で好きだった。

記憶を掘り起こしてみる。

確か、謀略に謀略を重ねて岡山辺りに一大勢力を築き上げた戦国大名じゃないか。

特技は暗殺。主君を殺しに殺し、今の地位を築きあげた。

毛利元就、あまこつねひさ尼子経久と並ぶ中国地方の3大謀将の1人である。恐ろしい男である。

確か俺が生まれて10年後辺りには病死してしまった気が……

やばい。俺の親父は早くも死亡フラグをたてちまったよ。

戦の始まり

てんしょう

天正6年

今や俺も7歳に成長した。

どうやら本当にここは戦国時代であるらしい。

天正3年、織田信長が武田勝頼を破った。

世に言う長篠の戦いである。

武田対織田。信玄を欠いているとはいえ武田軍は圧倒的重厚さを誇っていた。

俺の周りでの下馬評は武田の圧倒的勝利であった。

「織田の天下もここまでか」という決まり文句が毎日のように俺の耳に入ってきていた。

なので織田が武田を破ったという報はここ備前まで届いた。

長篠の戦いは1575年に起こったことは記憶している。

そこから逆算して考えると現在天正6年は1578年である。

本能寺の変まで後4年。関が原の戦いまで後22年である。

のんびりしている暇はないというのがこの6年で出た結論である。幸いなことに史実では宇喜田秀家はその半生大名として安楽な生活を送ることができる。

秀吉に寵愛されるので殺されたり危ない目にあったりすることは滅多にありえない。

まあこの間に民に重税をしたり、家臣に反乱を起こされたり、鷹狩に嵌ったりしている。

しかし、その後が問題である。

関が原の戦いで石田三成側、西軍についたことにより、家康の怒りをかい、後の人生は島流しである。

島流しといっても家族全員で余生を過ごすことができるので別に不自由はない。

生き残る分にはなんら問題のない、むしろ厚遇といえる。生き残る分には……

ただ俺が許せないのは家康によってそれが行われることである。はつきりいつて家康は前世から大嫌いである。

その家康によって島流しされるのは生理的に無理である。そんなハメになることは耐えられない。

関が原の戦い、この合戦で俺の人生は決まってしまうことになるだろう。

俺もこの7年間のんびんだらりと過ごしていたわけではない。

生命の保証は何とかなりそうであるが、戦国時代は戦国時代である。

油断していると後ろからズブリと刺されそうである。

なんといつても親父がそれを体現してきただけに人事ではない。

少しでも死ぬ確立、島流しになる確率を減らすために勉強しなくてはならない。

前世より必死に勉強した。

といつても前世からの土台があるため、そろばん、つまり算数は問題なかった。

漢文も何とかなった。レ点、一二点がないのには苦労したが。

大変だったのは文字である。

高校の古文はそこまで悪い成績ではなかったのだが、この時代の文字は全く読めなかった。

筆記体に近い流し書きというか、ほぼ落書きのような文字を読むで書かなくてはいけない。

ものすごく大変であった。

変に土台があるだけに余計わかりにくい。英語の方がましに思えてきたものだっただ。

「八郎、八郎」

俺が物思いにふけっていると上から声がする。

この声は桃寿丸とうじゅまるであろう。

三浦桃寿丸みつうりやうじゅまる。俺の義兄にあたる。美作みまさかの国人領主の息子だったが

俺の親父が預かってきて養子にしている。

俺の前世の記憶では名前も聞いたことがないのでほどうだつの上がないやつだったのだろう。

義兄なのに俺の後ろによく付いて回っている。

将来の片腕にしてやろうと思ひ徹底的に俺好みに矯正してやった。

ちなみに八郎とは俺のことである。幼名というやつだ。

「またこんなところにいたのか」

「なんのようだ？」

俺は田圃あぜ（たんぼ）の一畦あぜから起き上がる。

「父上が出陣なさるそうだ」

「ほう。織田とか？」

桃寿丸は目を見開いて答える。

「よくわかつたな」

「規模は？ いつ発つ？」

「……すまん。わからん」

うだつの上がないやつだ。これで俺より五歳上だからひどいものだ。

もう一回矯正しなす必要がありそうだ。

「俺に報告するときは、5W1H。誰が、何を、いつ、どこで、どうして、どのようにを徹底しろといったはずだが？」

「うつ……すまん。忘れていた」

「復唱！……！」

後ろで律儀に復唱する桃寿丸をほっておいてそろそろ俺も戦場の空気に慣れておくべきだ。

と考える。なにしろもうすぐ、正確な日付はわからないが親父が死ぬ。

確か病死である。暗殺や戦場で死ぬのなら手助けできるが病死はどうしようもない。

俺は文系人間である。医学的知識など皆無である。

「桃寿丸。とつじゅまる親父に会いに石山行くぞ」

3回目の復唱に入っていた桃寿丸にそう告げる。

石山城。現在の岡山城にあたる。1970年、つまり俺が生まれる2年前に前領主を自害させ、親父が奪い取った城である。

主だった家臣や商人を亀山城から移住させ、今では一大城下町となっている。

岡山城とその城下町を見るたびに親父の偉大さが身にしみる。

すでに親父は昨年浦山宗景うらやまむねかげを追放し、備前びぜん、美作みまさかを統一している。

まあ簡単に言えば岡山県ほぼ全域が親父の手中にわたったわけである。

岡山県といって馬鹿にはできない。戦国時代、西国は日本のなかでは先進国といってもいい。

前世の俺の岡山のイメージとは全く異なっている。

といっても西に毛利、東には織田が台頭してきている。

岡山県だけでは心もとないのも事実である。

親父の代で播磨、今の兵庫県辺りまで制圧してくれないかな。などとありえないことを考えなくなる。

「よくきたな」

上座から謀略マンの声がする。もちろん親父だ。

「父上、此度の戦参陣させてもらえないでしょうか？」

「なんだと！まだ元服もしていないではないか。戯言は聞だけにしておけ」

怒られてしまった。というかそんな冗談7歳児に聞かせるなよ。

「私も次期当主として戦場の空気になれたく存じます。指揮はとりません。見学するだけです」

「ううむ。その意気込みは買うが、こんなところでお前を失うわけにはいかん。それに今回は毛利も出る。こんな戦でなくもつと華々しい戦をお前には用意してやるつもりだ。それで我慢してくれ」

希代の謀将と恐れられている直家も俺には甘い。

やはり、晩年できた子供はかわいいものなのだろうか。

「なればこそです。毛利と織田、両勢力を見る絶好の機会です。それに危なくなったら逃げますから」

俺の返答を聞くと、親父は笑いながらいう。

「そうか。逃げるか、逃げるときか」

語尾にwwwがつきそうなぐらいである。

「わかった。許可を出す。しかし条件がある」

「なんでしょうか」

「此度の戦、忠家が指揮を取ることになった。忠家のいうことをよく聞くのだぞ」

「わかりました」

「よろしいのですか。まだ元服もしていないというのに。私は反対です。何かあつてからでは困ります」

横からしゃしゃり出てきたのは宇喜多忠家、うきたただいえ親父の弟、つまり俺の叔父にあたる。

何でお前がいるんだよ。とつっこみたい。ああつっこみたい。

「まあ大丈夫だろ。此度の戦は織田は出てこんよ。いや、出てこれない。」

ゆえに城攻めになる。城攻めなら危険も少ないだろうて。

それに八郎の心意気も買ってやらんとな」

忠家は眉をひそめた後、ため息を付き了解する。

「わかりました。八郎殿、前線には決して出られぬように」
「承知しています」

ふう。ため息を漏らす。いつまでたっても親父と会つのは緊張する。

肩をならしながら廊下を歩く。

「八郎。あいかわらずすごいな。父上の前であれだけしゃべれるのは尊敬する」

「ん？なんだ桃寿丸とうしゅまるか」

「しかも戦に行くんだろ？俺でさえまだ行ったことないのに。よく行く気になれるよな。ほんとに6歳かよ」

「何いつているんだ？お前も行くんだよ。」

「え？俺も？」

桃寿丸には再教育が絶対に必要だ。

上月城の戦い 前編

うん。小競り合いだと思ってたんだ。有名な戦じゃないだろうと高をくくっていたんだ。

正直、毛利の力を甘く見ていた。

毛利軍がここまでとは思わなかった。背筋が寒くなる。

織田と毛利で有名な戦は備中高松攻めだけじゃあなかったんだなあ。と改めて実感する。

今、俺の目の前に毛利軍6万が陣取っている。陸軍だけで六万である。

多少の誇張もあるだろうが、どう見ても大軍としか言いようがない。

庄巻の一言である。各地に炊き出しの煙が上がっている。

さらに海には村上水軍の船が所狭しと敷き詰められている。はりまなだ

播磨灘にはネズミ一匹出入りすることは不可能だろう。

毛利が言うには700隻だそうだ。

発する言葉もない。

俺は今まで宇喜多に転生できて幸せだと思っていた。

何もしないでも一国一城の主になれる。生活の保証はされている。と思っていた。

とんでもない幻想だった。

今は味方だからいいものの将来、一時的であれ敵になるかと思う軍勢を見て恐怖する。

今回、目的となっているのは上月城である。はりま みまさか

播磨・美作・備前の国境にある要衝である。びっちゅうたかまつ

この城は最近織田に奪われたり、奪い返したり、奪うの失敗したりしている城である。

宇喜多・毛利勢にとってはこの城は中国地方の防衛の要である。

その城が今羽柴秀吉に奪われたのである。

そして守っているのは、毛利と因縁深い尼子である。

中国地方の3大謀將の1人尼子経久の子孫である。

偶然にもここに三大謀將の子孫が揃ったことになる。

これに対し毛利は尼子^{あまこ}残党の討伐を決意。

毛利軍総大将輝元は35000の大軍を率いて郡山上を出陣する。

さらに小早川隆景、吉川元春の毛利^{じょうせん}両川もそれぞれ出陣する。

毛利軍総勢51000である。

それに対し俺の宇喜多家は総大将を宇喜多忠家にすえ、10000の兵を率いている。

上月城に立て籠もる尼子勢は3000である。

総大将は尼子^{あまこかつひさ}勝久である。

数だけで考えるなら20倍である。攻城戦3倍の原則を圧倒的に超越している。

これだけなら毛利・宇喜多連合軍の圧勝なのであるが、ここに織田という要素が出てくる。

尼子のバックには織田がいるのである。

織田の救援はまだ来ていないが、羽柴秀吉率いる16000が来るらしい。とのことである。

少し長くなってしまったが、今回の戦の背景、勢力状況である。

「げに恐ろしきは毛利なり。か」

目の前に広がる上月城包囲網を見ているとそう思わずにはいられない。

「すつげーな。さすがは毛利」

横の桃寿丸も同じような感想らしい。

せっかく俺が時代と環境を考慮しているのに……。

すでに毛利は包囲を完了しており、すでに空掘や塹壕を構築している。

この時代に擬似的とはいえ要塞構築の概念と技術があつたことは

驚きである。

「忠家さんただいえは？」

「向こうで軍議してるよ」

そういつて桃寿丸とうじゅまるは天幕がはってあるほうを指差す。

天幕には宇喜多の家紋が描かれている。

何気なく上の方を見ると丘の上に小さな人影が見えた。

「ん？ 誰かいるぞ」

「え？ どこどこ？」

「あそこの丘の上だよ」

「丘？ ああ、ほんとだ。何であんなところにいるんだ？」

「まさか……敵の間諜かんぢょう！？ 行くぞ、桃寿丸とうじゅまる」

「ええっ……！ いくの？ 危ないよ」

「いいから、いいから」

そういつて俺は桃寿丸とうじゅまるの腕を引きずりながら、丘の方にかけていこうとする。

「どこへ行かれるのですか？ 八郎様」

「ちょっとあそこの丘まで」

ん？ 聞いたことある声だなと思い振り返る。

そこには忠家さんが鬼の形相で立っていた。

「お館様がおっしゃいましたよね。私のいうことを良く守るようにと。」

私が戦場に連れて行く条件として勝手に出歩かない。私の目に見える範囲にすること。

私がいけないときは天幕の側にいること。以上をお守りいただくことをお願い申し上げたはずです」

「うう……軍議だったんじゃあ」

「軍議は先ほど終わりました。

はあ……まあいいでしょう。あなたがそれを守れるとは思っていませんでしたから」

「じゃあ、いつてもいいのか？」

「いいでしょう。しかし、この者を護衛としてつけてください。決してこの者の側を離れぬように」

そういうと忠家さんの後ろにいた人が前に出てくる。

「小西行長といいます」

年齢は20歳前後だろうか。胸に口ザリオをつけている。かつこつけかよ。

俺も前世の中学校のころつけてたときがあつたなあ。

「この者は兄上がじきじきに八郎殿の警護にと連れてきてくださつたのだ。」

絶対に側を離れないでください、絶対にですぞ」

忠家さんが必死の形相で迫ってきた。

「わかりました。わかりました。心配性なんだから。忠家さんは一応の了解を取ると忠家さんは小西行長に後は任せたぞ。とつげた後もと来た道を戻っていった。

ん？ 待てよ。え？ 小西……小西行長こにしゆきなが！！！！！！

あの！！！！ キリシタン大名として切腹させられる、あの！！！！ 秀吉の家臣として水軍を率いて、武将としても官僚としても優秀な人物じゃないか。

確か関が原で西軍に味方して家康からの心証が悪くなつたんだよな。

親父の家臣だったの！！！！ 将来大名になるすごい人物じゃないか。

今のうちにサインもらつところかな。

「あの丘の上に行きたいのですか？」

俺が考えこんでいると小西行長から声をかけられる。

「いいの？」

「大丈夫でしょう。もちろん私も行きますが」

「よしそれじゃあ、行くぞ、桃寿丸」

今まで俺の後ろで隠れていた（本人はそのつもりだろう）桃寿丸を引き連れて再度丘の上に向けて出発する。

丘までの道はさほど険しくなく、案外すんなり行くことができた。少し開けたところにでると30人ぐらいの人が宴会していた。

「なにしてるんだ？あいつらは。」

横にいる小西行長こにしゆきながに聞いてみる。

「彼らはこれから始まる戦を見物しに来たのでしょうか。」

「見物！？そんなことする人がいるんだ。」

俺たちより少し後ろにいる桃寿丸が呟く。

俺も疑問に思ったので聞いてみることにする。

「そんなことされて情報とか大丈夫なの？」

行長が少し感心したような顔をして答えた。

「戦を見物することは結構良くてあることですよ。」

見物しながら昼飯を食べる人もいるくらいですから。

いちいち取り締まっていたらかぎりがありません。

それに情報として大切なことは今何をしているのかももちろん大切ですが

これから何をするのかの方がわからなければ何とかなるものですよ。

それに包囲を敷いていることはすでに織田に伝わっているでしょうから」

行長が教え子に諭すように言う。

「そういうものか」

やっぱり将来、大名になる男はすごいものだと感じるしかない。

「せっかくなのでここから見学しましょう。」

ここでしたら矢や鉄砲が飛んでくることもありませんし、陣営も良く見えるでしょう」

そういなり行長はたむろしている人影の一角に向かっていった。しまった。

「本当にこれから戦が始まるんだ」

桃寿丸がいまさらなことを呟く。

「八郎様、あそこの輪に入れてもらいましょう」

行長が戻ってきて俺らを導いていく。

どうやら見物人は商人らしい。

結構手広く商売しており、堺にも店があるらしい。

戦を見るのが好きらしく暇がつきしだい今日のように戦見物をしているらしい。

商人が進んで解説してくる。俺も陣営を見ることに不満はないのでされるがままにしている。

毛利は上月城を包囲する一方で空掘を掘り塹壕を掘り、塀をめぐらし柵などで攻城線を築いている。

このようなものを陣城というらしい。

さらに別のところにも織田家の救援対策の陣城を築いている。

商人は一通り説明し終わると

「この戦3ヶ月ぐらいかかるでしょうな」と締めくくった。

「どうですよろしかったら、この戦が終わるまで私と一緒にここから見物しませんか。」

私もあなたみたいに熱心な聴衆がいた方が張り合いが出るというもの。

「いいのか？」

「もちろんですとも。なに今更に三人増えたところで変わりませんから。」

俺は行長をすぎるような目線で見える。

「いいですよ。私は最初からそのつもりでしたから。」

「さっすが行長」

こうして俺らはこの商人のお世話になることになったのだ。

上月城の戦い 中篇

約一カ月後、俺らは未だに商人のお世話になっている。

たまに忠家ただいえに会いに行くぐらいである。

忠家も行長がいれば安心なのか小言も少なくなってきた。

たまに陣の説明やら戦の講釈をしてくれる。

嫌がる桃寿丸とうじゅまると一緒に聞くのだがこれがなかなか面白い。

忠家は苦労人だけあって人に教えることがうまいのだろうか。

商人は商人でこれもまた過去にみた戦のことを俺に話してくる。

ぜひ長篠ながしのの戦いの事を聞いたかったが、残念ながらその戦にはいけなかったらしい。

ぜひ行きたかったと悔しがっていた。

「ん？何か見えたよ。」

桃寿丸とうじゅまるが不意に発言する。

「え？どこどこ？あれか？ほんとだ、援軍かな？」

「毛利の？」

「方角的にむりだろ。」

俺が突っ込む。

「遂にきましたか。羽柴軍が到着したのでしょうか。予想より早かったですね。」

今まで黙ってみていた行長が解説してくれる。

「羽柴軍！？遂に本格的な戦が始まるのか。一ヶ月、一ヶ月もまたせおって。」

一ヶ月も待った反動だろう。商人がハッスルしている。

ハッスルダンスでも踊りかねないぐらい飛び跳ねている。

「1万5千程度ですね。ここからでは確かなことはいえませんが。」

羽柴勢が動かせることができるのはこれぐらいでしょう。」

「ほう、あなたもなかなか戦好きじゃな。」

商人が同士を得たとばかりに目を輝かせている。

「いえ私はかじった程度ですよ」

「そうなのか。まあなんにせよこれから戦が始まる。来たかいがあったというものじゃ。」

残念ながら商人の期待とは裏腹にこの後小競り合いは起こったものの大規模な戦は起こらなかった。

毛利は徹底的に兵糧攻めに拘り、強襲をかけようとはしなかった。羽柴秀吉も6万の大群に1万で挑むことはしなかった。

終始、ちよっかいはかけてきたものの全面的な攻勢は行われなかった。

一方の上月城に籠った尼子勢は悲惨なものだった。

兵糧攻めという平和的な戦になるものだとおんきに構えていたが間違いだった。

行長がいうには兵糧攻めは普通の野戦より悲惨な結果になることが多いらしい。

耐えかねた脱走兵が何人も投降してきた。

兵糧も尽き、城には怨嗟の声がたちこめてみえるぐらいだった。

包囲が開始されて三ヶ月、羽柴が救援に駆けつけて2ヶ月。

遂に羽柴が撤退準備に入った。

丘の上からでは全くわからなかったが、毛利軍から伝達されてきた情報ではそうらしい。

それに乗じて毛利軍は総攻撃をかけた。

もちろん我が宇喜多も参加している。

まさに圧勝だった。

完膚なきまでに打ち破った。

羽柴軍を散々にし、これから東進し、いざ信忠軍、というところまで追い討ちはかけない。

という毛利軍からの伝達を聞く。

丘の上から見ていた俺たちでもこれから追い討ちをかけると思っ

ていただけに意外だった。

「追い討ちかけないんだ」

桃寿丸が首をしきりにかしげている。

「小早川隆景か……」

俺が呟くと行長が目を見開いて驚いている。

「八郎様は本当に7歳ですか？」

幼子とは思えません。」

「えっ……！」

凶星を突かれてびっくりする。

独り言を聞かれてしまった。

「ねえねえ、何で追い討ちかけないの？」

桃寿丸が尋ねる。

いいぞ、桃寿丸。空気は読めてないがいいタイミングだ。

今だけはお前の応援をしてやる。

「そうでしたね。このまま追い討ちをかければ羽柴軍は完膚なきまでに叩けるでしょう。」

しかし、その後ろには信忠軍、さらに後ろには信長軍が控えています。

今回の戦のそもそもの目的は上月城の占拠と尼子残党の排除にあります。

上月城をとれば織田軍はおいそれと中国地方に手出しできないでしょう。

ここで欲をかいって危険を冒すより、徹底的に初志を貫く。

恐ろしい男ですよ、小早川隆景は。」

「ふーん。そういうことか。慎重なだけじゃないんだね。」

桃寿丸はバカではない。頼りない男はあるが、教えたことは吸収できる。

どうやら宇喜多勢も帰ってきたらしい。

宇喜多のよくわからない漢字をどこした旗も見えてきた。

忠家叔父さんに挨拶しないとまずいだろっな、と思い3人で丘の

上を降りることにした。

丘を降りてきた俺達を迎えたのは大変に機嫌のよろしい忠家さんの姿だった。

「これはこれは八郎殿我が軍の健闘ご覧いただけただけでしょうか？

圧倒的な大勝ですぞ。」

「うん、すばらしい戦いだったよ。」

「私もこのような戦いを八郎殿にお見せすることができて喜ばしい限りです。」

そういつて満面の笑みを見せる。

「後は残った上月城のみですね。」

何、すぐ落とせます。援軍は来ないでしょうから、士気もおちますからね。」

上月城の戦い 後編

忠家叔父ただいえさんの言ったとおりになどなくして上月城まみづきじょうは落城した。
総大将である尼子勝久あまこかつひさは自刃したとのことである。

その報を丘の上で聞いた商人は

「良いものが見れました。これで私は帰ります。3ヶ月もあけてしまったので仕事が溜まりに溜まってましてね。

ここであつたのも何かの縁です。堺に来たときには是非、家にお寄りください。」

そう行長に告げると帰っていった。

俺らも丘を降りて忠家叔父さんのところに向かう。

天幕へ向かうと忠家叔父さんは終戦処理の真つ最中だつた。
どうしたもんかなと思っていると、後ろから不意に声をかけられた。

「これはこれは八郎様。今までどこにいつていたのですか？
戦は既に終わってしまいましたよ。

その様子ですと私の活躍は見てもらえなかったようですね。

大將は後ろにいることが多いとはいえ、あまりに後ろですと兵が付いてきませんよ。」

げっ嫌なやつが来た。

こいつは宇喜多忠家うきたただいえの嫡男ちやくなんで宇喜多詮家うきたあきいえという。ことあるごとに俺に突つかかってくる嫌なやつである。

桃寿丸とうじゅうまるより少し年上なので今回の戦にも参加していたらしい。
切れ長の目にいやみっただらしい口調、火傷して女に嫌われて家臣

に殺されればいいのに。

忠家叔父さんはものすごくいい人であるのにどうしてこんな男が忠家叔父さんから生まれてきてしまったのだろ。と常日頃から思わずにはいられない。

「おう、詮家殿。^{あきいえ}お主も元気そうだな。

戦場は体力を使うと聞くがどうもそうではないらしい。

とても戦の後とは思えないくらいに元気そうだな。」

桃寿丸は横でおろおろしている

「ふん、相変わらずさかしいやつめ。

そういえば、これから首実検が行われることになっているが八郎殿はいかがする。

せっかくの戦勝ですから、次期宇喜多家当主となられる方には是非見ていつてもらいたいものですね。」

前半部分は聞かなかったことにしておいてやろう。

首実検とは配下の武士が戦場で討ちとった敵の首の身元を大將が判定し、

その配下の武士の論功行賞の重要な判定材料とするために行われた作業である。

俺は記憶を掘り起こす。今回は一応総大將は忠家さんなのだから俺は別に参加しなくてもよさそうなのだが、そのような言い訳詮家には通じそうにない。

「首実検か。おもしろそうではあるな。

この年で首実検に参加したというのも前例がなさそうだな。」
売り言葉に買い言葉である。首実検とは簡単にいえば生首晒しである。

こええよ。絶対夢に出てくるよ。正直逃げ出したい。

が、俺の心とは裏腹に足は進んでいき、忙しそうにしている忠家叔父さんに声をかけてしまう。

「忠家さん。首実検に俺も参加させてもらえないでしょうか。またとないいい機会ですし。」

やめろよ、俺、この口は何をしゃべっているんだ。首実検見たいなんてキチ外だぞ。

「八郎様、いい心がけですが、やはり少し早すぎるように思います。初陣の機会までとっておくのが良いと考えますが。」

さすが忠家さん、常識人。これで俺もすんなり断れるわけだ。

「父上、いいではありませんか。本人が見たいというのなら是非見せてあげるべきだと思います。」

こういうものは早すぎるというものはございません。」

詮家、お前何言ってるんだ。せっかくいいところだったのに。

忠家さんは俺と詮家を交互に見比べるとため息をついていう。

「仕方ありませんね。私についてきてください。」

「八郎様、よかったですね。首実検、見たかったんでしょ?。」

詮家がいい笑顔を俺に向ける。

「忠家叔父さんの説得をしていただいて感謝しますよ。詮家さん。」

俺の口はとどまることを知らない。

くそっ！売られた喧嘩は買っしかない。

「いやはや、八郎様には驚くばかりです。」

たまに私よりはるか遠くを見ている気さえますよ。

さすがは兄上の子というべきでしょうか。いやはや末恐ろしい。」

忠家さんが俺のことを褒めちぎってくる。背中をバンバンたたかれた。痛い。

それは違いますよ。今回ばかりは本当に。

そんな俺の様子を詮家が悔しそうに見つめているのが視界の隅に映ったが気にしないことにした。

「さて、お前も行くんだよ。見逃してもらおうなどと甘い考えはよすんだな。」

こっそり忍び足でこの場を逃れようとしていた桃寿丸を捕まえる。

「ひえ」

声を上げる桃寿丸の首根っこを捕まえ、忠家さんの後ろについていく。

「みのがしてー」

桃寿丸の声はよく響いた。

別のところに作ってあった天幕のなかに入ると、すでにある程度の準備はできているようだった。

これから始まることに内心泣きたいものであったが、詮家の前でそんな姿は見せられない。

悲しいが男のプライドである。

忠家さんが一番上座に毛皮をひいて座っている。手には扇子である。

堂々としたものだ。俺も見習いたい。

その周りを甲冑をかぶった部下たちが護衛するように並んでいる。皆、臨戦態勢さながらの様子である。

俺たちはその一番下座に座っている。

忠家さんが合図をすると部下が入ってくる。

手には案の定生首を持っている。

首を台に乗せ、親指を首の耳に差し込んで、ひざまづいて首の右の横顔を忠家さんに見えるようにしている。

これが次から次へと入れ替わり立ち代り行われている。

思ってたほどひどいものではなかった。

出てくる生首はある程度化粧されているだろうものが多かったし、両目は閉じられていて、合戦の最中に死んだとは思えないものだった。

しかし、気味が悪いことは変わらない。

胃から押し寄せてくるものがある。

気分悪そうにしていると、後ろに控えていた小西行長こにしゆきながが桶を持ってきてくれた。

「吐けということか。」

叫びたかったけど叫べなかった。そんな雰囲気ではない。仕方なしに桶に今日食べたものを出していく。

途中からは出すものもなくなってしまうが……

それでも目だけは外すまいと努めた。

ちなみに横にいたはずの桃寿丸とうじゅまるはすでに見当たらなかった。

後で行長に聞いたら、泡を吹いて倒れたので、急いで運んだらしい。

詮家は生首など見もせず、そんな俺と桃寿丸を見ながらニヤニヤしていた。

上月城の戦い 後編（後書き）

最近、桃寿丸がかわいくて仕方ありません。

いつも読んでくれている人^{いるかわかりませんが}ありがとうございます。
できれば感想が欲しいでゲソ！！！！

山陰の麒麟児

俺が桶の半分ぐらいを吐瀉物としゃぶつで埋め、胃液しほを搾り出そうとするころに出てくる生首ただいえが途絶えた。

忠家さんが俺のところに来た。

「戦後処理もすんだゆえ石山に帰ろうと思います」

石山とは本願寺でなく宇喜多の本拠地の岡山城のことである。

俺は異論はないので、というかもう早く帰りたい。

「わかった。帰るまでが戦争だぞ。」

遠足じゃないんだからと自分に自分で突っ込みつつ桶を後ろに隠し、威厳を保とうとする。

「ははっ」

そついい残すと部下のところに行き大声で指示を飛ばす。

そして俺と桃寿丸とうじゅまる、小西行長こにしゆきなが、は他の宇喜多軍とともに帰路に付いた。

もちろん毛利軍も一緒である。

俺も桃寿丸も行長も馬上の人である。

俺は馬に乗るのは下手である。先生として付いてくれた忠家さんに匙を投げられた。

決して戦場で乗ってはなりませんぞ。と念を押して言われた。しかし、ゆっくりと移動するぐらいなら問題ない。

途中、福岡というところを出た

福岡といっても九州の福岡ではない。前世での岡山県瀬戸内市あたりだろう。

そして吉井川を渡ればもうすぐ岡山だ、というところで俺は奇妙なものを見た。

檻の中に人が入っている。

なんだろうと思いついて近づいていこうとすると行長に止められる。

「あれは毛利軍の虜囚（りゆうしゅう）です。あまり近寄らない方がよろしいかと。」
さらし者にされているところを見るとよほど毛利は虜囚のことを嫌っているのだろう。

「なんとという名なのだ？あの虜囚は？」

「彼は山中幸盛（やまなかゆきもり）です。尼子（あまこ）の家臣でしょう。毛利と尼子の因縁は根深いです。」

おそらく程ないうちに毛利に殺されるでしょう。」

「そうか。」

答えてから考える。山中幸盛、どこか引っかかる名前である。

2、3日過ぎても引っかかりは取れない。

途中吉井川を渡った。

あと少して岡山城である。

しかし俺の疑問はなかなか解決できていない。

うーん、山中幸盛……

考え込む俺を桃寿丸が不思議そうに覗き込んでいる。
無視だ、無視。

毛利、尼子、山中……

これらのピースを当てはめると

あれ？そうじゃね。ひらめいた。

そうだ、そうだ。前世で結構有名じゃないか。

戦国時代を少しかじっているならわかる名前である。

何で今まできづかなかったんだろう。

虜囚ということは上月城に籠っていたということだ。
ということは、尼子側である。

そして尼子で山中姓で尼子再興のためただひたすらに働く男。

やまなかしかのすけ
山中鹿之助だ。

そうだそうだ。幸盛なんて変な名前付けてるからわからなかった。
鹿之助だよ、鹿之助。

「願わくは、我に七難八苦を与えたまえ」の鹿之助だ。
山中鹿之助は後世に名の残るほど、有名な人である。
戦もうまかった、と聞いている。武勇にも優れている。
ぜひ俺の家臣にしたい。
そういう気持ちがむくむくと湧き立ってきた。

本能寺の変まであと4年、関が原までは20年ちよつとである。
それまでに、どちらで動くのかはまだ考えていない。

もちろん他にも介入できるころはあるだろう。

俺の目指すところはとりあえず島流しは嫌だ、ということである。
それには徳川の世にしてはためである。

どちらにしても俺の直率の家臣、俺の手足になってくれる家臣が
どうしても必要である。

山中鹿之助、是非欲しい。

尼子家の再興を望んでいるのだから、毛利ににらまれるというデ
メリットはある。

しかし、どうせ毛利とは近いうちに決別する、はずである。
問題ないだろう。

「小西行長、俺は彼が欲しい。」

俺1人ではいくら家臣が欲しいと言ってもどうしようもない。

忠家さんに頼んでもダメだろう。

忠家さんには宇喜多軍大将としての立場がある。

俺は山中鹿之助を救出するつもりである。

あくまでも個人としてである。宇喜多を出すのは得策でない。

「うーん、難しいですね。」

そんな俺の気持ちを理解してか、してないかわからないが行長は面白そうに考え込んでいる。

「お前ほども案がないか。」

「いえ、あるにはあるのですが……」

「聞かせてくれ。」

行長は少し迷った後、俺に話してくれた。

「まず、毛利軍にこのまま石山城を通り過がってもらい、備前から出て行ってもらいます。」

そのあと、備中に入ってから隙を見て護送しているのを襲うしかないでしょうね。」

「そうか……」

「ですが問題があります。まずこの計画に同調してくれるもの、つまり襲う兵がいません。」

そして毛利軍が隙を見せるか。ということですが、かなり難しいでしょう。

まさに神に頼むしかないでしょうね。アーメン。」

そういつて行長は手を十字に切る。絵になるやつだ。

「むう……では無理なのか、惜しいな、惜しすぎる。」

「そんなに気になるならとりあえず毛利軍についていったら？」

何とかなるかもしれないよ？」

無責任な発言をするのは最近影が薄くなりがちな桃寿丸である。

「お前……少しは考えていえよ。」

「いえ、結構いい案かもしれません。毛利としては尼子の火種は絶つておきたいところでしよう。」

「ということは郡山まで行く前に毛利が殺害しようとするかもしれません。」

「そこならあるいは……可能性はあります。」

「行長がそういうのならそうかもしれないな、よし、じゃあ毛利軍をつけるか。」

「ええええええええええ。危ないよ、絶対に、しんじやうつて。」

「大丈夫。大丈夫。気づかれないつて。」

「八郎様、私も賛成するわけには行きません。私はお守役を仰せつかっています。」

「危ないことをさせるには。」

「行長までそんなこというの？困ったなあ。」

「俺は頭を抱える。考える時間は余りない。岡山城はすぐそこまで迫っている。」

「とりあえず忠家さんに頼んでみるかな。行長つて兵を率いたことがある？」

「いえ、私は商人上がりなので……水軍なら多少の心得があります。」

「じゃあ行長に兵を付けることは適わないか。」

「俺がそういうと行長が意外そうな顔をする。」

「商人上がりの私に兵をつけてくださるといわれるのですか……！」
「この時代、商人は徹底的にさげすまれてきた。」

「江戸時代の身分制度である士農工商がこれを如実にあらわしている。」

「俺が兵を持つてゐるなら全軍お前に預けてもいいけどね。まあ夢物語か。」

「そんなことより何とかしろよ行長。桃寿丸は……いいや。」

「そのようにいわれましても、今回は縁がなかったということで諦め
「絶対ヤダ。もういいや。俺は行く。桃寿丸行くぞ。後は任せた、
行長。」

俺は馬をおり、桃寿丸の首根っこをつかみ、行長に捕まらないように速攻軍列を離れ山の中に入る。

「ちょ、お待ちください。」

という声が後ろから聞こえたが無視する。

「これも神が与えてくださった試練ということが、アーメン。」

家臣たち

「すみません。私の不徳です。この罰はいかようにも。」

行長ゆきなが忠家ただいえに頭こづへをたれている。

「いや、罰を受けるのは八郎殿だ。今度ばかりは絶対許さんぞ。」

それにしても八郎殿は本当に七歳なのか……

山中幸盛を助けると、毛利を襲うと、何を考えているのだ。」

「真に申し訳ございません。」

「なんにしても……なんにしても……だ」

そういつて、忠家はその場で地団駄じだんだを踏む。

「とりあえず搜索のために兵を出すしかあるまい。」

2百いや、八郎様のことだ3百は出さないと安心できないか。

誰ひきか率ひきいるものはおらぬか。」

忠家ただいえは諸將を見渡す。

誰も名乗り出るものはいない。

行長は名乗り出たいが、黙っているしかない。

詮家あきいえは声を潜めて笑っている。

他の将もやつと戦が終わって帰ってきたところである。今更子供の御守などしたくない。

その時、1人の男が前に出てきた。

「私が行きましょう。」

「おおつ、明石全登殿あかしたけのり。いつてくれるか。そなたなら安心できよう。」

「お任せを。」

「私も汚名返上のため同行をお許してください。」

「うむ、許そう。」

「ほう、迷惑をかけたな。」

追ってきた行長に俺はあっさりと捕まってしまった。

目的を知られているため当然といえば当然である。

行長は泣きじゃくっている桃寿丸とうじゅまるをあやしている。

「迷惑なんてものじゃないですよ。帰りますよ八郎様。」

「帰る？何言つてんだ。これからが本番だよ。ほら、兵も揃そろったし。」

行長が口をあんぐりとあける。

「これが狙いだったのですか。」

「さあ？どうだったかなあ。兵を率いているのは誰だ？」

「私です。明石全登あかしただけのりです。以後お見知りおきを。」

何度か親父の側で見たことのある顔である。面と向かうのは初めてである。

「明石、明石か……」

前世で明石といえば明石元次郎あかしげんじろうである。

日露戦争のときの諜報活動は有名である。あと確か台湾総督もしていた気がする。

その祖先ということになるのかな？

これは使えるかもしれない。

「明石全登、なんという漢字を書くのだ？」

明石全登は地面に木の枝で漢字を書いた。

「そうか、これでたけのりか、難しいな。これからはぜんと呼ぶぞ。」

「それはよろしいのですが、帰りませんと。忠家様が心配しておら

れます。」

「忠家叔父さんが？相変わらず心配性だなあ、
気にすることはない。俺からいっておくから。」

全ての責任は俺がかぶる。」

「ですが……」

「なんだ、まだ納得できないのか。仕方ないやつめ。」

宇喜多直家が嫡男、八郎が命ずる。全ての指揮は俺が取る。いいな。」

俺はぜんとを睨み付ける。早くしっかりした名が欲しい。八郎では締まらない。

「わかりました。」

ぜんとは困った顔をしている。

「よし、ぜんと。お前が指揮を取れ。毛利をつけるぞ。」

目的は山中鹿之助の奪取だ。

行長はぜんとの軍師だ。

双方とも期待しているぞ。」

「ははっ」

二人は頷いて俺が去っていくと顔を見合わせた。

「本当にあの方は7歳なのか？忠家様の苦労がよくわかる。」

「諦めよ、ああいう方なのだ。」

二人は苦笑するしかなかった。

すでに岡山城を過ぎ、備中びうちゅうに入った。

備中とは今でいうと岡山県の西部である。

すでに俺とぜんと率いる200名は宇喜多と足が付くものを山の中に隠してある。

盗賊と見間違えられてもおかしくない格好である。

「備後までですからね。」

行長が念を押す。

「わかっている。そういえば、ぜんとも十字架をつけているが、キリスト教徒なの？」

「はいそうですよ。洗礼名はジョアン・ジュストです。」

ぜんとは十字架を握り締める。

「そうか、行長と一緒にだな。」

「おおっやはり行長殿ですか、そうでないかとは思っていたのですよ。」

「明石殿もキリシタンですか、奇遇ですね。」

他愛ない雑談をしているとふと毛利軍に動きが起った。

1人の男が馬に乗って駆けてきたのだ。

そして、山中鹿之助の近くの兵士に何かこそそと指示を出した。

「行長殿、どう思う？」

「あれは、たぶん吉川元春でしょう。」

「そうか、私もそう思う。」

「とうとう動いたか。」

俺は飛び跳ねる。

そして毛利軍に本格的に動きが起った。

山中鹿之助を護送していた兵士たちが、隊列を離れ、別の道に向かつて歩き出したのだ。

「よし、追うぞ」

俺らもそれについて行く。

「おら、出る。」

「ほう、ここが拙者の死地か。尼子再興の野望もここまでか……」

「毛利に逆らうからこうなるのだ、俺らを恨むなよ。恨むなら吉川

と毛利を恨んでくれ。」

「これも運命か。如何ともしがたし。口惜しいが、経久様、今参ります。」

「その夢、俺に預けてみないか！……！」

「誰だ！……！」

「その命、私がもらおう。」

「誰だ！……！貴様、尼子の残党か！……！」

「悪党どもに名乗る名はないわ！」

もちろん俺の顔には布を被っている。

横には同じ格好をした桃寿丸が恥ずかしそうにしている。

こういうのは吹っ切った方がいいのに。

「くそっ……へんちくりんなかつこうしやがって……」

「山中鹿之助、尼子再興のために人生をかけた男よ」

「我は山中幸盛だ。人違いではないのか」

「いや、お前は鹿之助だ。少なくとも今日から鹿之助だ。」

尼子を一時的でさえ復興させ、数多の武將を討ち取ってきた男よ。

お前の力が欲しい」

「ほう、拙者の力が欲しいと。しかし、この状況ではどうしようもあるまい」

「私が欲しいのは貴様の返答のみだ。それ以外を問うているのではないわ」

もう一度尼子を再興の道を目指したいとは思わないのか？」

「拙者に機会をくれるということか……」

「そうだ。お前は亡き勝久殿のためにも尼子再興をもう一度志さなくてはならない。」

俺の元でな。

あがけ、鹿之助！最期までみつともなく足掻いて、そして死んで逝け！」

「確かに我の悲願は尼子再興のみ。しかし現状ではどうとなるとも思えんがな。小童。」

貴様１人で何とかできるとでも？」

「ふっ」

俺は右腕を高く上げる。

背後に控えていた兵士が一斉に弓を構える。

「鹿之助を置いていけ。そうすればお前らの命は助けてやろう。」

「ひええええ。」

毛利の兵士が逃げ出していく。500対30ではそうもなるわな。

「くそっ逃げるな。相手は頭のおかしい盗賊だぞ。」

指揮官であろう人物が部下をとどめようとするも効果は上がらない。

「よしっ敵は逃げ出したぞ。追えっ」

ぜんとは部下に叱咤をかけながら駆けていく。

毛利軍は一矢交えることもなく逃げ出してしまった。

後には鹿之助だけが残されている。

俺は黒い布を取りながら、鹿之助に手を差し伸べる。

「俺の部下になれ。報酬は尼子の再興だ。」

「拙者がお主の部下になると、笑えぬ冗談だ。」

「力は先ほど見せたはずだが？」

「むう……確かに、お主、何ものだ？」

「俺か？宇喜多直家が嫡男、八郎だ。」

「宇喜多……そうか、宇喜多か。宇喜多なら尼子再興も可能かもしれないな。」

いいだろう、お主が尼子再興を助けてくれるというなら部下にでも何でもなつてご覧ぜよう。」

鹿之助が俺の手を握り返してくる。

鹿之助の力に引っ張られふりとするもののない根性で耐え忍ぶ。

こうして、鹿之助が仲間になった。

「そついえば行長も俺の部下にならない？」

「いえ……ありがたいお話ですが、商人上がりの私には荷が重い話です。」

「ふーん、そつかあ。秀吉のところでも行くのかなあ？」

「いえいえ、滅相ありません。」

厚顔無恥なやつめ。

「ふーん。俺の部下になったら、ヨーロッパ留学つけてあげるけど？」

「ようろつぱですか？」

「うん、南蛮人の本拠地。バテレンの総本山つてとこかな。」

「キリスト教の？ほんとですか？可能なんですか？かなり遠いと聞きますけど。」

行長が詰め寄ってくる。

「たぶん……五、六年じゃないかな。留学させてあげるよ？法王とかいるよ。キリストの一番偉い人。」

「なります。ならせてください。」

行長が平伏する。商人上がりだからなのだろうか。現金なやつめ。
「私も行かせてもらえないでしょうか。部下でも裸踊りでもやりま
すよ。」

ぜんと……そついえばお前もキリスト教徒だったか。

「いいけど、お前ら宗教にはまるのもたいがいにしておけよ。」

「なぜです。キリスト教は素晴らしいですよ。今の腐った仏教よりはるかに。」

「まあそうなんだろうけども、結局は人の作ったものだからさ。」

「神はいますよ。」

行長とぜんとは目が真剣だ。ちよつと怖い。

「まあ、いいや。行けばわかると思うよ。」

「見てきたようにいわれますね。」

「少し知識があるだけさ。」

俺はこの話はもうお終いと手を振ってみせる。

お咎め

「お前、今度ばかりはお咎めなしというわけにはいかないぞ。」

俺を見下ろす親父の目がある。

男色、謀略、暗殺なんでもござれの宇喜多直家だ。

「戦場離脱、主の許可を取らず部下をとる、今度ばかりは許すわけにはいきません。」

ぜひきつい罰をお与えください」

備後から岡山城に帰ってきたら、待っていたのは忠家叔父さんの雷だった。

「うつん、俺は別に気にしてないんだけどなあ。」

ただ部下を持つことは許すことはできんなあ。特に行長はなあ」

「行長ばかりではありません。山中鹿之助も毛利氏のことを考えれば引き渡すのが最善でしょう」

「山中鹿之助か……いや、鹿之助は八郎が持っておけ。しかし一応名前は変えておけ。」

まあ今の鹿之助で十分だろ。余り目立たないようにな。問題は行長だ。小西行長、そちは承諾しているのか？」

鹿之助は一足先に俺の屋敷に帰っている。

行長は俺の後ろで今度の釈明を手伝ってもらっている。

「はい。大丈夫です。今後も請け負いますゆえ」

「そうか……行長もお前が持つのもおもしろいか。わかった。お主に行長と山中鹿之助をつけよう」

「しかし、それでは他のものにもしめしがつきますまい」
忠家叔父さんが食らいつく。

「それもそうか、すまん八郎。」

お前の自主的という形で蟄居^{ちつきよ}しろ。そうだな、3年程度でどうだ？ 忠家」

「3年ですか？ 少し多くないですか？」

「罰を与えろといったのはお前だぞ。これでしまいだな。」

そうだ、鹿之助と行長のことは外に出すではないぞ。

行長はしばらく俺の家臣で、お前に預けるという形をとることにする。

鹿之助は八郎についておけ。八郎と同じく蟄居^{ちつきよ}しておれば大丈夫だろう」

この場合外に出すなというのは物理的に出なくて言論的にである。話が漏れることを恐れたのだ。

俺が早期に俺自身の部下を持ちたかったことにも関わっている。

これは宇喜多家の家風に影響する。

宇喜田直家^{うきたなおいえ}とは謀略など表ではいえないことのみで一国を取った男である。

その家臣も大なり小なり謀略と関わっている。

もし鹿之助を匿^{かくま}っていることが家臣にでもばれた場合その家臣は喜んで毛利氏に密告しに行くだろう。

そして毛利氏で好待遇を得ようとするだろう。

宇喜田家の家臣は爆弾と思っていいだろう。

「3年かあ。長いなあ」

城を出たところでため息をつく。

「耐えてくだされ。この行長も時間ができしだい顔を出しますゆえ。書物を読むことも、鹿之助にものを教わるのも良いでしょう。有意義な時間をお過ごしください」

うげつ。この時代の書物は漢文が多いから嫌なんだ。小説でもあればいいのだが孔子とか孟子とかのお堅い書物ばかりである。勉強しろということか。

「八郎。八郎」

後ろから呼び止められる。桃寿丸だ。手を振りながら走ってくる。あつ。こけた。おおつ。起き上がった。涙目だ。

「どうだったんだ？怒られたのか？」

「こつぴどくな。これから3年蟄居だ。桃寿丸の方はどうだった？」
「今回は見逃してくれるって。ただ、父上の下で勉強するようにって城勤めを始めることになっちゃった」

え？ 何？ この待遇の違い。これが日ごろの行いというやつか。

「そうか、親父のところなら学ぶことも多いだろうな。頑張ってきた」

「うん。八郎も蟄居、頑張ってたね」

蟄居は頑張るものではないと思うが、満面の笑みで応援してくれる桃寿丸に免じて突っ込まないおこづ。

俺の蟄居先になったのは山の中にある小さな寺だった。

本当は自宅の一室らしいが俺は正式な自宅というか城、居住を持つていないため特別に寺をあてがわれた。

「これはまた趣のあるところですね」

「行長、これはぼろいというのだ」

「主殿、このようなど何でもございますまい。寝れるだけましだというものです」

鹿之助。泥をすすっていたお前と不幸比べをするつもりはないぞ。
「住職。住職はいるか」

「はいはい。今行きますよー」

中から間延びした声が聞こえてきた。

出てきたのは女の子だった。女の子と少女の間ぐらいだろう。

かわいい。目がパッチリしており、短い黒髪がボーイッシュな雰囲気をかもち出しておりいい感じだ。

「住職？」

「いえ、えーっと……あなたは？ どちら様ですか？」

おどおどと声をかけてくる。

警戒されているのが一発でわかる表情と態度である。

「八郎です。こっちが鹿之助でこっちが行長。今日からこちらでお世話になるものですけど」

行長と鹿之助が俺の言葉に合わせて会釈をする。

「あー、えーっと」

指で宙に文字を書いている。別に困らせるつもりはないんだが。

「おう、お香こう。どうした？ お客さんかい？」

中から住職と一発でわかるお坊さんがいた。

袈裟をかけているのでわかりやすい。

「おう、きたか。お前が八郎か。連絡は請けておったぞ。」

俺のことをどう連絡されたのか知らないが、一国の城主の御曹司に向かつてこの態度……

お香といわれた少女とは全く正反対の態度である。

「これからよろしく願います」

「そうかしこまらんでも良い。2人と聞いていたが、もう1人は？」

「私はすぐ帰らせてもらいます。これから仕事もございますし。」

「そうか、そうか、では用意しておいた部屋でよいな。私は慶明けいめいだ。この子はお香こうという。現在この寺で預かっている。八郎とも年が近いゆえに身の回りの世話はこの子にさせることにするか」

「よ、よろしく願います」

お香が慶明けいめいの後ろに隠れながら答えた。

めっっちゃ警戒されている。

一通りの紹介を終えた後、部屋に通された。

「こちらでございます。日常生活に必要なものは一通り揃っていると思いますが、必要なものがございましたら声をかけてください」

お香は俺の部屋まで案内してくれた。

俺は持ってきた荷物を置いて足を伸ばした。今から3年間ここで過ごすことになるのかあ、なんか感慨深いものがあるなあ。

「主殿はこちらの部屋でしたか。拙者は隣の部屋になり申す。これから楽しみですな。みっちり稽古つけますからな。」

鹿之助はがっはっはと豪快に笑う。

「行長は？どこいった？」

「先ほど、城づとめに戻るといつて帰られました。」

「そうか、これからよろしく頼むぞ。鹿之助。」

蟄居及び近隣情勢 その1

てんしょう

天正7年

俺の蟄居生活は1年を過ぎた。

お寺からは未だに出れない。

蟄居とは前世という謹慎である。

表向きは自発的ということになっている。

蟄居生活は意外と快適である。前世ではひき籠りであったため問題なくすごせている。

娯楽が全くないのが大変不安だった。もちろん娯楽がないのは変わりない。

しかし最近では漢文を読んだり、古文を読んだりするのもなかなか楽しくなってきた。

源氏物語など萌え小説として読めるものだ。

何よりお香が俺のことを甲斐甲斐しく世話してくれるのが嬉しい。腫れ物に触るように扱われているし、声をかけたら逃げられることもたくさんある。

あれ？ 少し涙が出てきた。

しかし、衣・食・住が保証されていて女の子が世話をしてくれるなんてすばらしい待遇である。

しかもそれが美少女であるのだから王侯貴族の生活そのものだ。そつえば俺王侯貴族の一員なんだよな。一応。

寺からは出れないが寺の中では自由である。

最初の三ヶ月は鹿之助に武道を教わっていたが、俺に才能がないこと、やる気もないので匙さしを投げられた。

「まあ、主が武器を取るときは戦も負けでしょうから。気にすることないですよ」

気を使われてしまった。

武道に当てていた時間はお寺の手伝いをする事になった。

残りの時間は慶明や、鹿之助の話を聞いたり、漢文を読んだり、古文を読んだりしている。

蟄居といつてもは出歩くのはダメだが、訪ねてくる人を迎えるのは問題ない。

よって時たま、俺を訪ねて人がやってくる。

忠家おじさんや親父などである。

親父は政務で忙しいらしいが、できる限り時間を見つけては顔を出す。

「元気でやってるか？ 大事無いか？」

などを聞くだけ聞いて、忙しい忙しいといながら戻っていく。本当にあの直家ななおいえなのかと思ってしまう。

忠家叔父さんもやってくる。

「問題は起こしてないか？ 慶明殿に迷惑をかけてないか？」

とか聞いて、鹿之助から俺の最近の動向の報告をきくと慶明殿と一緒に「南無妙法蓮華經なむみょうほつれんげきやう」を一通り唱えた後、帰って行く。

行長もちよくちよくやってくる。

行長が来るときは桃寿丸とうじゅまるもつれてくる。

行長は必ず京や堺さかい、織田方の情勢を持ってきてくれる。

最近ではそれに対して、俺や桃寿丸とうじゅまる、鹿之助、慶明けいめい、行長ゆきなで話し合いというか、今後の情勢を議論することが日課になっていた。

俺はある程度の歴史の流れ自体知っているが、そこまで詳しくわからない。

なかなか楽しいものである。

前回までは、こんな感じであつた。

上月城の戦いで本格的に中国に手を伸ばした信長であつたが、現在では中国地方まで手を伸ばせなくなっている。

信長の家臣である、荒木村重あらきむらしげの謀反にあつたからである。

荒木村重あらきむらしげ。俺の前世では聞いたことがない名前だ。

この荒木村重という人物は、摂津せつを信長から任せられていた。摂津とは大阪と兵庫の間である。

もともとは摂津を守る守護である池田氏の家臣であつたが、織田の三好三人衆の調略に乗じて池田家を掌握した。

裸一貫からの上がった戦国武將の典型であつた。

その後、信長の家臣となり武功をあげていったらしい。

一時期では、信長の家臣として上から柴田しばた、丹羽たきが（にわ）、一滝川わ、明智あけち、羽柴はしば、荒木あらきと名を知られていたほどである。

その荒木が突然の謀反を起こす。

荒木村重が謀反を起こしたことで、信長の戦線は4つになる。

石山の本願寺、播磨はりまの三木城みきじょう、摂津せつの荒木村重あらきむらしげ、丹波たんばの波多野はたのである。

この4つには共通点が存在する。

毛利を頼っていたこと、包囲戦という形式を取っていることだ。

いつかは毛利が織田を倒す。京に乗り出してくることを期待していると考えられる。

実際、毛利はその圧倒的な水軍力でもって本願寺に物資を送っている。

しかしそれも信長の命を受けた熊野水軍、九鬼嘉隆くきよしかが毛利軍を破

ったことにより途絶えた。
世に有名な鉄甲船である。

そのほかの3つは内陸国である。毛利は補給と物資を簡単に送ることはできない。

この点、信長の戦略は徹底していたといえる。

元を断つ。物資の補給を途絶えさせる。

そうすれば物資の補給、兵の多さで誇る信長軍に抵抗できることは不可能になる。

信長の戦略眼の恐ろしさである。

さすが、信長といえる。俺は目を輝かしながら行長の話を聞いたものだった。

このような情勢に対して、議論する。この時代、京の情勢の情報は大変貴重である。

争点は、毛利が来るか、織田はこの危機を乗り越えるかということである。

一時期は備前と播磨の国境まで迫ってきた織田信長は中国地方まで手を伸ばせなくなっている。

桃寿丸と鹿之助は、毛利は来るよ派である。

「毛利は義理堅い。本能寺への支援を見るがいい。此度も参陣するだろう」

「僕も毛利は怖いと思う。信長は謀反とか起こされてるから地盤がしっかりしてないからなあ」

という主張である。

それに対して慶明の考えは信長は、一時毛利と休戦を結ぶのではないかということである。

第一次信長包囲網のときのように、土下座外交、各個撃破を行うのではないかと見ている。

「信長に人望というものがここまでないとは」

行長と俺は、毛利は来ないよ派である。というより来れないよ派である。

「毛利は来ません。現在の毛利は輝元を小早川と吉川の2人で補佐している形です。

このような体制では、毛利は内に内に籠ることになり、遠征は難しいでしょう。

それに毛利の家風もあります。毛利元就は子孫に中央に関わることを禁止する家訓を残していると聞きます。

京に進出するのは控えるのでないでしょうか？」

俺の意見も行長と大差ない。一つ付け加えるなら、補給の問題である。

毛利から京は遠い。その間の、宇喜多領、播州、摂津、を通つてやつと京に着く。

織田に対抗するにはどんなに低く見積もっても兵3万は必要だろう。

補給線がない。

仮に船で渡り上陸するとしても、3000名ほどしか輸送できない。

これは俺の考えである。

前世の史実でも信長はまだまだ死ぬようなことはないのだから、毛利は来ていないのだろう。

蟄居及び近隣情勢 その2

前回の行長来訪はこんな感じであった。
そして、久しぶりに行長がやってきた。

「八郎様、一大事です」

行長が血相変えて飛び込んでくる。横には桃寿丸とうしゅまるもいる。桃寿丸は肩で息をしている。

俺のために水を運んでくれたお香こうがビクツと反応して水を少しこぼしてしまった。

「んん？ 行長がよく来たな」

「直家様なおいえや、忠家様ただいえからおって報告があると思いますが、我が家が降伏いたしました」

「真か？ 父上が降伏したと？」

「はい。その通りです」

「相手は織田か？」

「ご明察です。八郎様。余り驚きませんな」

「まあ、いつかはそうするだろうと思っていたしな。あの父上だし」

そう、前世の本能寺の変では秀吉は毛利を攻めていた。

そして、その後宇喜多家は秀吉の下で繁栄するのである。

流れとして、降伏するのはある程度の予想はついていた。前世の歴史と変わらないだろう。

今のところ、俺がいることで歴史は変わっていないと見てよい。

「さすがですね。桃寿丸様は腰が飛び上がりんばかりに驚いておられたのに」

「行長！ それは言わないでつて言つたでしょ」

「いや、失礼した。」

私も少し余裕が出てきたのでこちらに住居を移そうと思ったので拝謁に伺つたまでです。

いかがでしょう？」

「俺はいいが、住む部屋があるかどうかは慶明けいめいに聞いてくれ。

俺は人質にいかなくていいの？」

「いや、もう驚いたりしませんよ。私の口からは何もいえませんが近いうちに忠家様か直家様が来られるでしょう」

ああ、人質になるといふことね。人質かあ。やはり余りいい気分にはなれないものだ。

「で、京や織田家の様子はどうなつてる？」

「長くなりますゆえ、今日の夜にでもお話しましょう。」

行長は、席を立ち、慶明に挨拶に行った。

部屋があるかどうかを聞きにいくのだろう。

「人質に行かれるのですか？」

お香が給仕の手を止める。

俺はお茶をゆつくり飲み干す。

「何だ聞いていたのか？」

「すみません。すみません。」

いつもの調子でお香はあやまってくる。俺のことが怖いのだろうか？ 一年前から一向に変わらない。ついからかいたくなってくる。

「聞いたな？ なら生かしてはおけん。そこに直れ、手打ちにしてくれる」

冗談半分のつもりで口調を荒げる。

だが俺への反応は予想外なものだった。

「いやああああ。すみませんすみません。許してください。」

マジ泣きである。

え？　そこまで？　なんで？

俺の思考回路が真っ白になると同時に、騒ぎを聞きつけた慶明が入ってくる。

「どうした？　これは、いったい？」

「いや、その……冗談のつもりだったんだ」

言い訳にもなっていない。

大体の事情はわかったのか、慶明はお香を俺から引き剥がし、連れて行く。

「遊びが過ぎるわ。女子供を脅して楽しいものでもないわ。」

言い返す言葉が見つからない。

悪いのは俺である。

1人残された部屋で寝転ぶ。

あの反応はないよなあ、もう少し冗談というものをわかって欲しい。

精一杯自己弁護するものの、悪いのは自分という意識があるため気分は晴れない。

自己嫌悪の気分ではいっぱいである。

1人で考え込んでいると慶明さんが入ってきた。

「どうでしたか？」

「だいぶ落ち着いたようじゃ」

「この度はすみませんでした」

「いや、昔はもっとひどかった。だいぶよくなった方だよ」

あれでよくなっているのか。昔はどんだけひどかったんだよ。

「話しておかなかった私が悪いんでしょうね。それにしてももう少し考えて行動してもらいたいものですね」

「悪かった。それにしてもどうしてあんなことに……」

「私が話せることは限られているが、それでよろしいか？」

「うむ、よろしく頼む」

「5年も前のことか。わしが戦場の跡で拾ったのだよ。」

両親らしいむくろの横に座って泣いておったのが彼女だ。」

「五年前ってまさか」

「そう、宗景とお前の父、直家の戦いだ。」

「そんな……じゃあお香の両親の仇は、俺の父親ってことか。そのことをお香は？」

「もちろん知っている。が、今時そのようなこと巷であふれかえっておるわ。」

お香も仇などとは考えておらんだろう。

しかし、預かって気づいたのだがどうも侍をみると拒絶反応を起こすようであ。

お前を預かるときもどうしようか考えたのだが、よく聞けばまだ幼子と聞く、これならお香の治癒にもいいじやろうということに預かってみたのだが。

失敗だったかなあ……」

そういう事情があったのか……完璧に俺のミスである。

悪いことをしてしまった。

「それは、本当に申し訳ないことをしてしまった。」

「私にいつてもしょうがない。後であやまっておきなさい」

慶明さんは、そのまま席を立ち部屋から出て行った。

また1人つきりで部屋に残されることとなった。

1人つきりでぼんやりと天井を見ていたが、考えが煮詰まってしまっとうしようもなかった。

「とりあえず、謝りにいくか」

俺は意を決して立ち上がった。

「入るぞ」

お香の部屋に声をかける。

「どうぞ」

中からか細い声が聞こえてきた。

そのままふすまを開け中に入る。

中は俺の部屋と大差なかった。

畳に床の間があるだけだった。

女の子の部屋とはこんなものかと思うが、前世の記憶と比べても仕方がないと気づく。

そういえば、俺前世では女の子の部屋に入ったことなんてないんだっただ。と改めて思いなおす。

何と比べるのかと内心苦笑する。

「先ほどは、すみませんでした」

申し訳なさそうにうつむいている。

「いや、悪かったのはこっちの方だ。本当に申し訳ないことをしてしまった」

「いえ、そんな……」

お香は言葉に詰まっている。

「手打ちとかはほんの軽い冗談のつもりだったんだ。

許してもらえないかもしれないが、謝ることしかできない。ごめんなさい」

俺は正座し、両手を畳につける。

「いえ、そ、そんな。そんなことをしていただかなくても」

「いや、これはけじめだ。すまないことをした」

「あ、頭を上げてください。私、きにしませんから」

俺は頭を上げる。精一杯努力して笑っているお香の姿が映る。罪悪感でいっぱいになる。

「……」

「……」

とりあえず、許してもらったみたいだが二人して沈黙してしまう。

「あ……」

「う……」

またしても沈黙してしまう。タイミングが良くなかった。
軽口を叩くしかない。

「こんなにかわいい子を殺すなんてもったいないこと俺にはできないよ、はははは」

「え……そんな……いえ……」

あれ？場を和ませようとしたのに何この空気。余計ひどくなっている？

なんか恥ずかしいこといつてるし。

「私かわいくなんでないですよ村でも顔のことや体形のことでいじめられてたしてもほめてくれて嬉しかったです」

しばらくうつむいていたお香だが一気にまくしたててきた。

「え？ いじめられてたの？ そんなにかわいいのに？」

「いえ、私なんて……」

再びうつむいてしまう。

空気が悪すぎる。

とりあえず、謝ったし許してもらえた？と思う。こちら辺で退出すべきなのかもしれない。

「俺はこの辺でお邪魔するね。ほんとに今日はごめんなさい。」

俺はふすまを開け、その場を離れた。

そのまま部屋に戻る。

まもなく慶明が晩御飯ができたことを知らせに来る。

食卓につくとすでにみんな揃っていた。

桃寿丸もいる。

「今日は泊まりか？」

「うん。もう遅いし明日帰るよ」

ちなみに、この時代基本的に一日二食である。昼食は存在しない。自然とおながが減るものである。

そんな中に出されるのは精進料理といっていいほどのものである。精進料理。簡単に言えば、粟やひえに味噌汁（具はわかめしかない）漬物、煮物程度である。

そしてさらに問題なのは、肉を食べる機会が全くといっていいほどないのだ。

甘いものなど一切食べていない。10年近く甘いものを食べていない。

「八郎様、今日は猪が取れましたぞ」

そんなもので成長期の俺が我慢できるわけがない。

鹿之助に頼み、肉をとってきてもらうことにしている。

毎日ではないが、自分で肉をとる機会を作らなくては、肉にはありつけない。

慶明さんに殺生はダメと言われるかと思ったら、そうでもないらしい。

慶明さんも肉をとってきたときは嬉しそうにしている。

この時代の坊主の墮落ぶりがあらわれている。あれ？でも前世でも肉食べてたよな。変わりないのか。

たまにお香と目があうが、すぐに目を伏せられてしまう。

謝った。俺は謝った。許してもらえたはずだ。

罪悪感に押しつぶされそうになりながらも、食事を終えた。

食事が終わると、恒例の行長の報告に入る。

時期はすでに冬に入っている。みんなで囲炉裏に座りながら行長の話を聞く。

お香も当然参加している。

「前はどこまで話しましたか？」

「信長の4正面作戦のところからかな」

この時代京の情報は余り入ってこない。備前びぜんから京は遠い。

親父とかはある程度わかるかもしれないが蟄居ちつきよ中の身としては表立って聞くこともできない。

行長の情報は貴重である。

「丹波たんばが落ちました。」

行長の一声はここから始まった。

「丹波と申すと明智光秀か？ いかようにして落とした？」

鹿之助が真っ先に反応する。

「そうではありません。そう、急がないでください。」

確かに丹波に当たっていたのは明智光秀ですが、落としたのは違います」

「羽柴秀吉か」

俺が答える。

「ご名答です。秀吉殿は戦の定法、弱いところから叩くということを実践しました。」

補給が少なく、兵が疲れている丹波に目を付けたのでしよう」

ちなみに丹波というのは京都と兵庫県の間である。平地が多い場所らしい。

行長は続ける。

「秀吉殿が丹波に入ってから一瞬の間に丹波を平定したと聞きます。」

信長殿は秀吉殿の働きを見て、大いに喜んだらしいです。」

「明智光秀殿はおもしろくないな」

慶明けいめいは頷きながら言う。

「え？ どうして？ 丹波が平定できたってことはいいことじゃないの？」

桃寿丸は首を傾げる。

「もちろん織田にとってはいいことだが、明智光秀は長い期間丹波の攻略に時間をかけていたのだ。」

これに秀吉が介入して一気に形勢が変わるとなるといい感じはしないだろうな。」

慶明が返答する。

「慶明殿のおっしゃるとおりです。確たることは聞いておりませんが、光秀殿は悔しがつていると風の噂で聞きました」

どうやらすでに光秀と秀吉の対立構造ができつつあるらしい。

「丹波が落ちたことがしれると播磨はりまの荒木氏もすぐに攻略しました。」

荒木村重は妻子と家臣を置き去りにして逃亡したそうです。

信長殿はこれに対したいそう激怒し、城に残った妻子、家臣、避難した領民までも全員殺戮したそうです。

残りの別所氏べっしょの三木城みきじょう、本願寺が落ちるのも時間の問題でしょう」と締めくくった。

「丹波が落ちるところまですんなりいくとわな。パズルみたいだな」

「パズルですか？ なんです？ それは？」

「いや、独り言だ。きにしないでくれ」

俺と行長が会話していると、ついていけなかったであろうお香がおずおずと発言した。

「あの……なんで丹波が落ちると他の3箇所も攻略されてしまうんですか？」

桃寿丸もそうだとはいわんばかりに首を振っている。

桃寿丸……お前は気づこうよ。

「土気ですな。反信長連合は4箇所でせめぎあってこそであるゆえに、一箇所が崩れると存外にもろいもの。」

鹿之助が言葉を返す。

それで合点がいったのか桃寿丸もお香も感心している。

「やはり、今回も鍵は毛利か。」

俺は食後のお湯を飲む。すっかりぬるくなっている。

「はい、ですが今回は我が宇喜多家が信長に降伏したため事情が少し変わってきますね」

「なに！？ 行長、なんと申した！！！」

鹿之助が行長の胸倉をつかみからんとする。

「宇喜多が降伏したと言ったままでです」

鹿之助は元織田家の家臣である。それだけに思うところがあるのだろう。

「それでは八郎様も人質となれとでもいうのか、行長！！！」

「私には何もいえません。ただ、近いうちに直家様が忠家様が来られるでしょう」

これには慶明も驚いている。

「お前はそれでいいのか！！！人質だぞ！！！」

「私はどこまでも八郎様についていくまでです。あなたは違っても？」

「ううむ……すまんんだ」

鹿之助は腰を下ろす。

「私も同じ気持ちです。ですがこればかりは……」
できれば俺のいないところでやって欲しいものだ。
こそばゆいというかむずむずしてくる。

このまま今日の話し合いは気まずい空気のままだった。

「今日はお疲れでしょうから考えるのは明日にしましょう」

と慶明がお開きにしてくれなかったら針のむしろ同然だっただろう。

床に入る。

今日はいろんなことがあった。

人質行きが決まり、お香に嫌われ、仲直りして、大変な一日だった。

俺の知る限り歴史は前世の歴史と変わらず動いている。

ということは俺の死はまだまだである。そして、島流しの運命を変えるにはどこかで歴史に干渉しなくてはならない。

そういえば、俺の嫁って史実では誰なんだっけ？

お香……じゃないよな……

バカなことを考えてしまった。

異様に恥ずかしくなってくる。

もう今日は寝よう。そうしよう。

お香の苦悩

お香は苦悩くうしていた。

宇喜多直家うきたなおいえ、私の両親の敵である。

両親はしがなない村の百姓だった。貧しいながらも私や弟たちを愛してくれた。

今思えば楽しい日々だった。

しかし、戦争によって両親も弟たちも殺されてしまった。

私は山で山菜を摘んでいたため難を逃れたのだった。

私が見たのは、たぶん父であろう頭の潰れた男の姿と、腹から子宮にかけて真つ二つに切り裂かれた母の姿、手足のない弟の姿だった。

後に聞いたところによると、宇喜多直家がかかわっていたらしい。

今の世の中では仕方ないとよく言われる。領主を恨むのも筋違けいめいいらしい。

慶明さんにも忘れた方が良いといわれた。

両親がいないのは私だけではない。あふれかえっている。

慶明さんに付いて村を回るときなど同じような戦災孤児があふれていたこともある。

それを考えれば私なんて恵まれた方である。

慶明さんに出会えたからだった。

もし出会えなかったらその場でのたれ死んでしまうか、人買いに売られてしまったらう。

慶明さんには感謝しきれないぐらいに感謝している。

父と同じような暖かさもある。

最初のころは刀をさしている人を見るたびに悲鳴を上げた。

最近ではそのようなこともなくなりだいぶ良くなってきたと思っていた。

そのような時に慶明さんはあの男を連れてきた。侍、よりによって宇喜多直家の息子だった。

殺したいくらい憎い。私の前に現れたらただではおかないと思っていた。

しかし、実際に私の前に現れたのは私のかつての弟ぐらいの年齢の子供だった。

私の決心は揺らいでしまった。

それでも、と思いなおし懷に収めた短剣で暗殺を試みた。

それも私の覚悟が足りないのか、未遂に終わってしまった。

どうしても手が震えてしまい行動を実行することができなかった。そのときにあの男は私を叱責したのだった。

ばれたのではないか？

そう思った瞬間怖くなってしまい、泣き叫んだ。

あのころと同じように……

「入るぞ」

再び私の前に現れたとき私は処罰されるものだと思った。

相手はこの国の領主の世継ぎなのだ。

「どうぞ」

私は覚悟を決めていう。

「先ほどはすみませんでした」

もちろん本当に許されるとは思っていないが、少しでもまともな死に方がしたいと思ったことは事実だった。

「いや、悪かったのはこっちの方だ。本当に申し訳ないことをしてしまった」

頭を下げてきた。まさか侍が頭を下げるなんて予想していなかった。

私が混乱しながらそれでもこれ以上の失態は避けなくてはと思った。

ていると、さらに思いがけないことを口にされた。

「こんなにかわいい子を殺すなんてもったいないこと俺にはできないよ、ははははは」

かわいい？ 私が？

私をお世辞にもかわいいといってくれる人はいなかった。村でも、町でも。

せいぜい母に「よく気がつく子だね」ぐらいしかいわれなかった。髪も長いわけでもないし、ふくよかでもない。

このようなこといわれたのは初めてである。

悪い気はしない。それどころか顔が赤くなってしまうのが自分でもわかってしまう。

相手は侍だ。自分に言い聞かす。

その後何を言ったのかわからない。完全に混乱してしまっていた。宇喜多八郎、普通の侍とは少し違うのかもしれない。

そんなことを思った。

一ヶ月ほどの時間が過ぎた。

その間寺での生活は平穩そのものだった。

行長が加わることによって、俺の読書、兼勉強もよりはかどるところとなった。

行長が京に行くことがなくなったので、各地、主に織田のことは一切わからなくなってしまった。

しかし、行長の見聞は計り知れない。朝鮮語もできる。計り知れないやつだ。秀吉が重宝した理由がよくわかる。

鹿之助の尼子復興活動のことも聞かせてもらった。

思わず涙が出してしまった。俺が大成したら絶対幸福にさせてやる。昼は勉強、寺の手伝い、夜は家臣から話を聞くのが主な生活である。

問題はお香である。

一応、許してくれたらしいが、相変わらず俺との距離は縮まらない。

この中では一番年が近いのだからもう少し仲が良くなりたいものである。

そう、お香である。

お香のことで面白いことがある。

俺はお香はかわいいと思う。将来は美人になるか、このままかわいさを残して成長するのか大変楽しみである。

俺はロリコンではない（2次元以外）が、お香に触手が動かないかといえば……いろいろ規制もあるのでいえない。

しかし、である。

どうにもおかしいことに誰もそうは思わないらしいのだ。

「気立てのいい子ですが、美人というのはどうでしょう？」

というのが一般的見解らしい。

俺は前世では女の子の趣味は悪くなかったはずなのに……

そうかっ！！！！ 前世で女の子の趣味が悪くなかったからこそなのだ。

今は400年余り昔である。さらに西洋の価値観があまり、全くといっていいくらい入ってきていないのだ。

現在と美人の基準は違うのである。違って当たり前なのだ。

なんだ、俺ここではB専なのかぁ……

勝ったような負けたような微妙な気分である。

「失礼します」

お香が入ってくる。

「うおっ」

いきなり考えていた人物がやってきたのでびっくりしてしまう。

「どうかされましたか？」

おずおずと聞いてくる。やはりかわいい。誰がなんといおうと俺の価値観でかわいければそれでいいと思う。

「いや、何か用？」

「鹿之助様が鹿をおとりになつたので八郎様に見せたいとおつしやつていましたので、お呼びに参りました」

「あいつ、俺が鹿之助なんてあだ名つけたからあてつけてやがる。鹿しか取らないじゃないか」

「そのようなことは」

お香は軽く笑う。

「やっぱ笑つた方がかわいいね」

最近ではなんとか俺の前で笑ってくれるようになった。ほんの少しではあるが、大事な一步である。

「失礼しました」

すぐに元に戻つてしまった。残念だ。

「鹿之助にすぐいくからつて言つておいて」

「わかりました。それでは失礼します」

なんだかんだで蟄居生活も悪くないなと思ひ始めた今日この頃である。

戦国の異端児 12話

俺の元に忠家叔父ただいえさんがやって来た。

行長ゆきなに人質になることを教えてもらってから、結構時間がたった。心の準備はできている。

「我が宇喜多家うきたは織田家に降伏しました。しいては真に不憫なことながら八郎様には人質として姫路城まで行ってもらわなくてはなりません。」

つきましては、ぜひ宇喜田直家様にあっただけないでしょうか？」

「親父に？ わかった」

「それでは、本日中にもここからお立ちになるということでしょうか？」

「また、急な話だな、わかった。すぐ支度しよう」

そういつわけで俺、小西行長こにしゆきなが、山中鹿之助やまなかしかのすけ、慶明けいめい、お香こうは揃って岡山城まで行くこととなった。

慶明とお香は俺が人質に行くと言ったら

「姫路ですか？ 私もあなたとその家臣の話を聞いていると俗世と関わりたくなってきました。私も付いていてもよろしいか？」
とやってきた。

「慶明さんが行かれるのでしたら私も参ります」

ということ、なし崩しでお香も一緒に来ることになったのである。

岡山城で出迎えてくれたのは親父である。

親父は前あつたときよりずいぶんやつれていた。
年のせいだろうか。

「八郎や、よく来てくれた。人質の件は本当にすまないと思って
いる」

「いえ、人質は武門に生まれたものの勤め、父上がお嘆きになる
ことはございますまい」

「そうか。そういつてくれるとうれしい。私としては人質になど
だしとうなかつたんだが……」

「父上、此度の降伏よく決心なされた。これで宇喜多家も安泰で
しょう」

「あいかわらず、頼もしいことだ。行長、鹿之助、ん？また家臣
を増やしたのか？

女子もおるではないか」

お香と慶明のことであろう。

「まあそのようなものです。」

「うんそうか、そのほうら、八郎をしつかりと支えてやって欲し
い。頼むぞ」

「ははっ」

みんなが頭を下げる。

「兄上、そろそろ八郎様の出発の時間です」

忠家が水をさす。

「うん？　そうか？　わかった。それでは退出するが良い」

親父は名残惜しそうだ。

「親父は変わったな。どうしたのだ？」

俺の前を歩いている忠家に声をかける。

「ご病気です。」

忠家が声を潜めて答える。

「長くないのか？」

「……たぶん」

「そうか、もう少し生きてもらいたかったな。」

「……」

「忠家、俺は若くしてこの城を継ぐことになるだろう。」

譜代の家臣、一門衆をまとめることはまだ無理だ。見かけがこんなだからな。

お主が頼りになるだろう。俺を裏切るな。そうすれば宇喜多家の安泰ぐらいはなんとかしてやろう」

忠家は涙をこぼした。

現在宇喜多家は存亡の危機といってもいい。

つい先日まで仕えていたといつていい毛利家を裏切り織田方についた。

織田は我ら宇喜多家を信用していない。今後、織田家が本格的に毛利侵攻をするまでそう長くはないだろう。

しかしその長くはない時間を宇喜多家が守りぬかなくてはならない。織田家の毛利家からの防波堤の役目を果たさねばならない。

しかも領主は病気で危険な状態である。

「八郎様。これから毛利と戦い、さらには織田と渡り合っているのかなくてはございません。」

そのお覚悟があたりで？」

8歳に聞かせる言葉としては過ぎたものと忠家も思っているのだろう。

「俺に任せろ。お前は何も心配しなくていい」

8歳が50代の大の男を慰めている。

忠家は声を殺して泣いていた。

その日のうちに姫路城に向けて出発することになった。
同行者が結構多くなってしまった。

人質第2号として桃寿丸。とうじゅまる

俺の家臣である小西行長、山中鹿之助。

そして連れ添いとして慶明、お香。

俺の相談役とし長船又三郎貞親、ながふねまたさぶろうさだちか岡平内家利、おかへいないえとし富川平助秀安の三
人をつけた。とがわへいすけひでやす

忠家の英断である。この三人は実質宇喜多家を取り仕切っている
男たちである。

宇喜多家の首脳部を俺の元に移動させた。

これは歴史とかなり違っているだろう。

宇喜多直家の死は近い。それまでにこの三人に忠誠を誓わせるこ
とができれば宇喜多家をほぼ掌握できたことになる。

疑問に思つかもしれない。親父が死んだら宇喜多家の家臣は全て
俺のものとなるのではないか。

このような考え方は、俺の前世の江戸時代にできた。

親父の家臣は親父のためなら命を捨てられるとついてきたもので
ある。

俺のためではない。そうでなければ戦争などできないだろう。

忠家は俺に全てを委ねるつもりである。

毛利氏との戦いは残っている。宇喜多が織田に付いたことで、織
田の尖兵として毛利と戦わなくてはならない。

その時期にこの3人をつけたことは忠家としては腹を切るような
思いであつたに違いない。

「八郎、どうなるんだろうね、僕たち」

桃寿丸は全体的に暗い。まあ人質としてはこっちの方が正解といえる態度だ。

「桃寿丸、それと……慶明もだ。あとお香もか。すまないが、これから俺のことは八郎様と呼んでくれ。

敬語もつけてくれ。特にあの三人の前では」

俺は声を潜める。

「家臣になれってこと？ 僕はいいけど慶明さんたちまでそうすることはないんじゃない？」

「いや、そういうことじゃない。とりあえず俺がこの中で一番偉いというか一目置かれてるという印象だけでも着けておかないといかんからな」

「まあ僕は将来八郎の……八郎様の家臣になるのだからいいよ。思ってたより早かったなあ」

「私も構いませんよ。無理してついてきた身です。それぐらいのことは、八郎様」

「わ、私もですか……！……わかりました」

備中から備前に行き播磨につく。

宇喜多家と織田家はすでに隣接している。

「これが姫路城かあ、感慨深いなあ」

前世では一度は行きたいと思っていた。まさかこんな形で訪れる

ことになろうとは。

確か黒田官兵衛孝高から秀吉に譲られた城だったなあ。
くろたかんべえよしたか

城内に入ろうとすると、門番に呼び止められた。

「八郎様ですね。こちらへ」

誘導されるままに奥に入っていく。

「この中でお待ちください」

部屋の中に通される。秀吉の現在の居城というからどれぐらいきらびやかなのだろうかと思ったが、案外質素だった。

「まもなく筑前守様が参られます」
ちくぜんのかみ

桃寿丸が平伏する。
とうじゅうまる

そのほかの面々もそれに習う。

俺も慌ててみんなの真似をする。

頭の上の方からかすかに衣擦れの音がする。秀吉が入ってきたのだろう。

「これはこれは、宇喜多殿。遠いところをよく参られた。顔を上げてくだされ」

秀吉は上座から立ち上がり俺のところまで来ると腕をつかみ、俺の顔を上げさせた。

不思議と悪い気はしない。

「宇喜田直家が嫡男、八郎と申します」
ちやくなん

俺はわくわくしながら顔を上げた。かの有名な豊臣秀吉との初対面である。

ドキがムネムネしてくる。

あれ？ 猿には似てないよな？

予想に反して秀吉は猿には似ていなかった。

50代ぐらいのちよつと痩せた子男である。

いかん。いかん。

相手は秀吉である。外見で判断したら恐ろしいことになってしま

う。と心を入れ替える。

「筑前の守様、お会いできて光荣です」

「そうかしこまらずとも良いわ。人質生活はつらいこともあるかと思うが、これからこの猿めを飯の父と思ってよいぞ」

「ありがたき幸せに存じます」

「はっはっはっは、宇喜多殿は堅苦しくていかんわ」

「なにぶん、緊張しておりますので、粗相がありましたも多めに見てくださいますよう、よろしく願います」

俺は目の端で秀吉の後ろに座る人物を捕らえた。

顔と体はドクロのように痩せている。

足を投げ出して座っているみたいだが、その足は紺に覆われた布で隠されていて良く見えない。

戦国時代で秀吉の下につき、足が悪い人物は1人しかない。

黒田官兵衛孝高である。

次の瞬間、黒田官兵衛と目が合った。

俺は即座に目をそらした。

「ん？そこにいるのは小西行長殿ではないか？ 久しぶりよのお」

「ははっ！ しばらくぶりです。」

「元氣そうだのお、どうじゃ、わしの配下に来ること考えてもらえたかのお？」

行長……お前やつぱ面識会ったんだ。まあある程度は予想はついていたが。

「ありがたい申し出ですが、私にはもつたいないお話です。」

「むう、そうか？ まあよい、気が向いたらいつでも来るが良い。厚遇するぞ」

俺の目の前で家臣を勧誘するなよな。

次に秀吉は、鹿之助の方を見るが一瞬ぎよつとするような表情を見せた後すぐに破顔した。

「これはこれは、鹿之助殿。生きておられたのか。よかった、よかったあの時は助けられなくて真にすまなかった。

わしはのお。ずっと心にのこつとつたのじゃ。いやぁ真にめでたい」

しらじらしい、しらじらしいが、なんともいえないこの愛嬌。これが器量というものか。

「その方らは？」

「長船又三郎貞親にございます」

「岡平内家利にございます」

「富川平助秀安にございます」

それぞれが返事をする。

「宇喜多の重臣ではないか。いやいや失礼した。」

「いえ、われらは八郎様の相談役で参りました。」

戸川秀安が代表して答える。

「そうか、そうか、八郎様は家臣からの信頼が厚いと見える。うらやましい限りじゃ」

「秀吉様、そろそろ」

後ろに控えていた黒田官兵衛がいう。

「もうそんな時間か。いやいや、上様も人使いが荒くてのお。おちおち話もできぬわ。」

では、八郎殿。何か困ったことがあったらわしに何でも言ってくだされ」

そついい残して秀吉は出て行つた。

台風のような人だったなあ。終始ペースを握られてしまった。しまった！！！！左手の指の数見るのを忘れてしまった。

「官兵衛、どうみる？」

秀吉は官兵衛を連れて廊下を歩いている。

「まだはつきりとしたことはわかりませんな」

「おんしには悪いが、播磨の田舎侍よりよっぽどできるぞ」

「耳が痛い限りで」

「小西行長、山中鹿之助、宇喜多の首脳部があの小童に付き従つとる」

官兵衛は首をかしげる。

「一瞬ですが、私と目が合いましたな。心のうちを見透かされた気がしました」

「おんしもそう思ったか、ならわしの勘違いじゃなかるうて。長生きはするものじゃな官兵衛」

秀吉は忙しい。これから三木城の攻略にあたらなくてはならない。秀吉は知らない。この八郎と名乗る戦国の異端児がこの後秀吉の人生を大きく変えることになるわ。

三木城 13話

三木城 みきじょう

前に述べた織田に対抗する4つの勢力のうちの最後の一つである。俺は秀吉に頼んで見学させてもらうことにした。

また見学をしている。

前回の上月城の戦いといい、今回といい俺、見学しかしてない。まあだからといって戦闘の指揮を取りたいというわけでもない。できれば俺は戦争はごめんである。

け、けっして戦闘狂なんかじゃないんだからね

まあそれは置いておいて

前回の上月城の戦いでの俺の目当ては、織田が備前に進出したというところで織田の戦闘を見ることが、毛利の軍営を見ることが、あと純粹に俺が戦争に慣れておこうということである。

運がよく、こにしゆきなが小西行長、やまなかしかのすけ山中鹿之助という有能で信頼できる家臣を得ることができた。

今回はながふねさだちか長船貞親、おかいえとし岡家利、とがわひでやす富川秀安に危機感を持たせることを目標にしている。

なおいえ直家以来の家臣であるこの3人の重臣たちに織田を裏切ることは得策でないと思わせなくてはならない。

本当は俺自身に忠誠を誓わせることができればいいのだが、今の俺では難しい。

9歳児にそんなことできるといふほうが無理がある。

そついうわけではしばひでよし羽柴秀吉に頼み込んでみきじょう三木城攻めを見学することを承諾させた。

ながふねさたちか おかいえとし とがわひでやす
長船貞親、岡家利、富川秀安の3人は3者3様の表情を浮かべて
いる。

3人とも表情を変えることができただけ、さすがといえよう。

「すごい人数だね？　なんか華やかだし、戦争してるとは思えな
いね」

桃寿丸とつじゅまるが織田の軍勢を眺めてため息をつく。

うーん。惜しいんだが、もうちょっとというところか。

「織田家はこれだけの人員をもって城を包囲してる。しかもはた
から見ても華やかだとわかるということとは？」

俺は桃寿丸をいたずら気分を試してみる。

「ということは……織田家はおつきいてことだね」

間違っではない。間違っではないが、もう少し踏み込んで欲しい
ところである。

まあ簡単に理解できるものでもない。

「行長、鹿之助、ちよつと」

俺は両名を手招きで呼び寄せる。

二人は慌ててこちらに駆け寄ってくる。それを見た慶明もおもし
ろそうにこちらにやってくる。その後ろをお香がトテトテとついて
いる。

「桃寿丸、お前を敵の大将とするよ」

「ええ！　いきなり？　まあいいけど……」

「で、鹿之助は桃寿丸の家臣、俺は行長を家臣と仮定するわけだ。
俺がお前の領地に踏み入ったとする。どうする？」

「戦う」

「いや……まあそうなんだけど、そうだな……兵数は俺のほうが
たくさんだとすると？」

「それは困ったなあ、鹿之助どうする？」

家臣に広く意見を求めることは悪いことじゃないが、丸投げかよ。
「籠城、でしような」

「正解。基本的に籠城戦になるんだ。」

「でも援軍がない籠城戦はしちゃいけないんじゃないの？ 信長もそれで桶狭間で合戦を選んだんでしょ？」

「それも正解だけど、置いとして話を進めるよ。」

俺が桃寿丸の領地に兵を引き連れていく。そうすると桃寿丸は籠城するわけだ。

俺はもちろんお前の城を蟻の一匹出れないように囲む。」

「じゃあ僕は食料が尽きるまで徹底的に抗戦するよ」

だいぶ桃寿丸のやつ乗ってきたな。

「そう、そうなる。こつちに鉄砲があれば俺もやりようが出てくるのだが、まあこれもややこしくなるから置いといて。」

俺は無理やり攻めると被害も大きくなるので無理に攻めることはできない。

ここで調略、謀略が出てくるわけだ。俺は桃寿丸の家臣、鹿之助にお前を裏切るように勧誘する。

これが成功すれば城をとれ、失敗すれば城は取れない。

いうのは簡単だが、ここで成功する可能性はかなり低い。」

「じゃあ、どうなるの？」

「基本は俺はこのまま城を囲んである程度時間がたったら帰るしかなくなる。」

「え？ 帰っちゃうの？」

「帰るしかないだろうね。」

これが旧来の今までの戦争のやり方というわけだ。

まあ例外も多くあるけど、それは置いとくよ。

こんなことの繰り返ししているから戦国時代みたいな100年単位の戦争状態になっちゃうわけだ。」

「小規模な戦いか、城を含めた戦争ばっかで死傷者が少ないからってこと？」

「そうそう、ここまでは大丈夫みたいだな。
じゃあ、今回の戦いにうつろうか。」

俺はお前の領地に攻める。お前は籠城するわけだ。ここまでは一
緒だ。

だけど、俺は決して帰らない。城を囲んだまま2年でも3年でも
耐える。」

「旧来の戦い方でも帰らなければいいだけじゃないの?」

「前はそんなことできない。なぜだと思っ?」

「職業軍人? を使っているから?」

「そう、それは大変重要だ。でもまだある。兵站の維持と、補給
を絶やさないからだ」

「兵站? 補給?」

「前線で戦う兵に届けるのが補給。兵站は補給を整えるためのシ
ステムって考えていいと思うよ。」

「システム? なにそれ?」

「すまん、すまん。仕組みというか、体制、制度かな」

「そうか、兵站、補給か」

桃寿丸はしきりに首をかしげている。

兵站、補給。日本史でも異端なことに信長、秀吉はこの2つを大
変効率的に使った。

三木城の合戦は前世の有名な小田原兵糧攻めの簡易縮小版といえ
よう。

この後、俺たち一行は姫路城に帰った。

帰るころに三木城が落ちたとの連絡があつた。

城主の別所長治およびその一族は全員切腹。それによって城兵の
命は助けられた。

秀吉の以後の城攻め処置はこの時確立した。

三木城 13話（後書き）

どのような感想であれいただけると大変励みになります。
書こうという気になります。

お香 指輪 14話

人質生活。

する事はたくさんある。俺以外の人質との親交を深めたり、秀吉の部下と親交を深めたりしなくてはならない。

島流しを回避するために。

とまあ人質生活はなかなか大変なのだ。

そんなわけであるが、元来怠惰な俺はそんなことをする気はもうとうない。

引きこもりに多くをもとめないで欲しい。期待をかけないで欲しい。最低限していればいいのだ。

部屋でボーっとしているのも飽きてきたので、適当な書物を取ってみる。

俺の部屋には足の踏み場もないくらいに本が散乱している。

書物は貴重なものらしく、行長や慶明に怒られるがやめられない。

「八郎様、いらつしゃいますか？」

「んん？」

俺は顔だけ障子の方に向ける。

お香が入ってきた。

「これを八郎様にと、行長様が」

見ると、俺の要求していた精鋭部隊千人の概算らしい。

「後で見ておくからそこら辺置いといて」

今は仕事なんかする気になれない。

再び本の世界に入ろうとする。

「八郎様、少し散らかりすぎじゃないですか？」

お香が俺に向けて喋ることはめったにない。俺の質問などに返答することはあっても向こうからは少ない。

俺は少し驚いて、再び顔を向けた。

あれ？　かすかに怒っているよね？
眉間がピクピクしてる。

「お香……さん？」

恐る恐る声をかけた。

「八郎様、本を読むことは結構です。お仕事もしっかりやっています。」

私は八郎様のそういうところは尊敬しております。侍ですけど……しかし、これは何ですか！」

「え？　部屋？」

「違います！　こんなに散らかして。片付ける女中さんとかはいないんですか？」

「いや、知らない女の人が部屋に来ると落ち着かなくて」
前世での母ちゃんの暖かい置手紙とエロ本がトラウマになっているのだ。

「もういいです。今から私がやります。八郎様も手伝ってくれま
すよね？」

顔は笑っているが声が恐い。

問答無用である。

「はい……わかりました」

お香はテキパキと部屋を片付けていく。

本は本でまとめ、いらないものはどんどん部屋の外に出して、庭に捨てていく。

「あ！　それはダメ！」

お香がギロリとこちらを睨む。

ひっ！

ああああああ。俺が作った木彫りの美少女フィギュアが……
「これもないものですね、あとこれも、これも」

戦国時代に前世の下着を広めようと思って作ったのに……
こんなにやくで作ったオナホールが……
製作日1年を費やした同人誌が……

俺は庭の宝物を漁っていく。どれも俺の思い出なのに……

「さて、燃やしますね」

お香はそういうと、火打石をカッカッとこすった。

あーあ……

終わった、燃え尽きたよ。パトラッシュ。

燃え尽きるとお香の人格は元に戻っていた。

「ごめんなさい。ごめんなさい」

「いや、いいよ。俺が悪かったんだし……」

「すみません。ついゴミの山を見ると見境がなくなってしまって」
「ゴミの山……」

「すみません、すみません」

必死に謝られるとどうしようもなくなる。

目には涙が溜まっている。
かわいい。

いかん、いかん。

また泣かしてしまう。何とかしなければ……
そうだっ！

「うん！ 部屋が綺麗になった！ もしよかったらお礼をしたいんだけど、この後暇？ デートしない？」

「デートですか？ 何ですかそれ？」

「んんつと、どこかへ行つて、食事したりすることかな？」

城下町でも行ってみようよ。俺ここに来てからまだ一回も行ったことないんだ」

「一回も行つてないんですか？」

「いろいろ忙しかったからね」

暇なときもあつたが出不精な俺は部屋でグダグダしているだけだったのだ。

「私でよければ……」

「よし！ 決まりだね。俺一回も行つてないから案内よろしくね」

勢いでデートすることになったわけであるが、いかんつ。今更ドキドキしてきた。

横を見ると人形のような顔に、艶やかな髪色をしたお香の顔が見える。ツインテールだ。

「何かついてきます？」

視線に気づかれた。

「いや、今日もかわいいなと思って」

「え……いえ、その……」

普段の会話では萎縮することはだいぶなくなってきたのだが、こういう攻撃にはめっぽう弱い。

からかい半分でやってしまっている俺も、俺だが、嘘は言っていないので問題ない。

「ここが一番大きい通りなんですよ。活気がありますよね」
「おおつ。これはすごい」

事実、こちらに来てから一番の発展具合だ。
楽市楽座の効果というわけか。俺らも乗り遅れないようにしないとな。

通りは前世と比較しては元も子もないが、こちらに着てからはここまで活気があるのは初めてだ。

ごったがえしており、あらゆる者が雑多に並んでいる。日本もアジアの一員ということがわかる。

ぱっと見でも、いろんな文化が受け入れられているのがわかる。
欧米文化は入ってきてないし、鎖国もまだしていない。その影響であろう。

「これは？ なんだろう？」

「きれいですね……」

俺は適当な店に足を止めると商品に手を取った。

「お目が高いですねー。それは最近南蛮から入ってきた商品なんですよ。珍しいもので、大変貴重なんですよ」

商人がもみ手をしながらこっちにやってきた。

「ふーん」

俺は前世でも良く見た形をした商品を手に取った。

指輪か。

でも何だか安っぽいぞ。露天に並んでいるんだから仕方ないか。
これを前世に持っていたら俺金持ちになれるのかなあ。本物の金とか真珠とか使っているなら大金持ち確定じゃね？

「いかがですか？ 彼女への贈り物として」

「彼女！ そう見える？ まいったねえ」

そういつてお香のほうをちらりと見る。お香は指輪に夢中でこちの声は聞こえないみたいだった。

「これ本物？」

「もちろん当店は本物しか扱っておりません」

本物でも偽者でもいいか。そんなのは本人の心しだいだろう。

「気に入った？」

「とても綺麗です。でも私にはもったいないですから」

「これ貰うよ。どれくらい？」

「そんな、いいです。私にはもったいないです」

「いいから、いいから」

俺はお金を払い、商品を受け取った。

「指出して」

お香はおずおずと右手を出した。

「もしよかったら左手を出して欲しいんだけど？」

「左手ですか？ わかりました」

俺はひざまづき、片膝をついた。ゆっくりとお香の薬指に通していく。

「お嬢さん、結婚してただけませんか？」

「え？ その？ え？」

お香はテンパっていることが一目でわかるぐらいに手をあたふたとさせている。

「ごめん、ごめん。冗談だよ」

「そう……ですよね」

「プレゼント。んーっと、贈り物かな」

「私にですか？ でもいいんですか？」

「いいよ、いいよ。どうせ自分のものなんて何も買わないんだから」

「あの……ありがとうございます」

「こんな感じだったんだ」

「ほう、だから私の書類にも目を通していないと」
目の前にいる行長は怒っている。

「これから、これからするから」

「今すぐしてください。自分でご計画を立てたのですから責任があるのです」

「ううーっ、わかったよ」

「お茶ここにおいておきますね」

お香がお茶を持ってきてくれた。

「がんばってくださいね」

そいうお香の手には指輪が光っていた。

15話

てんしょう

天正10年。

西暦1582年。

本能寺の変が起る年として有名だが俺の親父が死んだ。

宇喜田直家、享年53歳だった。
うきたなおいえ きょうねん

この時代人間五十年といわれていた時代だから十分生きたといえる。

実際は去年死んだのだが、毛利への対外工作的に公式発表は今年ということになった。

忠家が親父の死に様を手紙でよこしてくれた。

親父は、床の中で家臣たちを並ばせ「わしと共に殉死じゅんじしてくれるもの、誰かいないか？」と問いかけた。

家臣は互いに顔を見合わせ「我々はこれから八郎様を盛り立てていかなくはなりません。どうしてもといわれるのでしたら、国中の高僧を集め、殺しましょうか？」と答えた。

これに親父はおとなしくなってしまうたらしい。

親父がどういう意図で発言したのかわからないが、晩年の親父を見ていると何も考えていなかったのかも知れない。

もともと親父が死ぬことはある程度覚悟していたため、準備はしていた。

俺は親父が死んだとの報を受けると用意しておいた手紙を2通取り出した。

この3年間何もしていなかったわけではないということだ。

1通は秀吉宛、もう1通は信長宛である。

秀吉殿には親父が死んでしまったため俺に跡目を継がせていただきたい。

しいては俺の後継人になって欲しい。といった旨をしたためている。

信長には秀吉に送ったものの確認である。

秀吉殿に私の後継人になっていただきたい。しいては認めていただけないでしょうか。といった感じである。

2通の手紙を取り出し、人を呼ぶ。

「五右衛門ごえもんいるか？」

「あ・いしかわごえもん・ごえもん・ここにごえもん・ございます」

「この2通の手紙を秀吉殿に渡してくれ。1通は秀吉殿に。もう

1通は秀吉殿から信長様に頼む」

「あ・わかりごえもん・もうした」

あいかわらずうるさいやつである。

この石川五右衛門いしかわごえもんは俺が人質生活に入ってから仲間にした人物である。

秀吉の下に人質に来てから俺は手紙を書きまくった。

それはもう前世の関が原の戦い前の家康並に書いた。百通、2百通は軽く超えているはずだ。

あて先は北は伊達の片倉小十郎かたくらじじゅうしゅう、南は龍造寺の鍋島直正りゅうぞうじ なべしまなおまさまで、さらに実在しているかしていないかわからない真田十勇士さなだじゅんゆうし、風魔小太郎ふうまこたろうにまで送っている。

とりあえず、自分の信用できる家臣が欲しかった。

手紙の内容は、簡単にこんな感じた。

「俺、今はただの人質だけど、そのうち宇喜多家継ぐよ。

俺の家臣にならない？ 将来は約束するよ？ 金銭契約でどう？」

この手紙を書いて1番はじめに来たのがこの石川五右衛門いしかわごえもんだった。最初から強烈で、ぼさぼさの頭に、顔に墨を塗っていて、歌舞伎役者そのものだった。

イメージどおりというわけだ。

「あ・いしかわごえもんでございます」

うつとしい、俺の第一印象だ。

石川五右衛門が本当にいるとも思わなかったし、俺自身いちいち出した手紙を把握していない。

追い返そうと思ったが、まあ話だけ聞いてやることにした。せめてもの情けである。こっちから手紙を出した手前、負い目もある。

石川五右衛門、前世では大泥棒と名高い男である。

五右衛門風呂という言葉がある。

これはこの石川五右衛門が秀吉の金のしゃちほこ何かを盗んだことにより、秀吉に捕まり子供と一緒に煮殺された拷問道具からの名前だ。

この時、子供を風呂に入れさせないように絶命するまで、抱き上げ続けた。という天晴れ五右衛門説と、子供を下敷きにし踏み殺したという外道五右衛門説。

苦しまないようにちゃっっちゃつと水に入れて呼吸停止させた慈悲深き五右衛門説がある。

まあ簡単に言えば存在自体怪しいやつである。

では、本当はどんなのが興味深いところである。

「このくいしかわくごえくもんくはく」

異様に長くなりそうなのでかいつまむ。

当初は伊賀の下人をやっていたらしい。忍者というやつだ。

それが織田家の伊賀討伐で住むところも食い扶持もなくなつてしまつたらしい。

途方もなく歩いていると、石川とかいうやつに泥棒をやらないかと誘われる。

明日への道がわからないのでどうとでもなれということで、いわゆるままに三好氏の蔵に押し入り、黄金の太刀を盗んだ。

これで当分食うにこまらんだろと思つていたら、石川に裏切られ、罪を擦り付けられ役人に差し出されそうになつてしまう。

慌てて逃げ出したもののお尋ね者になつてしまった。

しかたなしに身分が高そうな屋敷に入り盗みに入つて食い扶持をつないでいた。

そうすると自然と仲間が増えてしまった。

俺にこんなたくさんの方の食い扶持を稼ぐものを無理だ。

簡単にいうところである。

最後の方は涙目で、顔から墨が落ちてきていた。

怖い顔が余計怖い。

話を聞いてみると元忍者とのことで、前世では秀吉の寝所まで侵入している（眉唾物だが）ので諜報に使えると思つた。

諜報に使える部下は欲しかったところなのでとりあえず雇うことにした。

これが失敗だった。

こいつ極度の目立ちたがりだった。

まず、試しに徳川家康の動向を探って来いとの命令を出した。

どうこう 【動向】

(1) 人や物などの動き。

(2) 事態の動いていく方向。社会や組織などの現状の傾向や今後のなりゆき。

のはずである。

こいつは家康の寝所に忍び込むと狸の置物を置いて、服部半蔵と切りあった末帰ってきたのだ。

しかもご丁寧に石川五右衛門ここに見参と墨で書いてきたらしい。俺は動向の意味を小1時間かけて叩き込んだ。

さらに明智光秀を探って来いと命令したら、坂本城から花火を打ち上げる始末だった。

「次、同じようなことしたら島津家に行ってもらうからね」といったらだいぶおとなしくなった。

敵地で派手にやるのはどこかの蛇ぐらいで十分である。

なにはともあれこの2通の手紙で俺が跡を継ぐ分には問題ないはずだ。

秀吉は天下をとった後とは違い、今の時期は人の命をいとおしむ

人物であるはずである。

宇喜多家が俺をなくした場合旧臣が自決じまぎに行動を起こすのをとめるという利点もあるはずだ。

なにより前世では俺を残し、宇喜多家を最大限に利用した。

案の定、それから数日後、俺と秀吉は岡山城、現石山城に向かうことになった。

秀吉、俺たち宇喜多家人質組み一行、の他にも2万の軍勢と一緒にである。

この2万の軍勢、俺たち宇喜多家への圧力もあるがそれと同時に毛利家への侵攻もするつもりらしい。

これが前世で有名な備中高松攻めである。びっちゅうたかまつ

味方にするかぎり織田家、しいては秀吉はおおいに頼りになるだろう。

宇喜多家人質組みも3年前、姫路城に来たときよりも人数が増えている。

岡山から連れてきた桃寿丸とうじゅまる、山中鹿之助やまなかしかのすけ、小西行長こにしゆきなが、慶明けいめい、お香こう、ながふねまたざぶろうさだちか、おかへいないいえとし、とがわへいすけひでやす、そして長船又三郎貞親、岡平内家利、富川平助秀安ら爺さんどもはそのまま一緒に来ている。

その他にも、小西行長の親父である小西隆佐こにしりゅうさ及びその家族、石川五右衛門、最近加わった後藤又兵衛ごとうまたべえで全員である。

小西行長の父である小西隆佐は俺が堺に行ったときに確保した。こにしりゅうさ
人質の最中、行長に連れられて堺に行った。

その時、行長の実家に案内してもらったのだ。

行長の実家は堺で薬屋を営んでいた。

試しに全員まとめて部下になるように誘ってみたところいい返事

をもらえた。

もちろん、薬屋と同時並行ということであるが、一気に部下が増えたことは喜ばしい限りだ。

ついでに小西行長に頼んでヨーロッパから大型ガレオン船と西洋馬の購入をお願いした。

もちろんニコニコ出世払いである。

どうやらかなりの金額になるらしい。俺は一気に負債を背負い込んでしまった。

もう1人の人物。

最近加わった後藤又兵衛、またの名を後藤基次という。

この男は俺の手紙に応じて家臣になりやつてきた。

元々、後藤又兵衛は黒田官兵衛に仕えていた。

しかし、荒木村重が信長に謀反を起こしたことで非常に困難な立場に追い込まれることとなった。

有名なことであるが荒木村重は黒田官兵衛を幽閉する。

荒木村重。前世では名前も知らなかったが結構重要なやつである。後藤又兵衛の叔父、その子供らが村木方に組したため後藤又兵衛の立場は追い込まれることになる。

又兵衛は一族の謀反に関与したと見なされるはめとなり、黒田家中からの退去を余儀なくされる。

退去された後仙石久秀に仕えることになったらしいが、どうもあわなかったらしい。

まあ凡将として有名な仙石久秀ならしかたないか。

仙石久秀。前世では漫画として有名な人物であるがその人格、戦績には問題も多い。

どちらかといったら人格が戦績に直結している。

少年のころから気が強く、機転も利いたが、思慮の浅いところがあった。そして見栄っ張りであり自己顕示欲が強いところがあった。

「馬鹿よりも小童の方がましだ」

俺のところに来たときに又兵衛が発した最初の一言である。

後藤又兵衛の名声と有能は前世においてよく知っているため快く迎えたことはいうまでもない。

16話

岡山城で俺たちを迎えてくれたのは宇喜多忠家叔父さんだった。
わざわざ城の外に出て迎えてくれた。

「八郎様、お帰りなさいませ」

「忠家叔父さん、どうしたの？ その頭？」

「お館様が亡くなってしまったので、これを機に出家させてもらいました」

「そうか、迷惑をかけたな。子息のことは不憫であつたな」

これより少し前、毛利との戦で忠家は子供を一人なくしている。
宇喜多基家である。俺がキラいな宇喜多詮家の弟ということになる。

どうせなら詮家が死ねばよかったのに。

「いえ、武将になったときから覚悟はしています」

それにしても、立派になられましたな。3年でここまで成長なさ
るとは、この忠家嬉しくおもいますぞ」

「すでに家臣は集めてあるのか？」

「はい。城の方に。案内いたします。秀吉様もこちらへ」

俺は忠家叔父さんにつれられて城に入っていく。

忠家叔父さん、羽柴秀吉、俺という順番で進んでいく。

大広間にはすでにみんな集まっていた。

近い方から桃寿丸、忠家叔父さん、詮家、明石全登含む一門衆、
その下座に長船又三郎貞親、岡平内家利、富川平助秀安ら譜代の家
臣、さらに下に有象無象の家臣、そしてやっとその下に小西行長等
の俺の直卒がいる。

秀吉は俺の斜め後ろにどうどうと存在している。

姿は小男とは思えないがやはり存在感は圧倒的だ。

最初秀吉は俺を膝に抱えて自分が後継者ということをアピールし
ながら宇喜多家をまとめるつもりだったらしいが、俺が失礼のない
ようにお断りさせてもらった。

恥ずかしかったこともあるが、宇喜多家ぐらい自分でまとめない
と今後が不安になる。

それに余りに秀吉に頼りすぎると前世と同様、半分傀儡政権にな
りかねない。

頼るときは必要限度、そして最大限に影響力は最低限に抑えてお
かねばならない。

今は秀吉が後見人となってくれている。今回秀吉が連れてきた軍
勢、秀吉及び織田家の力で半分以上家臣たちを押さえ込んでいる。

この状況で家臣をまとめられなかったら今後まとめることはで
きないであろう。

うつ……緊張してきてしまった。

いかんいかん。桃寿丸のがうつってしまった。

ここでしっかりしなくては示しがつかない。

ゆっくりと上座まで歩いていき、どかっと腰を下ろす。

「宇喜多家当主、宇喜多八郎である」

声が少し上ずってしまったかもしれない。

秀吉以外一斉に頭を下げる。

腹では何を思っているのかわからないが、とりあえず織田家の威

光には頭を下げているらしい。

「私は若輩ゆえ筑前守殿ちくぜんのかみに後見人を頼むこととなった。皆よろしく頼む」

ちなみに筑前とは北九州のことである。筑前守とは北九州を守護する豪族に朝廷からたまわるものである。

九州征伐を考えてのうえでの措置である。もう1つ付け加えるとすると明智光秀にも日向守という名を朝廷から貰っている。

日向とは宮崎県のことだ。信長は同じ九州を明智と羽柴に任せようとしていたのかもしれない。

互いの競争意識を刺激させようと考えている。と思う。

少し現実逃避をしてしまった。

ここからが本番だ。しっかりしなくては。

「面を上げる。これから新体制を発表する」

ゆつくりと家臣が頭を上げる。

誰が一番先に頭を上げるだろうか。

……詮家か。

「今後宇喜多家の水軍は小西行長、貴様に一任する。それと同時に補給担当にもつける。よいなっ」

行長が一瞬驚いた後答える。

「はっ わかりました」

「次は財務担当に小西隆佐こにしりゅうさ。私の直轄地の財政は貴様に任せる。新たに情報統括担当を作ることにする。これには石川五右衛門いしかわごえもんに

当たってもらつ。

さらに後藤又兵衛、やまなかしかのすけ山中鹿之助は私の率いることができる兵を
任する。

織田家との交渉は慶明殿に任せたい」
けいめい

呼ばれたものは全員各々声を上げる。

驚くものもいたが不満はなさそうだ。昇進したことになるので不
満が出ようはずもない。

問題はここからだ。

「これはどういうことです？」

一門の者や譜代の者を差し置いて……

このような、このようなどこの馬の骨ともわからない者たちを抱
えあげるなど前代未聞だ」
あかしただけのり

明石全登が真つ先に声を上げる。

後半になるほど声が荒くなっている。

「水軍は先代より私が任されてきました。私にこのようなもの
下につけといわれるのですか」
はなぶさまたうえもんまさゆき

譜代の家臣である花房又右衛門正幸も立ち上がる。

「八郎様は先代亡き後も毛利から守ってきた私どもをいかに心得
る。」

忠家様、貞親様、秀安様、家利様、このようなこと我慢できるの
ですか」

明石全登が怒声を張り上げる。

忠家も他の3人の家臣も頭を下げたままである。

「明石全登、花房正幸、その方ら2名は私の家臣にはなれないと」
俺は緩やかに言う。ここで焦ってはいけない。わかっていたこと
だ。

「……そういうことをいつているわけでは」

「そういうことだ。忠家、明石全登と花房正幸を放逐する。」
ざわっ

一斉に周りの空気が変わる。

放逐とは宇喜多家から追放されることである。かなり重い罰の1つである。

「横暴ではないか」

「我らをなんと思っている」

「八郎様はうつけか」

「若いから仕方がないにしても限度があるぞ」

「八郎様、放逐はやりすぎです。私の顔に免じて許してやっても
られないでしょうか。」

忠家が俺をたしなめる。

「忠家もか……わかった。今回は忠家に免じて許してやろう。
ただし、花房お前だけだ。全登、お前は許せん。お前のおかげで
部下に亀裂が入ってしまったではないか。」

明石全登、貴様はこの場で鞭打ちの刑だ。鞭を持て。俺じきじきに
やってやる。」

「八郎様、頭に血が上りすぎです。怒りをお納めください。」

忠家が俺を必死に止める。

「忠家、貴様もこの者らと同じというわけか？ 一回はきいたぞ」

「いえ、申し訳ありません」

近習がおおずと鞭を俺に差し出す。

「そこに直れ、全登」

「宇喜多家はお前の代で終わりだな。このようなこと許されるも
のではないぞ」

「明石殿は罪を受け入れる気はないと見える。貞親、秀安、家利、
この者を抑えろ。」

「ははっ」

いままで黙っていた3家老が声を上げ、明石全登を抑える。
「いくぞ」

思った以上に冷静な声が出せることに俺自身が驚く。
激しい音と共に血の臭いが当たりに充満する。

同時に明石全登の背中の皮が剥がれる。

鞭の先には血と肉がこびりつく。俺はそれを手でぬぐうと再び鞭を入れる。

一回ごとにうめき声と血があたりに響く。

「八郎様、すでに気絶しております。もう十分でしょう」

忠家が俺の肩をやさしく叩く。

俺は鞭を近習に預けると、再び上座に戻り、腹のそこから声を出す。

「他に意見のあるものは？」

思った以上に重たい声だった。

「ははっ」

家臣達が一斉に居住まいをただし、頭を下げる。

「それでは、我々宇喜多は羽柴筑前守様と協力して毛利家とあたることにする。」

忠家、大将を命じる。しかるべき人選を考慮した後、俺の下に來い」

「仰せのままに」

「以上で、解散だ。」

俺は席を立ち、部屋から立ち去る。

横目に明石全登を抱えあげる宇喜多詮家と花房正幸の姿が見えた。

内政パート 17話

俺が正式に家督かどくをついでから3ヶ月が過ぎた。
はしばひでよし

羽柴秀吉は俺が家督を継いだのを確認するとその足で毛利まで進んでいった。

ただいえ 忠家叔父さんもそれに従っている。

忠家叔父さんは直家なおいえ以来の家臣で小うるさい重臣を集めて出発していった。

もちろん俺と協議した上、この間にある程度国内、備前、美作の改革のしたじを作っていこうとするためである。

「八郎様、もう行かれるのですか？」

お香こうが声をかけてくる。そんな目で見つめられると返答に困ってしまう。

「これから船を見に行かなくちゃいけないからなあ……行長がうるさくつて。」

また帰りによるから心配するな」

岡山城に帰ってきたからお香は忠家叔父さんに「俺の側室に」といわれたらしい。

「私にはもつたいたないです」と断られたらしいが。

それから、慶明けいめいが正式にお香を養子とし、城下の一角に居を構えることになったのである。

まあ側室ではお香に失礼だからなあ。正室にしなきゃOKするわけがないよなあ。

ただ、まだ12歳の俺としては正室、つまり結婚することとはもう少し待つて欲しいとも思う。

まあそれでも俺としてはお香はかわいいし、いつかは正室にしたので足しげく通っているわけである。

我ながらみつともないと思うものの、諦めきれないのが現状だ。

「慶明さんから頼りはあつた？」

「いえ、まだです。やはり忙しいのでしょうか」

慶明さんには秀吉と一緒に毛利に向かっている。

今後秀吉との外交パイプは慶明さんを通じて行うことになったからである。まあ俺が勝手に決めただけだが。

「最前線に行くわけじゃないし、無事に帰ってくるって」

「そうですね」

朗らかな笑顔で返してくる。内心では不安だろうに。

そもそも慶明さんに外交の才能があるとは思っていない。

ない、というわけではないが、外交というのは比較的高いスキルが必須となる。

お坊さんというのは外交には有利に働くものである。毛利の安国寺恵瓊は有名だろう。

が、問題は慶明は日蓮宗である。日蓮宗は商人には好かれているが、武士や百姓には人気がない。

武士には臨済宗、百姓には一向宗となっている。日蓮宗では余りいいイメージを相手に与えない。

ではなぜ慶明を秀吉との外交パイプにしたのか。

まずいえるのは秀吉だからである。秀吉は前世を見る限り、無神論者である。信長論者といった方がいかもしれない。

であるならば、慶明の人柄を見て判断するであろう。そしてもう1つは、お香がいるからである。

慶明はお香に対して父親とっていいほどの愛情を注いでいる。ならば、秀吉に寝返るようなことはしないはずである。

秀吉の人たらしの才能は絶対的なものがある。こうでもしないと対抗できない。

「何を考えておられるのですか？」

お香が無垢な笑顔むくを沿えて言う。

「いや、俺も親父と大して変わらないなと思ってね。」

転生した場合親父の血はどうなんだろう。この体に流れているのは変わりないのだが。

俺は自嘲気味に笑う。

「そのようなことはありません。八郎様は、八郎様です」

「そうか、ありがとう」

俺はお香の頭に手を添える。

「じゃあ、行つて来る、帰りにまた」

「はい、いつてらっしゃいませ」

岡山城から川を下ると児島湾こじまに出る。

そこに俺の今回の目当てがある。

船頭に導かれていくとそこにはすでにドックが作られていた。

先日、遂にガレオン船が届いた。ヨーロッパからの輸入品である。当初はスペインから輸入しようと思ったのだが、俺の野望はすげなく断られることとなった。

仕方なく、イギリス、ポルトガル、オランダ、あたりに打診した。

イギリスはアジアに勢力をまだ伸ばしていないし、オランダは新興勢力過ぎるので途中で破算になってしまった。

日本に最も交流の深い（現時点では）ポルトガルに狙いを定めざるを得なくなった。

ポルトガル本国とスペインとが同じ君主を仰ぐこととなってしまうていた。

そこを狙い、植民地の技術者や、軍関係者をなだめ、すかし、騙し、手に入れたのだった。

手に入ると急ピッチでドックを作り、国産化を開始しようとした。総指揮は小西行長である。

ガレオン船を見たとき

「これでようろうっぱとやらに行けるのですね。確かにこれだけ巨大ならどこでも行けそうですね」

と目を輝かせていたので、精一杯頑張っているのだろう。

まあどんなに頑張ってもあと3年は様子を見ることになるだろうことは黙っておくことにした。

「おーっす。行長いるか？」

作業をしている人たちが一斉にこちらを向く。

何でこんな子供がこんなところに？ というような顔をしている。

案の定、あからさまに鬱陶しそうに声をかけられた。

「おい、童わっぱ、こんなところに来ちゃ危ないぞ。家に帰りな」

体格がよく、髭はもじやもじやで海賊の親玉のような男である。

「小西行長はここにいる？」

俺の態度に髭の男は怪訝けげんそうな顔を浮かべる。

「なんで小西様を知っているんだ？」

めっちゃふしんがっている。やっかいだな……めんどいのはごめんんだけど、と思っていると奥のほうから

「どうした？ 何があつた？」

と小西行長の声が聞こえてきた。

「おおーい、こつちこつち」

俺が手招きをする。

小西行長は俺を視線の端でとらえると慌ててこちらに駆け寄ってきた。

「今日おいでになるとは聞いていましたけど、相変わらず突然です。共のものは？」

結構な距離を走ってきたのに息が乱れていない。さすがである。俺ならヒイヒイだね。

「俺1人だよ」

「また1人ですか！ 鹿之助を共としてお連れくださいと何度も言つたはずですが……」

「んー忙しそうだったから置いてきちゃった」

「馬の耳に念仏とはこのことですね」

と行長がため息をついた。

「あの……すみません。行長様……この方は？」

「ああ、紹介していなかったかこちら宇喜多家現当主、宇喜多八郎様だ。」

八郎様、この者は見てくれは悪いですが造船技術にかけては日本1の男です。

家の商売をしていたのですが、こちらに引き抜かせてもらいました。腕は確かですよ」

「そうか、大変だと思うが早急に後3隻は欲しいのだ。見合つだけの金は渡すから頑張ってくれよ」

「ええ！ 八郎様ですか！ 部下を柱にくくりつけ、火であぶったり、鞭で叩いたり、爪をはいだり、耳を切り落とした、あの？」

さすがにそこまでやってない。あつてるのは鞭だけじゃないか。まあ広まっているならそれでいいか。

「これが今建造中の船？」

俺は苦笑しながら横の巨大な建造物を見上げる。

「はい。まだこれからといったところですが、竜骨の部分は終了しましたので後は何とかなと思いますよ」

行長も同じように建造中の船を見上げた。

「大砲の方は？ 生産できそう？」

船を買ったとき

「今、解析させているところです。これはあんまり芳しくないみたいです。工房の方が困っていましたよ。これから行かれるのですか？」

「そうだね。この後よるか。」

西洋から購入した巨大ガレオン船にはおまけで大砲が付随していた。

この時代の日本の大砲は、重さの割りに砲身小さく鉄砲ほど重要度が低い。

この大砲を独自に製造できるようになれば、日本の火気戦法は大いに変化するようになるであろう。

ヨーロッパでもコンスタンティノープルがオスマン帝国の圧倒的火力によって膝を屈したように。

大砲以外にも西洋の軍馬も取り寄せた。

日本の馬と西洋の馬の違いはその体格の大きさである。

日本に近代的騎馬隊が作成されるのは明治時代まで待たなくてはならない。

一足先に騎馬隊を作っておけるなら作ってしまった方がいい。

朝鮮出兵、史実どおりあるかどうかわからないが、大陸で戦うなら必須である。

が、それよりも重要なのは馬は大変貴重な代物なので、贈り物に使えることである。

信長に献上すれば大いに喜ばれるだろう。信長の馬好きは大変有名だ。

その他、伊達政宗や羽柴秀吉、前田利家、状況によっては徳川家康にも媚を売っておいて損はない。

あとは活版印刷だ。かっぱんいんさつ

もともと中国で生まれた活版印刷だし、木版印刷の技術はあった。よって、思っていたより簡単に技術的問題は解決できた。

戦国時代の一般的な文字は草書体である。

つながっていてわかりづらい文字である。

日本語とはとても思えない。努力してある程度は読めるようにしたわけだが……

この文字では活版印刷はとてもできないので、楷書体、カタカナを使うことにした。

このような感じで技術的な問題は解決に向かったわけであるが、問題は別のところにあった。

紙の値段が高く、刷っても採算が取れないのだ。

識字率もそこまで高いわけでもなく、本を刷っても売ることはなかなかできなかった。

需要があまりなく、供給だけが増えてしまっている状態である。

現在では刷れば刷るほどお金がなくなっていく具合である。

完璧な赤字である。

今後に期待ということだろう。

活版印刷、火薬、羅針盤、課題は山済みであるが、何とか揃えたことになる。

が、より切迫した問題がでてきた。

俺が無駄使いをしすぎてしまったため、宇喜多家の財政状況が火の車になってしまった。

財政担当、小西隆佐は毎日俺に泣き言を言ってくる。

とりあえずは、小西家、戦場で知り合った堺の商人に借金をして何とかまわしてもらっている。

それでも一歩踏み間違えれば宇喜多家の財政は破綻する。

考えたら身震いしてきた。

「八郎様、八郎様」

気づくと行長がこちらを心配そうに覗き込んでいた。

「ああ。すまん。考え事をしていただけだ。兵のほうはどうなっている？」

俺の質問に行長は少し困ったような顔をする。

「旧来の宇喜多家の家臣は私の下になるのが嫌のようで花房様を筆頭に反発がひどいですね」

「花房らはほおって置け。俺に考えがある。」

対策は打ってあるのか？」

「とりあえずは村上水軍に敗れて各地に散り散りになった兵力を集めています。」

それを私の家の船乗りの下におかせています。

しかし、これだけ大きい船を操ることは初めての経験らしく皆戸惑っています」

行長は申し訳なさそうな顔をする。

「どうせ一から教育するなら庶民から雇った方がいいかもしれないな。」

水軍兵学校でも作るか、それならついでに士官学校も欲しいな。

また金がかかるな。

予算を追加しておくからよろしく頼む。報告だけはしっかりしろよ」

「わかりました。期待にこたえられるよう精進します」

「よし、じゃあ次は工房か。」

俺は伸びをしながら次の目的地へと向かおうとする。

「あ、待ってください。護衛をつけますから」

「げっ！ すたこらさつさだぜ！」

俺は駆け足で逃げ出した。

「ずいぶんと腰の軽い殿様ですね。大丈夫なんですか？」

海賊の親玉、もとい行長の家臣がもじやもじやの髭に手をかけながら行長に問いかける。

「ん？」

行長は不思議そうに問いかけなおした。

「いえ、殿様はもつとずっしり構えていなくちゃ。ついてくるもんもついてきませんぜ」

行長は会得したように頷くとかすかに笑いながら答えた。

「おまえ、一度も見たことのない領主と、一度でも顔を合わせたことのある領主どっちかに命をかけろといわれたらどちらにかける？」

「そりゃあ、顔を合わせた方がいいですね」

そういった後、あつと声を上げた。

「あの方はあれでいいんだよ。さて、仕事に取り掛かるか」

「お香、お香、かえったよー」

夕暮れ時にお香の家を訪ねる。

春の陽気も、夕暮れには涼しくなって寒いくらいだ。

城に直行すると、仕事を押し付けられるためここに来て休息するのだ。

最近では日課になりつつある。

お香もわかったもので、すぐに奥から顔を出す。

「今、お茶を入れますね」

「すまんね、あと軽く食べるものが欲しいな」

「いつもの湯漬^{ゆず}けでいいですか？　ちようど今日鮎^{あゆ}を売りに来ていたのでつい買い買ってしまいましたので」

「おお、鮎か。いいねえ」

「少しお待ちください」

湯漬けとはお茶漬けのお茶がないバージョンである。

お茶の代わりに昆布や鰹のだしを白米にかけて食べる。

ちよつと物足りないが、これはこれでなかなかおいしい。

食べ物といえば俺はこの時代の食べ物にはうんざりしていた。

味のバリエーションはないし、肉はない、調味料も少ないので自分で作ってしまおうと試みた。

まず肉である。鶏、牛これらはすでに日本にいた。

しかし食用に耐えられる物ではなかった。

牛は農業に利用されているので筋張っていて固かった。鶏は大量生産できていない。

食用牛を放牧させ、鶏も全て宇喜多家が買い上げるということを確約し、農家と交渉した。

不承不承ながら、農家を領かせた。

豚は中国から取り寄せた。

これも農家に命令して、育てている。

まだ実験段階ではあるが、戦国時代の下地として穀物の過剰生産があるので成功するだろう。

もつと手を広げて、毎日でも肉が食べられる環境を作り上げなくてはいけない。

あとは甘いものが少ない。

砂糖が貴重品なため仕方がないといえば仕方がないのだが、元来の甘い物好きとしては黙っていられない。

とりあえず、領地内でサトウキビ作りを奨励した。

これも結果が出るのはまだまだ先のことだろう。

今はまだ食べれないのかと落胆にくれていたところ、ある思い付きが芽生えた。

バターを作ればいいのだ。

牛はすでにある程度いるので、乳を搾らせ、とっくりに入れ、思いっきり振る。

脂肪がが分離したところをねり、水分を抜き、塩をふりかけバターを作った。

よし、これで小麦粉を焼けば何とかできるはずである。

ブリオッシュの完成である。

と思っていたら、日本にある小麦粉はお菓子作りには耐えられるものではなかった。

プンッ

俺の中で何かが切れる音がした。

まず、お菓子が作れる小麦粉を手に入れなくてはならない。これは簡単である。輸入すればいい。

次はこれを国内で栽培しなくてはならない。

日本の風土には合わないことぐらいはわかる。

合っていれば自然に作られるようになっていくはずである。

湿度が低い場所、北海道、カルフォルニア。ぱっと思いつくのはここら辺だ。

待ってるよ。こんちきしょー。

バターが作れるということはチーズもいけるのではないかということ、牛乳を鍾乳洞に放置した。

案外簡単にチーズを作成することができた。

チーズとバターがあればグラタンやドリアン、ほうれん草のソテーなど料理の幅は広がる。

とりあえず、宇喜多家の料理人に作り方を教え、城下で料理屋を開かせた。

これがなかなか好評で、夕方には列を作って並んでいるところを良く見かけるようになった。

珍しいものが食べれる。と評判である。

さすが日本人。食に関しては貪欲である。

「八郎様、できましたよ」

お香が湯漬けを持ってきた。

ご飯の上にすり潰した鮎が乗っている。一緒に持ってきてくれた急須からお湯をご飯の上にかける。

鰹のにおいをご飯から上ってきた。

「いただきます」

俺はそついうと箸を手に取り、まず汁をすすった。

鰹と鮎の塩味が下の上から胃に入り込んでくる。

「ふう」

一息ついたあと、一気にご飯をすすった。

あったかいご飯に、塩辛い鮎がお湯で調和されてなんともいえない

い味になる。

一気に、あまり上品でなくすすっていく。

「ご馳走様でした」

「お粗末さまです」

「おいしかったよ」

「見ていればわかります。ほんとにおいしそうに食べること。見ているだけで私もおなかがいっぱいになります」

お香がコロコロと笑った。

それにつられて俺も笑った。

こうというのが幸せというのだろう。

18話 本能寺の変（前書き）

まずここまで読んでくださった皆様に感謝を申し上げます。
正直、皆様がいなかったらここまで書くことはできなかったでしょう。

本当にありがとうございます。

ここまでで17話もかかってしまいました。

17話です。長かった。

当初の予定ではもっと早くここまで来る予定だったのに……
よって少しはしよる、ペースを今後あげる予定です。
もしわかりにくいとうございましたが、感想などで伝えてくださると嬉しいです。

さて今後ですが、佐藤大輔氏の「信長征海伝」、「新・信長記」と話の流れが一緒になるところがあります。

最初から氏の作品の続きを書きたいということで始めました。
パクってますのでよろしく願います。

17話は批判が多かったことを受けまして少々プロットの変更を行うつもりです。よって矛盾が生じます。17話ではこういつていたのにここでは違うという場面があると思います。ご了承ください。
17話を書き直せばいいのですが、それよりも続きを書きたいと思っています。時間ができたら17話も書き直したいのですが今のところ難しいです。それでも大本は変わらないといえますか、大部分は変わりません。

長くなりましたが、今後も続読してくださると嬉しいです。
感想、評価もお待ちしております。

18話 本能寺の変

1582年 天正9年 皇紀2242年
てんしやう

「あ、いやー、殿のご賢察けんさつ通りであります。動き出しましたぞ」

「動いたか、引き続き頼む」

いしかわこえもん
石川五右衛門の報告を受け取った俺は胸が高まるのを隠すことはできなかった。

俺は今、花の都、京都に來ている。もちろん観光などではない。本能寺の変で死亡する織田信長を助けようとしているのだ。

そもそも関が原の戦いは豊臣家と徳川家の戦いである。織田家が生き残った場合、関が原の戦いが起こる確率は圧倒的に低くなる。

俺が島流しにされる事もなくなるであろう。

もちろん織田を生き残らせるということは俺が織田家で生き残っていないかなくてはならないことを意味する。

織田家は前世というブラック企業だ。生き残るのは過酷を極めるだろう。

そのためのガレオン船であり、西洋馬なのだ。信長に媚を売りまくって生き残ってやる。

多大なリスクは生じるが男なら一度は考えてみたことがあるのではないか。

織田信長が生き残っていた場合、日本はどうなるのか、産業革命、植民地競争、第2次世界大戦、これらに遅れることもなかったのではないか。

この夢を実現することができる。やらいでか！！！！

関が原の戦いを有利に進めることも考えた。
時間を考えれば、俺が宇喜多家を今のよう^にに無理やりでなく、し
っかりと掌握することができる。

しかし、こういう展開にありがちなのが時間の修正力である。戦
国自衛隊のようになってしまつてはたまらない。
よつて、低リスク、高リターンを望める本能寺に賭けたのだ。

「皆、準備は良いか？」

俺は後ろを振り返つて声をかける。
全員白装束である。

目は血走り、いまにもはちきれそうである。
1万の軍勢を500で防^{ごう}として^{いる}のだ。
狂わないとやって^いられない。

ここでは狂っていることが正常なのだ。

「おおおっ」

後ろから怒号が鳴る。

「大丈夫です。後は殿の号令を待つのみです」

「うむ、よくやつてくれた。行長。良くぞ兵を損なわず京まで連
れてきたな。」

これらの兵は忠家^{ただいえ}が毛利方面に行く前に頼んでよりすぐりの精鋭
を集めてもらった。

もちろん京まで行軍したわけではない。
信長に謀反の疑いをかけられてしまつては元も子もないのだ。

よって兵を小部隊に分け、ある者は商人、馬借に、ある者は乞食に身をやつし京まで入ったのだ。

10人単位の小部隊を京まで別々の経路を使い、あらゆるものに変装させ、3ヶ月の時間を一杯まで費やした。

武器は輸送した。鉄砲を中心に岡山から京まで瀬戸内海を通って船で運んだのだ。

ほぼ全員に鉄砲を支給してある。戦国時代で鉄砲の有用性に気づいた大名の1人は俺の親父なのだから、俺は少してこ入れするだけでよかった。（ライフリングはまだまだであるが）

こうしてここ、京にいる。

これはいうほど簡単なことではない。

兵というのは大人数で固まって行軍しないと落伍者、脱走兵などで壊滅することも珍しくない。

いくら精鋭揃いとはいえ500もの兵をここまで来れたことは奇跡に近いだろう。

もちろん小部隊ごとに隊長を決め、徹底的に脅し、褒賞を約束するなどあらゆる細工を施した。

それでも向こうを出発したときと比べて、兵は3分の2ぐらいになっっている。

京で何をするかまでは兵には教えていなかったので計画が漏れる可能性は多分ないだろう。

これは信じるしかない。

それでも小西行長の功績は大きい。

「どーのー、明智光秀の部隊、2つに分かれましてーござーいますー」

五右衛門が息を切らせて再びやってきた。

「きたかつ！ 一方は妙覚寺の信忠様に向かうのだな」

「そのようです。斉藤勢およそ千が妙覚寺でござーいますー。我々の方は明智秀満率いる三千でござーいます。」

「危ういな」

織田信忠を救出するための別働隊は山中鹿之助が率いている。本能寺は今ある五百のみで対抗しなければならない。

五百対三千、しかも向こうには光秀率いる主力が残っている。多分1万程度だろう。

部隊を2つに分けるか……

いや、兵力の分散は各個撃破につながってしまう。

「行長、いい案はある？ 兵を2つに分けた方がいいかな？」

「殿、いつておきますが私もこれが初陣なんですよ。あまり期待しないでいただきたい。」

兵を分けるのはあまり良くないかと。ただでさえ人数が少ないのですから」

俺も小西行長も今回が初陣である。

今回の作戦は俺の横暴で行った。小西行長も、山中鹿之助も当初は反対した。

俺が最後まで責任を取らなければならない。腹をすえなければ。

俺は胸に手をやる。

お香から貰ったお守りがそこにはあった。

京に出立する前にお香には「戦に行ってくる」とだけ伝えてあった。

お香は悲しそうな顔をしたあと、出立前にお守りをくれたのだ。

「八郎様の無事を祈っています」

悲しそうな微笑とその言葉で送り出された。

よしっ！ 心を奮い立たせると、地図を取り出す。京の地図だ。

石川五右衛門に命じて書かせて置いたのだ。

もともと京を中心に活動していた石川五右衛門だ。期待以上の綿密な地図となっている。

「妙覚寺は鹿之助に任せよう。今変更しても仕方ない。で、ここが本能寺」

俺は地図の一点を指差す。

そこから地図を右側までなぞっていく。

「で、今我々がいるところがここ」

「光秀はどのように進行している？」

五右衛門のほうに話を振る。

「斉藤勢は鴨川上流方面から周ってくるでございます。秀満はそのまま真っすぐ本能寺に向かってくるでございますー」

俺は言われたとおりに地図に書き込んでいく。

となると我々が秀満と相対する前線はここらへんか。

前線になるであろう位置に線を引く。

「行長。お前は急いで信長様にお会いし、謀反の旨を伝え、脱出しろ。俺が時を稼ぐ」

「ですが……」

俺は続きを遮った。

「逃走経路を作ったのはお前だ。そのほうが確実だ。俺は何かなる」

無理やり口端を上げ、笑いを作る。

「わかりました。殿、ご無事で」

行長はすぐさま本能寺に向けて馬を駆け出した。

「五右衛門、変化があったら早急に教えろ」

「あいー。わかりましたー」

五右衛門も再び敵情視察に向かうために駆け出していく。

「よしっ、早急にこの位置まで移動するぞ。我に続け」

歴史は変化する。ゆっくりと、着実に。

日の本から始まった波はやがて激流に変わっていく。

夜の幕は今開始されたのだ。

完全な奇襲だった。

「敵は本能寺にあり」

この言葉を聴いたときは奮い立ったものだった。

逆を返せば敵は本能寺までいない。

この根底をくつがえされてしまった。

初めは味方の兵が暴発したのだと思った。

先発隊として送り込んだ足輕が次々と倒れていった。

鉛球が秀満ひでみつ自身の下へ届いたとき、初めて気づいたのだ。

「鉄砲隊！ 前へ！」

動揺を押し殺して叫んだ。

「はなてええええ」

大きな身振りをしながら言い放つ。心と体を切り離す。何度も戦場を駆け抜けるうちに身についたことだった。

味方の鉄砲が轟音を放つ前に、敵の銃撃によって幾人かが倒れる。うめき声を上げているが今はほうっておくしかない。

うめき声を上げたいのはこちらの方だ。と叫びたいがどうしようもない。

すでに引き返せないところまで来ている。

我らが大将明智光秀はすでに反逆ののろしを上げた。

今更、どうすることもできない。

信長の首級をあげないかぎり生き残ることはできない。
たとえ事前に謀反がばれていたとしても。

奇襲は受けたものの手勢はまだある。

敵勢は全員白装束で決死の覚悟をしている限り、少数なのでろ
う。

勝機はある。

今は本能寺これのみだ。

相手は廃屋で簡易な遮蔽物を利用している。

が、時間がなかったのだろう。

あまりでは良くない。

1箇所突撃できるのであろう地点を見つける。

時間との戦いだ。

「鉄砲やめ！ 鋒矢^{ほうし}！」

鋒矢とは「」の形に兵を配置することである。陣形の1つだ。
上の部分で敵に突撃する。突破力に高い陣形の1つである。

一斉に隊形が整えられていく。

「目指すはあそこだ。すすめえええ」

遮蔽物の合間に向かって突撃を敢行する。

遅れを少しでも取り戻さなくては。こんなところで戦っている場
合ではない。

「すすめえ！すすめえ！」

焦りは声となり部下を叱咤していく。

「レッツウ！ パアリイイイイ！」

不意に前方から声が聞こえた。敵の大將か？　まだ声が幼い。轟音が響いた。

左右、前方。三方向から一斉に響く。

はめられたつつつつ！

気づいたときは遅かった。

左右の兵が倒れていき。意識が遠くなるのを感じた。

「本能寺が落ちました」

斥候が戻ってきて報告した。

「信長は！　信長の首はあったのか！」

「焼けているためしかとわかりませぬが、南蛮の甲冑の遺骸が見
つかりました」

「案内せい」

京は夏真つ盛りである。

夜といえども盆地特有の気候は肌にべたつく暑さをはなっている。
さらに人間の焼けた臭いが合わさり、不快感を倍増させている。
それでも今はその不快感を全く感じなかった。

俺が天下人だ。

俺が王だ。

何度も信長にこけにされ、屈辱を受けた。
殺してやろうと思ったことは一度ではない。

そもそも奴には天下人などもつたない。教養も、戦術も、私の方が上ではないか。

信長が勝っていたことは、生まれながらの地位、それだけだった。それだけで私があのような下劣なものの下につかなくてはならなかった。

それも、もう終わりである。

白装束の軍勢が出てきたときはこれまでか、とも思ったが、どこかの軍なのかもわからなかった。

先鋒を叩いただけで消え去ってしまったのだ。

まあそれもよい。

このような夜に不可解なことはつきものだ。

なんにせよ。俺がこの国の王であり、天下人であり、大名だ。

現場に着くとすでにある程度人が集まっていた。

「どけ！どけ！」

声を張り上げて人群れを掻き分ける。

そこには1つの焼死体があった。

確かに信長独特の南蛮甲冑をつけている。

横にはもう1つの死体があった。

こちらはあまり焼けていない。

顔にも見覚えがあつた。

「森蘭丸か」

光秀は呟いた。

[illegible]

ひい あー はっ はは はっ は

奇怪な笑い声が満ちた。

「第六天魔王かつ あはつ ひーひひひひひ。」「

笑い声はこの日途切れることはなかった。

中国大返し 19話

報は速やかに伝わっていった。

びつちゅうたかまつ

そしてここ備中高松にも届くことになった。

本能寺の変から三日の夜のことであった。

秀吉はこの報を聞くなり奥に引きこもった。

すすり泣く音は途切れることはなかった。

周りのものはこのままでは埒が明かない。

何とかしてくれ。と頼ってきた。

やらせておけ。

黒田官兵衛孝高は足を引きずらせた。

しばらくすると秀吉からお呼びがかかった。

はしほこいちろうひでなが

天幕の中に入ると、他の武将もいる。羽柴小一郎秀長。

はちすかこ

蜂須賀小

ろく
六らである。

真ん中には秀吉が小さい体をさらに小さくさせていた。

「かんべえええ。よく来たなあ。上様が、上様がああ」

「聞きました。お亡くなりになられたそうで」

「上様は、わしを、わしを百姓のの身分からここまで上げてくださった」

……話はまだ続いている。

報を聞いてからずっと、このように泣いては思い出話を語り、泣きながら上様とのことを語った。

いい加減うんざりする。

しかし今回は少し違った。

どうも様子が違う。泣きながら話をしているのだが、ところどころで冷静にこちらを見つめられた。

そろそろか。

秀吉殿も大変だ。苦笑するのを手で隠す。

「秀吉様。いつまでもお嘆きになっても上様は帰ってきませんよ。今こと不忠な行為で天下を取った明智光秀を成敗する時です」

天下をにおわせる。

「おまえ！！！」

秀吉は怒号を張った。

「秀吉様が討たないで、如何しましょう。我々こそ上様一の忠臣なのでぞ」

「もうよい。さがれ」

秀吉はまだ怒っているかのように官兵衛を退かせた。

演技だ。もちろん最初は演技ではなかっただろう。

本心で泣き、上様を慕ったのだろう。

秀吉のいいところである。

しかし、本心が演技になった。

私を呼んだのも仇討ちを献策させるためだろう。

このようなことは非常に難しい。

秀吉殿も大変だ。

わしは秀吉殿を使って天下に絵をかける。壮大な、誰も見たことのないような絵を書ける。

「恵瓊えけいにこれを」

官兵衛はすぐこちらにきてほしいという旨を書かせた手紙を急使に渡した。

毛利との講和は恵瓊えけいの働きが必要だ。

秀吉と毛利との和議は早急に進められた。

- ・高松城の開城しみずむねはる
- ・高松城城主、清水宗治の切腹
- ・毛利家の領地のうち、備中びつちゅう、備後びんご、美作みまさか、伯耆ほうぎ、出雲いずもの五力国を信長に献上すること。

この3点で合意を得た。ちなみに伯耆ほうぎ、出雲いずもは島根県東部と鳥取県西部である。

毛利家としては飲める条件であつた。

大阪、京への制海権を失い、さらに長年の織田家との戦は毛利家の台所事情にかなりの圧迫を見せていた。

官兵衛と恵瓊えけいの努力により1夜のうちにこれらのことが決定された。

もちろん一夜にして講和の提案がなされ、採決されたわけではない。

もともと秀吉は毛利を攻めるときに恵瓊を使い、何度も使者を行き来させてある。

講和の基本枠は既に定まっていたのだった。
それを今回少し譲歩させて、早期に結んだのだった。

そして、翌日から撤退が開始されることになる。

「宇喜多殿からお先に」

官兵衛はこの撤退の総指揮を任されている。

宇喜多家は前線に近い所に本拠地がある。混雑を避けなくては。それに宇喜多は信用できない。今ここで宇喜多に反旗を翻されれば秀吉殿はどうしようもなくなる。

八郎を連れてこればよかった。

あの小僧を岡山城に置いてきたのは間違いだった。

本人が残りたいと頑迷に要求したこと、宇喜多家家中が一応八郎の本でまとまったこと、後見人として指名され、信長にも認められたため強く出れなかった。

痛む足をさすりながら官兵衛は忠家に慎重に撤退を指示する。

雨が降るか。

この撤退、吉と出るか凶と出るか。

翌日、本能寺から五日。

全ての将に撤退の指示を出すと本営に入り、全てのものに飯をとらせた。

これから行軍が始まる。今のうちに栄養を取らせなくてはならない。

次はいつ飯を食われるかわからない。

そのうちに秀吉が心配そうな顔をして陣営に入ってきた。

「かんべえ。小早川隆景は大丈夫じゃと思うが、吉川の親子は気性が激しいゆえに我らを追って来るかもしれん。

したら、どうしようぞ？ 本能寺の件、毛利にばれたらわしらはおしまいじゃ」

撤退中に追撃されることは軍勢の死を意味する。

秀吉もこのことは金ヶ崎の戦いで身にしめている。

「小早川は信義に厚く、目先に飛びつくようなことはせんでしょう。山陽は小早川が主ですから。」

「そうか？ それでも吉川が独断するかもしれん」

「それでも大丈夫です」

微笑しながら地図を出す。

「高松城は先ほどまで水浸しでした。先ほどこの堰^{せき}を切りました。しかし依然として水は残っています。」

そして私が撤退するときに、他に20箇所程度堰^{せき}を切ります。高松城から南は水浸しになり一切の馬、人、車は通れなくなるでしょう。」

秀吉は安心して帰っていった。

これが後に中国大返しと呼ばれることになる。

中国大返しとしてよく勘違いされているのは、72時間耐久フルマラソンのように撤退したという誤解である。

そのようなことはありえない。

足軽の武器や武具を別で運び、要所要所に水や食料の補給地点を作り走らせる。

某大河ドラマであるシーンであるが、このようなこと実際に起これば京についたときに秀吉には一兵もいないだろう。

軍勢は一度崩壊すると、取り戻すことはできない。

実際は肅々と、地味に隊列を組み、京までの道のりを歩いていくこととなった。

中国大返し in 桃寿丸 20話

石山城。またの名を岡山城。

桃寿丸とうじゅうまるは現在ここの領主となっていた。代理という肩書きがついているが。

それは1ヶ月前のことだった。

「桃寿丸。俺は少し出かけてくる」

「どこ行くの？ また船でも見に行くの？」

「いや、今回は少し長くなる。3ヶ月ぐらいは帰って来れないかも」

「ええ！ その間、城はどうすんのさ」

「ん？ お前に任せた」

「ええ！ ぼく！？」

僕は決して有能ではない。それは八郎の側にいれば常に感じていることだった。

「ぼくには無理だよ。」

「大丈夫。大丈夫。又兵衛と隆佐がいるから。何かあつたら二人に任せればいいよ」

「無理。それに僕がこのまま城を取っちゃって八郎に返さないかもしれないよ？」

「そういうこと考えないの？」

もちろん本当に城をとろうとは思っていない。義父には感謝しているし、八郎も本当の弟のように思っている。

が、僕だって野心がある。年も16歳だ。武門に生まれたものと

して武功も上げたい。

「それならそれでいいよ。あーでもそうしたら俺の衣食住だけは保証してね。」

俺はお香と楽しくキャツキャツウフフしてるから」

八郎は最近良く見せるようになったとろけるような笑いを顔に浮かべる。

僕は頭を抱えた。八郎は一度言い出したことは必ずやり遂げる。鹿之助しかのすけがいい例だ。

今度ももう止まらないだろう。

「わかった。精一杯はやってみるよ。でも、どうなっても知らないからね」

「忠家ただいえさんが戻ってきたときは忠家さんの。それ以外は隆佐りゅうさと又兵衛またへえの言う事を聞けば大丈夫さ。鹿之助と行長と五右衛門は連れて行くからね」

そう言つて八郎はすぐに出かけようとする。

やはり前から計画していたようだ。今日出発するのだろう。

「あつ！ 忘れるところだった。」

八郎は部屋に戻ってきて、ぼくに一通の手紙を渡した。

「なにこれ？」

「今は意味のないものだ。だけど、もし毛利に行った我ら宇喜多軍が想像より早くこの城に戻ってきたときこの手紙の通りにすれば大丈夫だ。」

くれぐれも頼んだぞ」

「まあよくわからないけど。わかった」

「んっ。よしっ。くれぐれもなくさないようにね」

そういうと八郎は後ろを振り向かずに出て行った。

この一ヶ月前のやり取り以来僕が岡山城の領主ということになっ

ている。

最初はやる気があった。

領主として国を治めるとは思っていなかったが、できる限り最善を尽くそうと思っていた。

しかし、いきなり領主という立場になっても何をしていいのかわからない。

忠家はいないので、隆佐と又兵衛を頼ることになった。

隆佐に疑問をぶつけたところ返ってきたのは全くの予想外だった。

「桃寿丸様。何もしなくてもよろしいのです。当主というものはいるだけで十分な役割を果たしています。」

特に今は忠家様が軍事面を一手に引き受けていますので安心していてください」

「でも、八郎は色々やっていたよ」

「あれは、特別です。くれぐれも真似しないようにしてください。長生きできなくなりますよ。」

私も正直言いますと八郎様がいなくなって清々していますよ」

「そうなの？」

「そうです。お願いですから、何もしないでくださいね」

というような感じで一ヶ月が過ぎたのだ。

「ひまだー」

最近では独り言が多くなってしまった。

なんかいいことないかなあー。

と考えていると隆佐が慌てて入ってきた。

「桃寿丸様！ 戸川とがわのものが帰ってきました。」

「え？ まだ高松にいるはずじゃないの？」

「どうやら、毛利との和議をなしたそうです」

隆佐が説明をする。

「秀吉殿が帰還されるようですな」

又兵衛がどかどかと入ってくる。

「戦が終わったならいいことだね」

「そうでもないな。このような中途半端なときに帰ってくるなど
信長が許すはずないだろうて。」

何かあったのかもしれないな」

又兵衛がどかつと腰を下ろし髭をかいだ。

「なにかつて、何？」

「そんなこと某にはわかるはずもあるまいて」

「そうなんだ……」

どうしたらいいんだ。こんなときこそ僕がしっかりしないと。領
主の役目を果たさないと。

でも、なにをしたらいいんだ。

だめだ、全然わからないや。

「今は意味のないものだ。だけど、もし毛利に行った我ら宇喜多
軍が想像より早くこの城に戻ってきたときこの手紙の通りにすれば
大丈夫だ。」

くれぐれも頼んだぞ」

八郎の声が聞こえたきがした。

そうだった！　そういえば八郎から貰った手紙があるじゃないか。
あれは確か、僕の部屋の机の引き出しの中に大切にしまっておい
たはずだ。

「隆佐、僕の部屋の机の引き出しに手紙があるはずだ。取ってき
てくれない？」

「わかりました」

隆佐はすぐに部屋から退出した。

「なんなのですか？」

「さあ？　でも、たぶんきつと何とかなると思うよ」

そう。あれは八郎が書いた手紙だ。そして八郎はこのことを予測
していた。

そうならばきつとあの手紙が何か道を指し示してくれるだろう。
「もつてきました」

隆佐が急いでやってきた。

軽く息が荒れている。

手紙を貰うと、早速中を開け書いてある文に目を通していく。

桃寿丸。この手紙をお前が読んでいるということは俺は既にこの世には存在しないだろう。

え？ うそ？

冗談はそのくらいにして、本題を開始しよう。

この手紙を読んでいるということは、秀吉軍が宇喜多家に撤退を開始していることだろう。

そして桃寿丸、君はどうしたらいいかわからなくなっていると思う。

だが、心配しなくていい。下に行動指針を書き並べておいた。

1、お湯を沸かし風呂を用意すること。できるだけ多く。

2、ご飯、握り飯なんかを秀吉軍1万程度にいきわたるよう手配すること。

3、今回の秀吉軍の撤退を大いに盛り上げること。できるだけ派手に。

4、桃寿丸は秀吉を城門まで迎えにいき、できる限り言う事を聞くように。

5、秀吉軍の殿に黒田官兵衛がいるはずだ。彼に手勢を与えること。旗も。指揮は又兵衛辺りが良いと思う。

以上

追伸：これらが成功したら全て桃寿丸の功績としな。失敗したら俺が責任を取る。

んんー？ 正直よくわからない。

風呂とご飯を用意することは兵を休ませるためなのだろう。

なぜ、撤退を盛り上げなくてはならないのか。よくわからない。

「桃寿丸様。何と記されておるのです？」

又兵衛が僕に聞いてきた。

「ご飯を用意しろ。お風呂も。あと盛り上げろって」

「そうですか。で、どうなさるので？」

又兵衛は僕を試している？

「隆佐。握り飯をできるだけ多く作れる？ あとお風呂もできる限り」

「わかりました。なんとかしましょう」

隆佐は了解するとすぐに準備をするため部屋から出て行った。

隆佐が部屋から出て行ったあと、ゆっくりと考える。

盛り上げるか。何をすればいいんだろう。

盛り上げる……

「祭りなんてどう？ お祭りすれば盛り上がるんじゃない？」

「ほう、祭りですか。面白いですね。よろしかろう。私が指揮致します」

幸いにして八郎のおかげで宇喜多家は好景気真っ最中である。

宇喜多家が財源をどぶに捨てるように放出しているためだ。

隆佐が嘆いていた。

この状態なら祭りも盛り上がること間違いなしだ。

また暇になっちゃったなあ。

そうか！ 領主はそういうものなのだ。

方向、行き先を決めるだけなんだ。後は任せればいい。そういうものなのだ。

祭りの準備は又兵衛主導で行われた。

又兵衛はその大きな体をいっぱいに使い指導した。大名主催の祭りである。

人が行きかい、太鼓を打つもの、鉦を鳴らすもの、陣貝を吹くものなどが乱れている。

誰もとがめるものはいない。

元々、又兵衛はこういうものが好きなのだろう。

「戦も祭りも要領は同じだ。桃寿丸様、お任せあれ」と豪語したので安心して任せている。

うん。又兵衛は頼りになる。

着々と準備が進んでいく中で、続々と宇喜多家家臣たちが戻ってきた。

戸川を筆頭に家臣たちが続々と帰ってくる。

その中には忠家も混じっている。

もちろんこれらの家臣全員城門まで迎えに行った。

「桃寿丸様。ありがとうございます。わざわざ迎えに来てくださるとは」

という具合に予想外に感謝されてしまった。

そしてついに秀吉を迎えることとなった。

既に祭りは始まっている。

岡山城下はこれまでにない喧騒に包まれ、商人、近くの農民、旅

人などであふれかえっている。

秀吉は輿に乗ってきた。

僕は岡山城付近の野田というところまで近習と共に迎えにいった。秀吉は引き戸を開け、僕の顔を見ると

「よう来て下された」

とうれしそうにいった。

そして、怪訝そうな顔をして聞いてきた。

「八郎殿は、来られないのか？」

「八郎は用事があるといって今ここにはおられません。今は僕が領主代行です」

と答え、八郎の出て行った経緯を説明した。

申し訳ない気持ちがいっぱいだ。なぜ八郎はここにいないのだ。初めて気づく。これは八郎の仕事ではないのか。

もちろん僕も秀吉も目で語るだけでそれ以上は口にしなかった。

秀吉としてはここで八郎に会えないのは厳しかった。宇喜多家は既に信長の訃報を知っているのかもしれない。

そしたら秀吉軍に向けて兵を挙げることも不思議ではない。この地が敵地になった場合全滅する。

宇喜多の人質として八郎を自分の輿に入れておこうと思ったのだが、いないのならそれもできない。

気まずい沈黙の中秀吉を乗せた輿は岡山城までつくことになった。

岡山城城下の喧騒を目の当たりにした秀吉は苦い顔をしたあと

「これは、いったい何が始まるのだ？」

と口にした。

「祭りをしているのです。秀吉様にも是非参加してもらいたいと思います」

秀吉は困惑したような表情でこちらを見たが、合点したように頷く。

戦が始まるのか、宇喜多が寝返ったか、と思ったが違っらしい。

どうも本当に純粋な祭りなのだろう。城下にこれほどの人がいることからわかる。

なら、なぜ？ という疑問が出てくる。

「これはこれは、ご好意かたじけない。私も参加したいがなにぶん急ぐ身の上です。

一泊して部下には英気を養ってもらいたいと思うが、どうだろうか？」

「大丈夫です。すでに部下の方にも風呂と飯の準備はしてありますから」

これは、わしの軍への慰撫なのだ。士気を落とさないよう宇喜多が気を使っているのか。

秀吉軍は日本史上類のない大掛かりな撤退を演じている。

そう、撤退なのだ。

信長が破れ、毛利家との戦線を支えきれなくなった。つまり敗軍というわけだ。

しかし、それを兵に悟らせてはいけない。むしろこれからの戦で天下を取れるということをわからせなくてはならない。

撤退でなく、天下への行軍としたい。秀吉の本心だ。

撤退とは兵が敵兵にかかって死ぬよりも多く兵の士気が下がって軍を離脱する方が多い。

1人離脱したら千人は離脱する。金ヶ崎の戦いで秀吉は身にしみ

てわかっている。

宇喜多は我が軍の士気の低下を防ごうとしている。

宇喜多が信長の計報を知っているのかわからないが裏切ることはないと見ていいだろう。これが策略でない限りは。

しかし、そうであるならば、わしが天下を取ったとき、毛利だけでなく宇喜多にも貸しを作ってしまうことになる。

これはまずい。

「ほう。そうか。してこれは桃寿丸殿が考え付かれたのですか？」
盛り上げるといわれたのは八郎の手紙からだ。しかし追伸には僕の手柄にして良いとあった。

これは手柄になるのか？ 秀吉の表情からはわからない。
もともとこうしろといったのは八郎なのだ。これを自分の手柄にすることはできない。

「いえ、八郎が命じました。僕はそれに従っただけです」

「八郎殿はいつごろでかけていったのですか？」

「ええーっと……一ヶ月前ぐらいですね」

一ヶ月前！ 八郎は既に予想していたのか。信長が本能寺で討たれること。わしが撤退すること。

いいや、そんなことありえるはずがない。

秀吉にかすかな悪寒が走った。

「しかし、実行に移したのはおんしだろう？ なら手柄はおんしのもんだ。わしから感謝しよう」

「それは……」

そのとおりだ。と桃寿丸は思う。だが手柄を横取りした気分だ。あまりいい気分ではない。

その後秀吉は一泊した後、すぐさま岡山城から姫路城まで進んでいった。

あとから来るであろう大勢の部下をねぎらってやってくれと桃寿丸に懇願した。

その秀吉の心中に苦々しい思いがなかったとは言い切れない。

中国大返し i n 桃寿丸 20話（後書き）

更新が遅くなって申し訳ないです。リアルがどうしようもないことになっていきます。マジでつらいです。

今後更新が遅くなります。ご理解ください

中国大返し 21話

殿の官兵衛は秀吉から半日ほど遅れている。しんがり かんべえ

行軍による街道の混雑のため予定より遅れている状況だ。

官兵衛が宇喜多領に入り、岡山城に着いたとき、これようやく一仕事が終わったと思った。

岡山城は一大要塞である。もし毛利が今から追撃してきたとしても岡山城で腰を下ろさなくてはならない。

宇喜多家の反逆は気がかりだが、秀吉が無事通過できていることから問題ないであろう。

反逆するのなら秀吉が岡山城に入ったときを逃すはずがない。

官兵衛は岡山城に近づいて初めてその喧騒を目の当たりにした。ふむ。あの小童はあれでなかなか戦というものをわかっている。

秀吉軍には秀吉しかない、秀吉とわし、次に小一郎殿しかないと思っていたのだがこれは楽しみだ。

岡山城城下につくと桃寿丸殿とうしゅうまるが迎えに来てくれた。

確か、八郎の義兄だったなと記憶を掘り起こす。

「八郎殿は？ それとこの騒ぎは？」

桃寿丸は苦笑いした後

「八郎は一ヶ月前に出かけました。今は所在不明です。

これは今祭りの真っ最中でして。部下の方も粗末ではありますが歓迎の用意をしてますので」

官兵衛の部隊は疲れていた。

風呂と握り飯と平時では粗末であるがこんなときにはこれほどありがたいものはない。

これは気が聞く。祭りでの士気低下防止、細かな気遣い。なかなか

かできるものではない。

「これは桃寿丸殿が？」

「いえ、八郎の命令です」

「八郎殿はいないと聞きましたが？」

「手紙を書いてくれたのでそれに従っただけです」

「そうですか。その手紙見せてもらっても？」

「いいですよ」

桃寿丸は官兵衛に手紙を渡した。

ふむ。これは……

「これは届いたのはいつですか？」

「いえ、これは届いたのではなくて八郎が行方不明になる前に書いていったものです」

「というと、一ヶ月前？」

「そうです」

秀吉の行動もわしの考えもあの小童はわかっていたとでもいうのか……

本能寺の変さえも。

手放しでよろこぶわけにもいかな。

「桃寿丸殿、この手紙の通りに今回は桃寿丸殿の手柄になされよ。この手紙はすぐに燃やしてしまった方がいいでしょう」

官兵衛も秀吉も残酷な面が強調されることの多い人物であるが、本来は人の命を惜しむ人物である。

無用な殺生はさけるにこしたことはないと思っている。

今回も純粹に桃寿丸、八郎を思つての言葉である。

「私に部隊をつけてくださると手紙にありましたが？」

「そうだった。忘れるところだった。又兵衛またへえを呼んできてくれ」
桃寿丸は近習に命じた。

そうするとすぐに又兵衛はやってきた。

自身も祭りを楽しんできたのだろ。上半身の着物ははだけ、汗が滴っている。

「お呼びに与かりました」

手ぬぐいで汗をぬぐいながら又兵衛は言った。

「久しいな、又兵衛」

「ご無沙汰しております。官兵衛殿」

官兵衛は元又兵衛の上司である。

いろいろあつて又兵衛は官兵衛の元を離れることとなつてしまつたが、官兵衛は又兵衛のことをかっている。

「それじゃあ、又兵衛。忠家のところに行つてきて。話はついているから。じゃあ官兵衛殿、ごゆるりと」

桃寿丸はそういうと官兵衛の下を去つていった。

秀吉殿なら賛成はすまい。

毛利だけでなく宇喜多にも恩を売ることになつてしまふからだ。

毛利はすでに我々秀吉軍を追撃しないことで、秀吉の天下取りを応援している。

ここで宇喜多軍の兵士を光秀征伐に参加させることは宇喜多に多大な恩を与えてしまうことになる。

といつても官兵衛には秀吉が天下をとつた後のことなど大して関係ない。

秀吉に天下を取らせさえすればいいのだ。
そのためならどのようなものも使うつもりだ。

休息を終えた官兵衛の部隊はすぐに出発した。

部隊は高松城出発時よりも増大している。又兵衛率いる五百名が部隊に加わったからだ。

さらに宇喜多の旗も貸してもらい官兵衛自身の部隊にも持たせている。

我々の背後に宇喜多家がいると光秀への警告である。

官兵衛が急行軍して姫路城に着いたのは8日の夜である。

姫路城は元々官兵衛が居住していた城である。しかし、信長の進出、秀吉の出世を早期に見抜いていた官兵衛は秀吉の播磨進出を後押しし、さらにその足がかりとして姫路城を秀吉に与えた。

自身は姫路城よりも田舎にある屋敷に住むことになった。
城全体に篝火が焚かれており、昼間のように明るかった。

あちこちに幕がはられており、出っ張ったところに秀吉自身がい

た。
「おお、官兵衛。ご苦労であつた」

秀吉自身が手を叩いて迎えに来た。

秀吉は官兵衛にねぎらいの言葉を大声ではやし立てた。

秀吉もこの撤退の殿を勤めた官兵衛の苦労をわかっているのだろ
う。

秀吉が官兵衛の部隊を見たときに、宇喜多の旗、宇喜多家から連れてきた部隊を見ることになった。

これらの行為は全て官兵衛の独断である。

「官兵衛。良いことをしてくれた」

といったが目は笑っていなかった。

この時期、官兵衛の献策はことごとく秀吉に採用された。

それほど秀吉が官兵衛に信頼を置いていたということであろう。

「姫路に軍勢をとどまらせることはなりません」

この時期の秀吉の拠点は姫路城である。

当然、士卒の家族は姫路城下に住んでいる。

いったん家族の下に部下を返してしまつと、士気に影響が出る。

逃亡もあるかもしれない。

これらを懸念してのことである。

1人として家族の元に立ち寄ることは許さない。破ったものは死刑である。

このようなふれが出され、実際秀吉の軍勢は皆旅籠に泊まることとなった。

この時期の秀吉の織田家の立場を少し紹介しておこう。

秀吉は織田家諸將に好かれることは少なかった。

元は得体の知れないものが天を上るように出世していくのだ。織

田家家臣としては気持ちのいいものではなかっただろう。

柴田勝家は無論のこと、たきがわがすま滝川一益などは口もきかなくなつたらしい。

例外として前田利家、まえだとしい丹羽長秀ぐらいだろう。

その丹羽長秀は現在大阪にいる。

最も京に近い。これは最も明智光秀に近いと同意義である。

丹羽長秀は織田信孝おだのぶたかとともに四国にあたっていた。

阿波あわの国を足がかりとして四国の切り取りとしる信長から命令されていた。

阿波とは四国の右、つまり今の香川、徳島は近畿経済圏の一角をなしている。経済的にも重要拠点である。

応仁の乱時代、戦国初期には三好氏などが京から逃れた後四国に逃亡し力を蓄え、再び京へ攻め上ったこともある。

京という地理性を考えれば切り取っておかなくてはいけないところである。

信長の配下の増大もこれに拍車をかけている。

信長が天下を取った後、部下に土地を配分しなくてはならない。

四国は絶好の刈り取り場であった。

四国の領主は長宗我部元親である。信長は長宗我部元親をあまりかっっていなかった。

信長の訃報を聞いたとき信孝、丹羽長秀は大阪で四国征伐の人員を集めているところだった。

当然、四国征伐はできず、長宗我部元親の手に落ちることとなる。

光秀に最も近い位置にいながら信孝が出陣しなかった。

その理由として挙げられるのは人員不足である。

堺で兵を集めていた信孝の軍は当初一万の兵を持っていた。

しかし、信孝は出陣しようとしなかった。

ぐずぐずしているうちに兵は減っていき、一万いた兵が2千まで減っていた。

歴史にifを求めるのならここで信孝が無理をして出陣していれば歴史は変わっていたのかもしれない。

たとえ兵力が少なからうと光秀に対し果敢に兵を上げるべきだった。

そうすれば、日和見を決め込んでいる筒井順慶、つついゆんけい細川藤孝ほそかわふじたからを動かすこともできたのかもしれない。

そして天下継承への発言力を増大することも可能だっただろう。兵は刻一刻と減っていく。

そのような中で秀吉東進の報が入る。

信孝、秀長両名はほっとしたに違いない。

特に信孝は秀吉の上に君臨し、次代の天下人となることを夢想した。

信孝は摂津に入ったという秀吉の報を聞き、高山右近らを迎えにやらせた。

決して自分からおもむこうとはしなかった。

織田信孝率いる軍勢と羽柴秀吉率いる軍勢が合流したのは尼崎あまひきの寺であった。

秀吉の軍は中国からの強行軍のため皆疲れていた。

地面にうなだれるもの、たおれているもの、そこら中にあふれていた。

大阪から信孝、秀長がやってきたのはこのようなときであった。

信孝は馬でやってきた。

普通、信孝ほどの、君主の三男ほどのものが馬上に見えたのなら最低、どれほど粗野なものであれ目礼ぐらいするものである。

しかし、秀吉軍には目礼どころか目をあわすものもいなかった。

信孝は黙っていた。

信孝は自分が大阪から動けなかったのを攻めているように感じた

だろう。

秀吉はここまでしているのに自分は大阪で兵を減らしたただけなのだから。

信孝が来訪してすぐに評定が開かれることとなった。

上座に信孝が座り、ついで丹羽長秀、そして羽柴秀吉が座り、その下に堀久太郎、池田恒興そして高山右近らが座っている。

秀吉が最初に口火を切った。

「上様の仇をとらなくてはなりません。

逆賊、光秀を討ち上様の御霊をしずめなければなりません。

私はこの戦に命を懸けて降りますれば、この命たとえ朽ちようとも果たさせていただきたい。

たとえこの首が落ちたとしても首ごと光秀めの喉にくらいついてやりましょう。」

といったことをろうろうと、こんこんと語った。

他の諸将、丹羽長秀を含め、信長の敵を討つことに批判はない。

唯一、織田信孝のみが難色を示していた。

言葉に出して批判しないが言外に含んでいる。

この会議の争点は奇妙なことに光秀をどう打ち破るのかということには一切触れられなかった。

この軍勢を率いるのは誰か。総大将はだれかということである。

ゆえに秀吉は戦に引き込みたかった。

戦さえおこせば、多くの兵を抱える秀吉が光秀を討ち取ったことになる。

勝つこと。戦をおこし光秀の首級を上げさえすればよい。

結局、評定は秀吉に押されることとなる。

秀満は重い体をあげた。
ひでみつ

本能寺の変での戦闘で意識を失ったものの、すぐに兵をまとめ撤退した。

殿はそこはわかったもので

「勝敗は兵法の常。秀満、おぬしでも敗北するのだな。茶のようにはいかんか」

といつてから笑った。

殿は元来部下に対してはこのような側面も見せることがある。

信長がこのことを知っていれば殿への扱いも変わったかもしれない。

せんないことか。すでに火蓋は討つて落とされたのだ。

幸い体に支障が残る怪我は残らなかった。

すでに殿は京にいる。

京では殿も苦勞しているだろう。

すでに近江は殿が完全に制覇しておられる。

美濃も稲葉一鉄との不可侵条約が成立した。

筒井順慶、細川藤孝らの諸将の集まりが悪いことは気になるが、

これも時間の問題だろう。

光秀、殿は本能寺の変以来変わられた。

元来がそうだったのか、信長の抑圧から解放されてのことなのかはわからない、無理をしているのかもしれない。

明るくなられた。底抜けなほどに。

理財には明るい殿であつたのに安土に残った金銀を京の寺社などに寄進した。

きたるべき一戦に勝てば、どれほど金銀を喪失しようが再び集めることができる。

殿はすでに天下を取っておられるのだ。あとはこれを維持するだ

けでよい。

「とのー、とのー、殿、一大事でございます」

「どうした、何事だ」

「秀吉殿が姫路に向かつております」

「姫路に？ 毛利はどうなったのじゃ」

「毛利とは和議を結んだもようゆえ」

「すでに？ 信じられん」

秀満は呟いた。

まさか！ と思わずにはいられない。

秀吉が京につくのは早くて一ヶ月を見積もっていたのだが。

織田の諸将はすぐには動けないと判断していたのだが。

一番恐いのは上杉を当たっていた武闘派の多い柴田勝家だということ自分で自分が安土に居座っているわけだが。

「殿は？」

「日向守殿はすでに手勢を集められております。

反織田勢力を手際よく集めておられます。秀満殿、どうなさいますか？」

「どうするも何も決まっておるわ、後詰に出るぞ」

天王山の戦い 22話

この時代、軍師という明確な職業は存在しない。

常に軍を指揮する大将に任せ、戦略、戦術の面で能力を発揮するというわけではない。

もちろんそれに似た役目を果たすことになるのだが、明確な職業定義もなければ、軍師という役割を構築する組織体形もない。

特権も存在しない。

簡単にいつてしまえば軍師とは部下の中で戦略、戦術において大將から最も寵愛を受けて、献策を採用されることが多いというだけに過ぎない。

よって軍師といえど部下を指揮して戦場に行くこともあるし、戦闘もこなさなければならぬ。

官兵衛かんべえも戦場の一端を背負わされている。

足が悪いため輿に揺られているので、自身が槍働きできるわけでもない。

それでも部下の指揮は行う。

もともと官兵衛は最前線で部下を叱咤して戦うタイプの武将ではない。

足を患う前と後で変わってはいない。

宇喜多家から預かっている兵は官兵衛の指揮下に置かれている。

幸いなことに後藤又兵衛ごとうまたへえとは旧知の間柄で、彼本人の能力も官兵衛はかっているため支障はない。

もちろんこの天下分け目の、山崎での戦いでもわいてくる戦術、戦略はいくつもある。

が、私が任されているのは秀吉の軍の一部、左翼に過ぎない。

私の役目も終わったのだ。

官兵衛にさびしいような、わびしいような感情が芽生えてくる。

私の役目は秀吉をここまで連れてくることこそであつたに違いない。

幼少のころから智謀があり、才覚もあつたが、君主や同僚、地理に恵まれなかった。

何かを成し遂げたいとも思っていた。それで失敗したこともある。秀吉を使い、天下に絵を書く、十分すぎる役目だった。

後は秀吉自身が行わなくてはならない。

天下を取る足がかりは作った。これを維持するには織田家への切り崩しが必要だ。

今後の秀吉の相手は柴田勝家、丹羽長秀、さつさなりまさこ滝川一益、ほそかわゆうざい前田利家、佐々成政、細川幽斎などの大名である。

そこには私は必要とされていない。

わかつているし、自身で望んだことではあるがさびしいような気持ちとはとめることができない。

中国大返しから一気に光秀との戦端を開いたかのように見られる山崎の戦であるが実は両軍にらみ合うこと数刻の時間を費やしている。

光秀の方は防衛戦争であるから、相手の出方を伺うことは理にかなっている。

光秀の方が寡兵であつたのでその点からもおかしいところはない。信孝、秀吉は4万、光秀一万6千である。

光秀は兵を北方に移して、柴田勝家の備えとした。

このことから光秀の兵力は寡少となっている。

光秀の方はわかるのだが秀吉の方は不思議なことがある。
本営が山崎から遠すぎるのである。

これでは秀吉は前線を指揮することはできない。合戦を見ることもできない。それでは士気に影響が出る。

もちろん秀吉がこんな簡単なことわからないはずがない。

秀吉は

「三七殿はまだ来られぬのか」
と方々に叫んでいるらしい。

三七とは織田信長の三男である、信孝ののぶたかことである。

これを聞いて官兵衛は合点がいった。

信孝殿を待つておられるのか。

信孝殿は先の軍議で秀吉を総大将とすることを認めた形になった。
よっていったん軍に参陣すれば一武将となる。

嫌なのだろう。

秀吉の下につき、自信の実益が全く得られない合戦に参加する。

たとえ飾り物だとしても総大将として参加できれば喜び勇んだであらうが、それも適わない。

拗ねているのだ。まったく子供である。

もっともこのまま来ないという心配はない。

秀吉が信長の敵討ちをしているときに自身はただ大阪で遊んでいたなど通るわけではない。

ただ精一杯の抵抗として、参陣するのを渋っているにすぎない。

まあこんなことは私には関係のないことだ。秀吉が解決すべき政治問題だ。

おおっと！

あやうく輿から落ちそうになってしまう。

思考が別のところにいつていた。

山道で輿に乗っているのは辛いものである。

官兵衛は左翼を任されている。よって天王山に登らなくてはならない。

他にも自発的にであれ、命令されてであれ多くの部隊が天王山に登っている。

天王山。

秀吉軍から見て左に位置するこの山は非常に気になる山であった。戦術的にそれほど重要なわけでもない。大勢に影響するほどの価値はないと見ている。

気になる山という表現がもつとも的確だろう。

とっておいて損はない。ということに登っている。

両軍が衝突したさい、この山から鉄砲を撃ちかけることができる。

「殿！ 殿！」

「どうした？ まだ光秀が動くには早いだろう」

「それが、物見が戻ってきたのですが。」

幾分要領を得ないようでした。もしよければあっていただけないかと

「そうか、通せ」

物見とは今で言う斥候である。

本隊が通過するところの道を前もって調べ、敵兵の有無、その他情報を得るためのものである。

物見の重要性がわかっていただけに彼らの言う事を粗末にはできない。

「この者が、この先で兵を見たそうで」

「兵？ 光秀がすでに陣取っているのか？」

「いえ、どうも違うようです。詳しくはこの者に」

「なにがあつた？」

物見に問いかける。

「私が見たのは、5百名ほどの兵です。非常に規律正しく、この先に布陣しております。」

「光秀の軍ではないのか？」

「いえ……私も最初そうではないかと思っていたのですが、どうも様子が違うようでして」

「よくわからんな。旗は、旗は見たのか？」

「それが……」

官兵衛は今まで登ってきた山を少数の兵を率い、全速力でかけ戻った。

輿を担ぐものが一步步くごとに激しく揺れるがそんなことは一向に気にならなかった。

わしが描いたものを、描こうとしたものが崩れていくのを感じた。しかし、不思議と先ほどまで抱いていたさびしい感情は霧散していた。

やってくれた。やってくれたわ。

わしも、秀吉もあの小童の手のひらで踊っていたということか。なぜか爽快感に浸されている。

後ろではすでに合戦が始まったらしい。

鉄砲の音、陣笛の音がこだましている。

信孝殿がやってきたことによって、秀吉本陣が前方に移動すること、前線が押し上げられる形となり戦端が開かれた。

しかし、官兵衛はそんなことにしていない。

今は秀吉の本陣に向かうべきだ。
それも早急に、迅速に。

「かける。足が折れてもかける」
兵に叱咤激励する。

わしの役目もまだ終わっていない。これからまたこき使われることになるう。

官兵衛の顔には笑みが浮かんでいた。

秀吉の本営に着いたときにはすでに戦も佳境の時であった。
どちらかといえば秀吉軍がおされている。

光秀の軍は、光秀の教育の成果であらう。足輕まで精強で、手ごわい兵である。

それもここまでだ。

帷幕いはくの中に入っていくと秀吉が驚いたようにこちらを見てきた。

「官兵衛、そちは左翼だったはずだが？」

官兵衛は質問には答えず。ゆっくりと指を上に指し示した。

「まさか！」

「そのまさかでございます」

秀吉は驚愕し、呆け、泣いた。

そして最後に笑ったあとだった。

「我らの勝ちが決まったぞ」

山崎の戦い 23話

時は少し遡る。

本能寺。

洛中、京都において信長が拠点としている場所である。

ちなみに現在本能寺は一大城塞として生まれ変わりつつある。

元々、足利幕府の庇護の下栄えた寺であるが、応仁の乱、天文法^{てんもんぽう}華^けの乱により2度の焼失にあっている。

信長が目をつける前は再建もままならず半壊の状態であった。

しかし信長の拠点となつてから急速に軍事要塞化しつつある。

堀や空掘りも作られている。

まだ製作途中であるため、堀はむき出しで、空掘りも浅いところがちらほらと目立っている。

なぜ本能寺なのか。

信長ほどの地位を持っている人物であるのなら、京に自分の拠点となる場所をすでに作つていてもおかしくない。

朝廷との会合、交通の便からしても京に信長専用の屋敷を持つておくことは利となるだろう。

しかし本能寺を使うという一見不合理ともいえる行動を取っている。

本能寺の周辺は市街地となっていない。

閑散としており、兵の集合に適切である場所だった。

さらに浄土宗に対する政治的均衡を配慮してのものでもあった。

しかし、一番重要なことは京という地形に存在する。
京というのは非常に守りにくい地形である。

盆地で四方が山に囲まれている。

一見すると守りやすいように感じるこの地形であるが、侵攻ルートが複数存在する。

守備側はその全てに兵力を配置しなくてはならない。

兵の集中ができないのだ。

これは歴史が証明している。

源平、南北朝これらを信長が知っているのかどうかはわからない、
が天性の才で気づいたのだらう。

「春長軒様、急ぎましよう」

小西行長は八郎に信長の脱出を命じられてからすぐに本能寺に行
かずに向かいの春長軒しゅんちやうけんの自宅むらいさだかつに寄っている。

春長軒しゅんちやうけん。別名村井貞勝、信長に京都所司代を任されている男である。

「脱出の手はうつてあるのだらうな」

「ぬかりなく」

信長から京に関する全てを任された男である。

行長から知らせを聞いた後、すぐに信長の元に使者を送り、春長
軒自信も迅雷のごとく本能寺へ向かった。

本能寺の本堂には信長と森蘭丸もりらんまるが待っていた。

「何事だ」

雷のような怒号が響き渡った。

「謀反にございます」

春長軒殿しゅんちやうけんが答える。行長も隣に平伏している。

頭の上から声が響いた。

「城介じょうすけが別心わかごころか！」

城介とは織田信忠おだのふただのことである。

「惟任これとうひゅう日向守殿うがのかみでございます」

「たわけ！」

行長はビクツと肩を震わせた。

そもそも行長は信長に謁見をする身分にはない。

行長は陪臣ばいしんであるためだ。

直卒じきそつ、陪臣ばいしん、この2つには明確な違いがある。

簡単にいつてしまえば、秀吉は直卒、官兵衛は陪臣である。

直卒は信長に対し、直々の謁見を許される身分であるが、陪臣は直卒の家臣であることが多く信長と謁見するには数々の手続きを踏まねばならない。

ものすごく簡単であるがこのような感じである。

よって礼儀として顔を上げるわけにも行かない。

行長は、信長が言った「たわけ！」も自分がここにいることに対しての怒りなのだと思った。

ちなみにこの「たわけ！」はなぜもつと早く伝えなかったという意味である。

信長という男をよく理解している春長軒はすぐさま返答した。

「恐れながら、私も至急かけてきたしだいでございます」

「申せ！」

再び頭上から怒声が響いた。

これは行長に向けての言葉である。

なぜ今まで伝えようとしなかったのか行長に尋ねている。

極端に言葉を惜しむ、長い言葉をしゃべることのできない、必要性を感じていない信長独特の会話である。

もちろん行長は自分が問われていることとは思わない。

信長とまともに会話することは長く仕えたものでさえ相当難しい。そもそも行長は信長に対して発言できるとは思っていない。

陪臣とは面会も直答も信長の許可をいちいち得てからしなくてはならないものだと思っている。

事実、普通の大名の場合行長の考えは間違っていない。宇喜多家ですらそうなのだ。

「小西殿、小西殿」

小声で春長軒が行長に早く答えるよう促す。

それでようやく自分が発言を求められているのだと気づいた。

あわてて言葉を発した。

「事が起こるまで上様は納得されなかったでしょう。わが主君、八郎様が申しておりました」

信長のこめかみに血管が浮き出た。

春長軒は頭を抱えた。

横に控えている森蘭丸も表情が変わっている。

「何ものだ」

「宇喜多八郎でございます」

「宇喜多の倅であるか、いかようにして謀反を知ったのだ」

森蘭丸が機先を制した。

信長は怒っている。

その矛先は今行長一人に向かっている。

いつ切られてもおかしくない。そもそも信長が今まで行長の首を残していることが不思議なくらいだった。

森蘭丸は行長をかばった。

「私にはわかりません。八郎様の下地どおり、手はずを整えたのみでございます」

「宇喜多はどこにおる？」

信長の眉間にしわがいつそう深く寄せられた。

「現在、明智の手のものの侵攻を防いでおります」

沈黙が流れた。

行長は平伏したまま答えているため、信長の顔を見ることはできない。

しかし視線は執拗なまでに感じられた。

生きた心地がしない。ここで首をはねられるのかと思った。

「そうか、手筈は！」

行長と春長軒は顔を見合わせる。

手筈とは先に謀反のことを知っていたのなら、今後の考えもあるだろう、それを申してみろということだ。

春長軒は面を上げた。

「それについては某に腹案がございます。

されば、上様、御装束をいただければと」

「討ち死にする気か」

「左様でございます。

逃げ道はここにあります行長殿が心得ております。

明智が上様をみすみす見過ごすとも考えにくうございます。

私が適任かと」

信長はこめかみを押さえながら少し沈黙した後、相変わらず、短く、甲高く、言った。

「恩は忘れぬ」

こえー！ やばい！ やばいよ！ 俺死んじゃう！

わかっていたのに。覚悟はしていたのだが、かなり恐い。
夜の闇の中ひたひたと足音だけが聞こえてくる。

いくつものたいまつがゆらゆらと揺れながらだんだん近づいてくるのは身が凍る思いがする。

こちらにも相手も奇襲を狙っているので音は一切聞こえない。
さっきまで聞こえていた夏特有の虫の音もすでに聞こえなくなっている。

辺りには硝煙独特の火薬臭い臭いと、汗の臭いで充満している。

とりあえず、おざなり程度ではあるが障害物を使いなんちゃってバリケードを作った。

少数で大勢を迎え撃つのだ。あるものは精一杯使わせてもらう。

京の西方、本能寺からの見て鴨川の反対側、つまり現在地は未だ
応仁の乱の傷跡から回復しきっていない。

廃屋と空き地しかない。民間人がいないのは幸いだろう。

戦いの火蓋は轟音と閃光によって開かれた。

左右から一斉にフラッシュの如き閃光がはためく。
もちろん味方のである。

そのあと敵の足軽がバタバタとたおれていく。
もちろん夜の闇の中では確認できるわけが無い。
が、俺には敵が倒れていると思っ込んだ。

よしっ！ 思わずガッツポーズをとる。

ひとまず奇襲は成功した。

「次の弾込めっー！ 急げー！」

声を張り上げる。

将の条件としてよく通り、大きい声というのを聞いたことがあるがそれをつくづく感じられる。

練習しておけば良かった。

岡山城のてっぺんから発声練習をしている自分の姿を思い浮かべる。

シユールだな。

「よし！ もう一回！ うてー！」

再度射撃の号令をする。

敵がバタバタと倒れていく。

混乱しているのがここからでもわかる。

ワレ奇襲二成功セリ。

なんか楽しくなってきた。

気分がうきうきしてきた。

今まで恐くて遮蔽物に隠れていたのだが、俺に敵の弾は当たるものか！

遮蔽物から体を出す。

敵の将が兵をまとめて突進してくるのが見えた。

狙い通り、わざと粗く造っておいたバリケードに向かって突進してくる。

ふははははは。

笑いながら大きな手振りと身振りをし

「レッツウウウウウ、パアアッリイイイイイイイ」

叫んだ。

廃屋に隠しておいた左右の兵から一斉に射撃が行われた。

距離がかなり近かったため、先ほどまでと打って変わって多くの兵が倒れていった。

思わず踊りだしたくなった。

敵兵は総崩れを起こし背後に逃げ出していった。

よしっ！ 今なら何でもできる！ なせばなる！

「おえー！ 一気に片付けろ！ これを逃すなー！」

ハイテンションのまま命令を飛ばす。

「ぜーんぐーん、とーっーげーきー！！！」

といいかけたところで

ゴッソッ

と後頭部に衝撃がかかった。

「いつつう……」

頭を抱えてそのまま地面にのた打ち回る。

慌てて背後を振り返ると鬼の形相をした山中鹿之助がいた。

「あれ？ 鹿之助？ しかのすけ 信忠はどうしたの？ 何でここにいるの？」

「なんでもどうしてもありません。直ちに先ほどの命令を撤回してください。兵を無駄死にさせるつもりですか！！！」

「えー！！！！ 今が好機だよ。一気に押すところでしょ」

「ダメです！ 直ちに撤退命令を。すでに目的は果たしました。

我々も逃げますよ」

不満は残るが、しょうがない。鹿之助の方が戦場において何年も、何十年も先輩という事実を思い出す。

「わかったよ。全軍撤退するぞ。直ちに白装束の上から元着てた服に着替えるんだ」

元着ていた服とは、京に潜入するときに来ていた服のことである。つまり商人や馬借、農民の服のことだ。

目くらまし程度にはなるだろう。

リュックや、ポケット付きの服、迷彩服、リバーシブルの服など

も揃えると今後戦闘が楽になるのかもしれない。

特にこのような小規模の部隊戦を今後も行う機会があるのなら考えておく必要があると思うだ。

「早かったね。2部隊に別れたって聞いたけど、そっちにはそんなに兵がいかなかった？」

俺はだいぶ落ち着いてきたので鹿之助に聞いた。

「千名ほどはいましたな。主殿も突撃するなら最初から突撃すればよかったんですよ。」

なんせ今回は奇襲なのですから。流れは最初は拙者らのほうにきますからね。そこで一気にたたみこめばいいんですよ」
それ、できるのお前だけだから。

撤退は比較的スムーズに行われた。

岡山から京まで小部隊で長距離行軍をなしてきた精鋭部隊なのだから兵の練度はかなり高い。

実戦を超えることで精鋭部隊が出来上がった。

もちろん全く問題がないわけではない。

上官、小部隊の隊長が京につかず、部下のみ京に集まった隊もいれば、上官の命令をどう見ても聞いてなく勝手に振舞っている隊もいる。

この時代では実現不可能とも言えることをしようとしているのだ。問題が出るのは当たり前である。

それでも、満足できる出来だといえる。

八郎と鹿之助、その部下が京郊外の寺に着いたのは明け方ほどのことだった。

「やっとついたー、つかれたー」

ほぼ夜通し歩いたので足はガクガクだ。

軍勢、5百人の兵は全て俺の指揮からはずれ、鹿之助に任せてある。

鹿之助は寺の境内に兵に休むよう告げた後、こちらに向かってきた。

「主、ここですか？」

「うん。行長が手配した寺だ。間違いない」

「そうですか。ここに前右大臣がいらっしゃるのはなんとも奇妙ですね」

行長が手配した寺はぼろい。俺の人質生活時代の寺よりぼろい。所々崩れかかっているし、庭も手入れがされていないため草が生え放題だ。

ちなみに前右大臣というのは役職名である。

地位の高い人を呼ぶ場合は官職名で言うのがこの時代の常識という奴である。

社長さんというのと同じようなものだ。

「まあこんなところに信長が隠れているとは誰も思わないだろうな。その点では正解だろう」

「これからどうなさるつもりで？ 拙者らは孤立無援の情勢です。報告を聞く限り、明智光秀が信長は死んだと信じていれば搜索の手が入ることはないと思いますが、京や近江あたりは明智の手に落ちるのも時間の問題でしょう。」

動くのならば早い方がよろしいかと」

「そうだな。一応考えはある。それも含めてこの寺にやってきたんだから。これから説明するよ」

そういつてわらじを脱ぐ。

寺は小さいため、庭からすぐ屋内に入ったところが本堂だ。そこに信長が待つてゐるはずだ。

兵たちの声が聞こえたのか行長がすぐにやってきた。

「やっと来てくださいました。いまか、いまかとお待ちしておりました」

行長の顔はやつれている。戦に参加したわけでもないのにつかれきつてゐるのがわかる。

「おおつ 無事だったみたいだな。やつれたようだけど大丈夫か？」

「それより、境内の方に待たせてあります。早く来てください」
行長が半分涙目になつてゐる。

「もしかして信長、ご機嫌斜め？」

「会えばわかります」

見方を変えれば俺たちは信長を拉致してきたことになる。仕方なかつたとしてもだ。

殺されるかも……

いや、大丈夫だろ。命を助けたわけだから、俺、信長の命の恩人なんだから。

うん。大丈夫なはずだ。たぶん……。

寺は大きくない。境内は広いが寺自体の建物は小さい。
よつて寺の境内、庭からすぐそこに本堂がある。

本堂への扉を開けるとすぐに信長と信忠が待つてゐた。
俺はすぐさま平伏した。

気まずい沈黙があたりを支配した。

え？ なんかしゃべつてよ。

もしかしてじゃなくてお怒りですか？
俺の独断専行に対してご立腹ですか？

……

こわいよー。

とガクガクブルブルしていたら頭の上から声が聞こえた。

「申せ！」

甲高く歯切れのいい大声である。

え？

信長が極端に言葉を短くするということは前世で知っていたのだが……

「申せ」って何をどう申せばいいんだよ！

あれか？ 俺の今日の朝食でも申せばいいのか！

残念でした。今日は朝から震えてたんで何も食べてませうん。胃が受け付けませうん。

いやいやいや、さすがに朝食はないだろ。

と脳内で突っ込みを入れているうちもあたりは気まずくなっている。

軽くトントントントントと音が聞こえる。

頭の上からだ。

ばれないようにそっと頭を少し上げるとリズムを刻んでいる足が見えた。

俺の真正面なので多分信長だ。

やばい！ いらだってる！

何か、何かいわなくては。

俺はふと胸元に目をやる。

ええーい。ままよ。

「前右大臣様に買っていたきたいものがございます。こちらなんです」

俺は懷から紙を取り出した。

「これはただの紙ですが。ここには信用と契約が入っています。」

先日、船を異国より購入したことによりわが領内に造船工場を作りました。

まだ作りかけなのですが、完成したときには全長27間（約50メートル）ほどになり両側に大砲を配し、

さらに両側に配した大砲は40問程度配置する予定です。

それに、なんといっても一番違うのは積載量です。今までの船とは圧倒的なまでに違う積載量を持つはずです。

軍事においても貿易においても変革をもたらすはずです。

完成すれば遠洋まで航海することが可能です。わが国の海洋貿易は変わりますよ。

ただ、今現在金策に困っておりまして、月賦で買ったもののまだ返済が多く残っております。

さらに作業するための人夫、材料費も全く足りません。

そこで、この紙です。

この紙は私が今回買った船を作っている造船工場の所有権です。この紙に値段をつけることで私どもは資金を得ることができ、船を作れます。

そして船を売って利益が出たらその何割かをお返しします。」

俺は一気にまくし立てた。

「つまり、私どもに投資していただきたいのです」

俺は言い切ると下げていた頭をよりいっそう下げた。

言ってしまった。最初に言うべきことじゃあ絶対にない。挨拶も何もかもすつ飛ばしてしまった。

しばらくまた沈黙が続いた。

「というと、その船を作るのが失敗した場合はどうなるのだ？」

これは先ほどの先ほどの信長の声とは別の声である。少し面白そう、というか笑いをこらえているようだ。

信長でも、鹿之助でも、行長でもない。

というに残っているのは信忠だけとなる。

「もし私どもが失敗した場合はその紙は本当のただの紙切れにな

つてしまいます」

俺は少し安堵した。信忠は俺に助け舟を出してくれた。

「所有権といったが、所有権とは具体的にどのようなことができるのだ？」

「はっ　まず、今現在造船工場の当主はここにいます、小西行長です。」

望みであれば、彼を当主から退かせることができます。さらに経営に口を出すことができます。」

「その船は、鉄甲船よりも大きいと申すか」
今度は甲高い声が聞こえた。信長だ。乗ってきてくれたのか？

ちなみに鉄甲船とは信長が本願寺や毛利水軍、村上水軍に対抗して九鬼嘉隆に命じて作らせた船のことである。

鉄砲、火矢を通さないよう、鉄で装甲をほどこしてあるものである。

「鉄甲船を見たことはございませんが、おそらくはまさっているでしょう」

俺は答えた。

「いいおるわ」

信長が声を出して笑った。

「よかるう、買ってやる」

「ありがたく存じます」

信長は小さく頷くと

「面を上げる」

と再び声を出した。

俺は言われるがままに平伏をといた。

目の前には2人の人物がいた。

正面が信長で、横にいるのが信忠だろう。

思ったほどイケメンでも荒々しい風貌でもない。

切れ長の目に、ちょび髭、細長い顔つきからは市井にあったら信長とはわからなかっただろう。

しかし、やはりその雰囲気といったらいいだろうか、重圧が感じられる。

これが信長か。

俺は嘆息した。

「後は！ 申せ！」

と信長は再び声を出した。

後？ 何のことだ？ 俺は信長と相對して何度目かになる短い言葉を考える作業に戻る。

「今後の策はいかようか？」

信忠がすかさずフォローを入れてくれた。

信忠のほうに目を移す。

顔には信長の風貌を残しているが、幾分厳しいところがないのは今信忠が笑っているからなのだろうか。

信長と違い疲れが顔に浮かんでいる。

本能寺の変の後、まだ1夜明けたばかりなのだからそれも当然である。

俺も鏡を見れば同じように疲れている顔なのだろう。

ということは同じ状況であるのかかわらず未だに精力的な顔をしている信長は化物か！

いかん、いかん、今後の策だ。説明しなくては。

「今後ですが……」

俺は横にいる行長の方を向く。

「行長、地図を持っているな、出してくれ」

行長は平伏したまま俺のほうに来て、地図を出した。

この地図は先ほどの京市外を記した地図ではない。

俺の夢い記憶を頼りに作成した近畿地方の地図である。そこに俺

の家臣の情報を集め作成した。

中国地方、近畿地方はなかなかの完成度になっていると思う。

他はかなり大まかであるが今後、頑張っていくつもりだ。

もちろん一朝一石でできるものではない。蟄居生活、人質生活で暇をもてあました故の結果であろう。

「近くによつても？」

「よい！」

「それでは、失礼仕る」

俺の信長に近づいて、地図を広げた。

その地図を見た信長と信忠から

「ほう」

と声上がる。

「我々は今、このあたりです。」

俺は地図の一点を指で指す。

「光秀は、早急に京付近を制圧し、さらには美濃、近江にも手を伸ばしていくでしょう。」

もし頼るものをあげるとしたら、丹後の細川氏、大和の筒井氏などがあげられるでしょう。

両者とも光秀とは縁が深いでしょうが、今回の光秀に加担する可能性は無いと思います」

なぜ光秀が秀吉に敗れたのか。

秀吉の思いがけない迅速な行動、時間的制限などももちろんある。そのうちの1つに諸勢力が光秀軍に参加しなかったことがある。もちろん光秀が何もしなかったわけではない。

細川にも筒井にも手紙を出しているし、美濃との講和も取り纏めている。

十分に手抜かりは無い。

しかし、なぜ諸勢力が参加しなかったのか？

信長を殺したこと、主君殺し、謀反、これらが悪影響を与えていたことも事実だ。

しかしそれ以上に面白いことがある。

光秀は謀略、謀反、これらのことに人一倍、いや、人の数段優れていたということである。

光秀は優れているがゆえに、謀略、謀反が漏れやすく、もろいことをわかっていた。

ゆえに徹底的に秘密主義にこだわった。そして諸勢力の逡巡にかながるわけである。

「ここで諸勢力を頼るのも決して悪くありません。

たぶん、私の考えより十分に良い策です。

しかし私はあえて、ここで後世の歴史に残る事をしていたのだと存じます。

前右大臣様急死を知り、真っ先に駆けつけてくるのは筑前守様に間違いないでしょう。

ゆえに合戦はこの山崎で起こると考えて間違いないよ存じます。

そして我々はそれに合わせて行動したいと存じます。

そうした場合、最適な場所は」

俺は京から指を下に移動させ山崎を指す。そして少し左上に上げる。

「ここ、天王山で高みの見物と参りましょう」

俺は一気に説明し終え、恐る恐る地図から顔を上げる。

信長は無表情であり、その表情からは何も読み取れない。

信忠のほうは対照的に楽しそうに地図を見ている。

再び沈黙が訪れた。

どれだけ時間がたっただろう。

10秒、いや10分かも知れない。時間の感覚がなくなっている。

「で、あるか」

信長が発した。

「励め」

続けて聞こえる。

これは了承ということでもいいのだろうか？

信忠のほうを不安そうに見ると、目が合った。

信忠は軽く頷いた後、微笑んだ。

どうやら了承らしい。

「ありがたく存じます。僭越ながら今回の報酬として、此度信忠様救出のため励んでくれました山中鹿之助、

失礼、山中幸盛に尼子氏再興をお許し願いとうございます。」

でしゃばりすぎかと思ったがこれを機会にいわなくては他に機会は訪れないだろう。

「欲張りめ！ 許す！」

信長はそれだけいった。

「ははっ ありがたうございます」

「盛り返してるな、一時は危なかったがこのままだと勝てるか。」
「の、そうですね」

合流した後藤又兵衛が答えた。

「まさか真つ先に官兵衛かんべえの部隊に合えるとは思わなかったが、これも日頃の行いがいいからかなあ」

「それは、どうかと」

又兵衛は率直にものを言う男である。こういうところは追従ぐらいしてくれてもいいのに。

空には織田の旗印である永楽銭えいらくせんが無数にはためいている。

無数といっても、そんなに多くは無い。

が、戦場での効果はおおきかった。

戦場では噂というものが広がるのは普段とは比べ物にならないくらい早い。

そして士気、しいては勝敗につながる。

当初、俺たちが姿を現す前は秀吉軍は押されきみだった。

秀吉軍の先鋒は高山右近たかやまつこんと中川瀬兵衛なかがわせばえである。

対する光秀軍は齊藤内蔵助利三さいとうちくらのすけとしみつとなっている。

齊藤内蔵助利三の指揮統率能力は高山右近、中川瀬兵衛を大いに勝っていた。

高山右近も善戦したがそれでも先鋒はほぼ壊滅状態までになっていた。

光秀は防戦であるが、敵の侵入路を押さえている。

向かってくる軍勢を迎え撃てばよい、さらに予備隊も出しやすかった。

それに対して秀吉軍は予備隊が出にくい。

出そうとしても、入り口、侵入路で渋滞をおこしてしまうからだ。よく言われることであるが、遊軍を作らないことは軍事において初歩である。

そしてもう一つ言われることは、予備隊によって勝利が決まる。

遊軍とは何もしていない兵、もしくは戦略上無駄と化している兵である。

予備隊とは不利になった部隊に兵を補うため手元においておくための兵である。

遊軍を極力少なくし（なくすことは限りなく0に近い）、予備隊をできるだけ多く手元に残す。

この点において言えば秀吉軍より光秀軍のほうがより基本的に忠実だった。

さらに兵の強さは圧倒的に光秀に分があった。

足輕鉄砲というのは通常の足輕より勇敢なものが多い。

足輕大将の号令に従い鉄砲を放つことが足輕鉄砲の大部分を占める役割なのだが、それとは別に単独で戦場を駆け抜け抜け士卒（戦場において命令を出す人）を暗殺するものもある。

もちろんこの場合、誰が討ち取ったかわからないため褒章に預かる機会はない。

よって好んでするものは多くないのだが、光秀軍にはこのようなものが多くいた。

光秀の兵の教育は一人一人に行き届いていたということだ。

それに対して秀吉軍は目先の恩賞に預かるのが目的の兵が多い。

それも大部分は、秀吉独自の軍ではなく、信長から秀吉に預けられた軍である。

これらのことから秀吉軍は苦戦に追い込まれることとなった。

戦況が一変したのは1つの噂からであった。

まずは秀吉軍に伝わっていった。

「信長が生きている。我らには御大将がついている」

先にも述べたように戦場では噂が伝わるのは早い。
急速に光秀軍にも伝わっていった。

これを受けて秀吉軍の士気は大いに盛り上がった。
光秀軍は大いにもちこたえた。

が、その光秀軍にさらに絶望が襲った。

空に、天王山に高々と掲げられた永楽銭の旗印である。

高々と上ったこの旗が両軍の士気に与えた影響は大きかった。

「前右大臣ご帰還。勝利は我らに」

のような口上が兵の隅々から聞かれるようになった。

大将というものは、特にこの時代は最初ある程度の采配をしたあと、つまり戦が始まってしまった後はやる事が無くなる。

秀吉も例外ではない。

やるだけのことはやった秀吉は今、官兵衛の横でポカーンとしていた。

「のう、かんべえ」

秀吉が唐突に口を開いた。

「はい」

「夢を見させてもらったわ」

「ゆめ、ですか」

「そう、夢だ。壮大な」

官兵衛はなんと答えたらいいのかわからない。

秀吉は深々とため息をついた後、言った。

「まあ、こんなもんかもしれんな」

「こんなものですか」

「そうじゃ、百姓の身分からここまで来れたことじたいでめっけもんだわい」

これからも下手な考えはするもんじゃないわな。猿じゃ。わしは猿じゃ」

負け戦とはひどいものだ。

見渡せるほどの兵数になってしまった自軍を見て嘆息をつかずにはいられない。

「坂本城までだ。そこまで我慢いたせ。じき殿も見えられる」

山崎の合戦で後詰を担っていた秀満は退却を余儀なくされている。坂本城まで落ち延びたとしてもそれからの計画は一切あてが無い。兵もわかつているのであろう、日一日と兵は少なくなっていく。

残っているのは傷をおった兵が多い。負け戦の定めといったところか。

それでも殿、光秀様さえ生きておられるならまだ再起の道はある。なかば絶望のふちではあるが最後の希望としてすがりつかずにはいられない。

殿が落ちのびられる場所を確保しておかなくては。

情報は一切入ってこず、光秀様が生きているのか、すでに自刃されているのかも定かではないが家臣の務めとしてやらなくてはならないことである。

坂本城に秀満が到着したのは約一日がたったころだった。

「申し上げます。勝竜寺しょうりゅうじにおちのびられた上様はここ坂本城を目指す途中に自刃なされました」

「間違いないか」

「はっ、共にいたものが報告をよこしましたゆえ、間違いないものと思われます」

「そうか、あいわかった」

すで坂本城も囲まれている。

殿が着ても城に入るのは難しかっただろう。

残ったのはわしだけか

わしが後始末をつけねばなるまい。

秀満は陰鬱な気持ちを隠すことはできなかった。

秀満は坂本城の奥の間に行き、ひろ子と会ったときも表情はすぐれなかった。

すでに羽柴と織田の兵が城を幾重にも囲んでいる。

秀満は事の次第を光秀の妻であるひろ子に説明した。

「わかりました、覚悟はできております」

ちなみにこの時代、戦国時代の後半になると夫がおった責任の一端を妻子が取ることが一般的になってくる。

それでは前半はどうであったのか、戦国時代の前半、織田が大頭してくる前までは妻子にまで罪が及ぶことは少なかった。

戦国時代の前半では攻める方も守るほうも親戚の立場なことが多く暗黙の了解のうちに妻子の命は助けられることとなっていた。

奥州等は織田が出てきてからもこの風習が残っている。

しかし、織田が大頭してくる中で諸勢力は全くのつながりの無い敵と相見えることとなる。

そこに情は存在しなくなり、負けた場合は妻子ともどもという形となってくる。

覚悟していたのであろう。

泣きつかれることが無いのだけが秀満の救いだった。

毅然とした態度のひろ子と相對したときそれだけが救いだった。

このような場合婦人から始まる。

明智光秀の妻、ひろ子、さらには自身の妻も含まれる。

装束は白羽二重の小袖である。

「秀満殿になら」

というひろ子のたつての願いで秀満自身が見届け人を勤めることとなった。

「みなさま、後よりおこしなされよ」

そういったあと光秀の妻、ひろ子は自身の子どもを一突きにした後、

作法どおり乳房の下を突いてさらに刃を戻し喉を一突きした。

はかなさを誰か惜しまむ朝顔の さかりを見せし花も一時

秀満の妻、ひろ子の辞世の句である。

ついで、秀光の子、妻という順である。

秀満は妻子が果てたのを見届けると天主に火を放った。

死体がさらし者とならないようにである。

財宝は全て包囲軍に渡した。

わしのできることは既に終わった。

「わしも後世に名を残すことができる。明智家の最後としてな」
秀満は甲高い笑い声を出しながら自身を鮮血に染め上げた。

もともと生誕、出自でさえ定かでなかった明智秀満の最後であった。

秀満の墓はない。

なぞに包まれた人物であつたが能力、生まれから最期まで、謎に包まれた人物であつたことは疑いない。

これにより、明智氏は僧籍にいた者などを除いてほとんど滅んだ。

山崎の戦い 23話（後書き）

大名の配置の地図とか組織の配置などの図を載せたいと思っているのですがいい方法知りませんか？

え？ そんなことより続きを書けって？

妄想とはこういう無駄かもしれないところから湧き上がってくるものです。

イラストがほしいよー。

鴉たち 24話

「いったい、どういうことだ。わずか数ヶ月、数ヶ月だけだぞ。なにも1年や2年留守にしていたわけではない。」

どうして我らが毛利と対していた数ヶ月でここまで国内が変わってしまったのだ。

国の蔵は空になるは。我らに恩賞を渡さぬは。

これでは私が父の後を継いだ後、どうやってこの国をまとめればいいのだ。

あかしたけのり
明石全登！！！！ どうしてこうなっているのだ！！！！」

うきたあきいえ
上座から立ち上がった宇喜多詮家は壁を殴り散らしている。

毛利との死闘を終えた後、詮家を迎えたのは八郎の初陣、大勝利の報であった。

それだけならまだしもその後、加増となった領地を八郎は独占した。

詮家としては面白くない。

「これもひとえにあの男、八郎様でしょう」

下座に控えている唯一の男、明石全登が平伏したままの姿で答えた。

詮家と明石全登はこのところ急速に接近していた。

きっかけは八郎の当主就任のときである。

同じ不満を持った二人が意気投合するには長い時間はかからなかった。

「そうだ！ あの男！ 八郎！ あいつのせいだ。なぜあの男がまだ当主なのだ。諸将はなぜまだ従っている」

宇喜多家は戦国大名といっても国人の代表に過ぎないところがある。

各地の豪族の力が強いのだ。

一世代で成り上がったものの宿命といってよいだろう。

大名というよりも豪族の代表といった方がしっくり来るかもしれない。

このようなところは織田家よりも毛利家に近い。

「恐れながら申し上げます。本能寺の変の功により八郎様は多大な功績を挙げられました。」

内政での失敗を外交で取り戻したのでしょう」

「あいつに様などつけるな！ いまいます！ ここには私とお前しかない」

詮家はドスンツと元の場所に座りなおした。

「クソツ！ 八郎にここまでやる権利など無いわ。いったい何様のつもりなのだ。」

当主といっても我々の支持があつての宇喜多家当主だ。そのところかわかつていないのだ」

詮家は膝を扇子で叩く。

「ですからそこを突きましよう。我々の他にも不満を持っているものは大勢いましょう。」

八郎の当主就任の時の花房のように恨みを持っているものもおります」

「ほう、花房が。悪くないな。明石全登、とりあえず当たりをつけておけ」

詮家は顎に当てていた扇子を大きく振り、バツと広げた。

虎と桜が彩られている。

趣味が良くない。と明石全登と思うがそのようなことはおくびにも出さない。

「はっ、他にも少なくとも数の者が不満を持っていると思われるます。」

八郎は此度賜った備中、備後を独占し、毛利であげた戦功が全く無視されております。

それにおきましても多くの不満を抱いているものがおりましよう」

「そうか、わかった。そちに全てまかす」

「一命に変えましても」

「存じていると思うが決して洩らすような失態は犯すなよ」

「わかっております」

それでは失礼します。と明石全登は退出しようとする。

障子を開けたところで思い出したように付け加える。

「そういえば、成功した場合私の処遇は考慮していただけるのでしょうか？」

ハ―ハツハツハツハツハ。

それを聞いた詮家は大声を出して笑った。

「安心せい。わしが当主となったら思いのままだ。

お主が成功したら片腕として十分に働いてもらう。もちろん地位も金も名誉も与えてやる」

「それを聞いて安心しました」

明石全登はニッと口だけ笑うとそのまま障子を閉じた。

浜松城

いまがわつじさね
今川氏真から徳川家康が1568年に奪い取った城である。

1570年に岡崎城から浜松城まで移ってきた。今年で在位12年となる。

南北500メートル、東西450メートルの大きさである。天守閣は無い。

本丸、二の丸、三の丸が一直線となっており戦時には防御陣営として個々が独立して侵攻を妨げるようになっている。

これらの本丸、二の丸、三の丸は順に高くなるよう階段状に作られており、いかにも戦国時代という時代に合わせた城である。

もっとも目に付くのはその石垣だろう。

安土などの洗練された石垣とは違い、見るからに荒々しく、自然石を上下に組み合わせたものである。

人工の手が入っていないく、隙間も多く見えるが、奥が深く堅固な作りである。

その城主は本丸でつめを嚙んでいた。

「いつそ、今なら」

家康が狂気に満ちた目で本田正信を見つめた。

「殿、短気めされるな」

それだけ言々と謀臣は壁に書かれた肖像画を指差した。

んぐつ むぐぐつ

家康は音にならないうめき声を発した。

「そうだな。まだ我らにも利用価値はある。今は我慢か」

伊賀忍軍による諜報網のおかげで信長の動きは逐次入ってくる。

もちろんその他も。

「良くぞ思いとどまりまりました。好機は必ずきます。今しばらく辛抱なさいませ」

本能寺の変の時徳川家康は堺にいた。

日本で最も肥沃な農業地帯である駿河、遠江、三河の三州を束ねる徳川家康が堺にいるのは、信長によって進められたからである。

実際、家康は進んで堺にこようとは思わなかった。

同盟国ではあるが他領である。何が起こるかかわからない。

暗殺など珍しいことではない。家康も覚悟をしての訪問だった。

武田討伐の後、祝賀言上のため安土城に訪れたとき、

「京、堺、おおさか、などのんびり見物されるがよい」

と有無を言わせぬ口調で告げられた。家康はそれに従うしかなかった。

堺で茶屋四郎次郎の屋敷にいる時もいつ襲われるのか、嵌められるのかと生きた心地がしなかった。

そのような時に本能寺の報が伝えられた。

家康は狼狽し、

「わずかな手勢であろうが、何ほどのことがあるう。

恩多き信長殿が亡くなったのだ。この敵を討たずして何が同盟国だ。

討ち死に覚悟の敵討ちだ」

と周りに恫喝が如き声を張り上げた。

一緒に堺に入っていた本田忠勝と茶屋四郎次郎がこれを止めるま
で本当に本能寺に討ち入り、腹を切る勢いだった。

もちろん演技である。

家臣たちの必死の説得により、いったん三河に帰るということになった。

そこからの家康の行動は鮮やかなものだった。いや、鮮やか過ぎるものだった。

伊賀の忍びたちに守られながら、伊賀峠を超えた。

その間、野武士に襲われたりしながらもやつのことで伊勢の海に出ることができた。

このとき別のルートを採った家康の部下である穴山梅雪は実際に野武士に襲われ命を落としている。

そこから尾張まで海を渡り、本拠である浜松城まで駆け抜けた。

家康最大の危機であった。

本拠に帰った家康はすぐさま兵をまとめ熱田神宮まで出兵した。

「兵たちの様子はどうか？」

熱田神宮まで来た家康は部下である酒井忠次に尋ねた。

「現在、一万程度集まっております。明日にはもう2千程度集まるでしょう」

家康の今川義元時代からの付き合いで、現在東三河の旗頭、諸将の代表を任されている酒井忠次さかいただつくが答えた。

「そうか、それで？」

「……それだけです。すぐにでも京に出撃できます」

現在では一大勢力を築いている家康もその部下は元来田舎武者である。

微妙な問題には対応できない。

ほんだまさのぶ本田正信を連れてくるべきであった、と家康は後悔した。

「各地の様子はどうか？」

「甲斐、信濃は荒れておりますが」

「荒れとるか、それはいかんな」

「いかん……ですか？」

「そうだ。足元が危ういのはいかん。足場はしっかり固めねばいかん。いつ背後を取られるかわからん。」

背後を固め、後に上洛すべきかもしれん」

「御意。ではこのまま甲斐に向かわせましょう」

このときの決断が今、浜松城で家康を悩ませることとなっている。決断は間違っていない。あの状況であれば最善の一手であった。事実、家康は現在、三河、遠江、駿河、甲斐、信濃の南半分を手に入れ、一大大名として、いや、日本の大名として最大勢力を築きあげた。

が、前提が間違っていた。

織田信長が生きていた。これだけで今の家康の状況は非常に危ういものとなってしまった。

今回、どさくさにまぎれてぶんどった甲斐と信濃は武田の残党がまだまだ蔓延っていたとはいえ、事実上は織田家の領地であった。

織田家の領地を横から掠め取った形になってしまった。

さらに悪いことに、本能寺の影響で北条に攻められた滝川一益を徹底的に見捨てた。

これらのことにより家康は非常にまずい立場となった。

何よりもまずいのは織田家はこれらのことに何も言っていないのである。

事実上の黙認という形になっている。

もちろん黙認してくれたと安穩とすることはできない。

いつこれらを言いがかりにされるかわからない。

「しばらくは大丈夫か」

家康は自分の部下の唯一の謀臣といってよい本田正信に確認する。ほんだまさのぶ

「まだ態勢がたてなおっておりません。本能寺の変で織田家の文官の大半は首が飛びました。

各地では飛び火した火種がまだ燻っております。東にはまだ北条もございます。その時には殿のお力を必要とされるでしょう。

その間に」

「対抗できるだけの力をつけねばなるまいか」

家康は正信の言葉を引きついだ。

正信が言っていることは、織田家が文官を補充し、本能寺の変で生じた各地の反乱を納め、北条を征伐した後は織田家の矛先は家康に向かうということを明示している。

「何か良い案はあるか？」

最近では旧来の部下よりも頼りになりつつある男に尋ねた。これからはこういう男こそ自分には必要になってくる。

「まずはお味方を増やされることでしょう」

「越後の上杉あたりか、早まったときのため北条にも保険をかけておくか」

織田家と渡り合える態勢が早期に整った場合、北条と連携を組み挟撃するのも悪くない。

家康はそこまで考えた。

「はい。北条が取られたときのためさらに北にも手を伸ばしておくべきでしょう」

正信が補足する。

「奥州か。最上、宇都宮、伊達、佐竹、蘆名あしながおるか」

「田舎大名といえども役に立つことはございましょう」

さらに申せば、此度の本能寺の変、信長様の家臣も一枚岩ではないということでしょう。

織田家の家臣にも慎重に渡りをつける価値はあるかと

「ほう」

「明智光秀という出世頭でさえ謀反を起こしました」

巷では存外に織田政権の内部は弱いのではないかという風評も立つております。

本能寺の火種は未だ燻り続けておるということでしょうか

「ふむ。消し忘れたボヤを大火事にまでできるか？」

「そう難しいことではないでしょう。横から燃料を投下すればよいだけです」

「わかった。正信、お主は切り崩しにかかってくれ。わしの方からも手を打ってみる」

「わかりました。ではこれにて」

正信が部屋を退出したのを見届けると家康はすぐに小姓を呼び、硯と筆を持ってこさせた。

後に二百通にも及ぶ手紙の最初の一通を書き始めるためだった。

鴉たち 24話（後書き）

しばらく更新できずすみませんでした。

リアルの用事は一区切りつきました。

まだまだやることは山積みですが、更新の方はもう少し早くなると思います。したいです。

25話 2年後

西暦 1584年 天正 12年 皇紀2244年

本能寺の変から2年が過ぎた。

本能寺での俺の奮闘も今では夢のように感じられる。

もう一度やれといわれても絶対にできないだろうなあ。

うつ。思い出したくない。

夢は夢といってもどうやら悪夢になってしまったみたいだ。

そもそも戦争が悪夢以外になることなんてないだろう。

だが、その俺の悪夢でさえ恐れぬ働きのおかげで歴史は大きく変わった。

信長は現在でも生きている。もちろん信忠も。

当初の目的である、家康による島流しの可能性は限りなく薄くなったと考えて差しつかえないだろう。

家康が政権を握ってない、ただの大名なのに俺を島流しになどできるはずがない。

後は信長、信忠の腰巾着にでもなれば早々ひどいことにはならないはずだ。

信長は家臣にきびしい人物であるが、本能寺で見せた俺の熱い忠誠心が伝わっている。そうひどい失敗さえしなければおかしいことにはないだろう。

うん。俺の人生は順風満帆だ。うん。そのはずだ。

「八郎様。浮田忠長、うきたただながお呼びに与りました。入ってもよろしいでしょうか」

障子の奥から声が聞こえてきた。

うきたただなが

浮田忠長……???

そんな人いたっけ？

家臣の名前と顔もこの2年だいぶわかるようになってきたんだが、思い出せない。

記憶に検索をかけるが一向に引つかからない。

ということは、俺を狙った曲者か……！！

家康か……！！ 家康の差し金か……！！

わざわざ本拠である岡山城まで忍び込んできたことは認めてやるが、生きてここから帰ることができると思うなよ。

一度言っ て見たかったんだよなこの台詞。

俺は気合を入れて腹から精一杯の声を出した。

「者ども　であえ　！　曲者じゃ　　曲者がおるぞ　！」

「えええええええ　　曲者……！！　どこだ　！　八郎、大丈夫か？」

素っ頓狂な声が上がると、障子が開き外から桃寿丸が入ってきた。

「なんだ　　桃寿丸か」

そつえば桃寿丸元服して名前を変えたんだっけと今更ながら思
い出す。

桃寿丸もすでに16歳か、それは元服ぐらいするわな。
宇喜多忠家の忠の字と丹羽長秀の長を貰って忠長にするとかいつたなあ。

ずいぶんたいそんな名前であるが、ネーミングセンスは悪くない。
忠の字は織田信忠にかかっているのも申し分ない。

姓は宇喜多の姓を継ぐのは気がひけるといつて傍流である浮田の姓にした。

俺は別に宇喜多の姓で構わないといったが気がひけるらしい。

ちなみに桃寿丸とうじゅまるの元服のついでに俺の元服も行われた。

もう14歳なのだから早いということも無いだろう。

無難に宇喜多秀家とすることにした。

本当の史実では八郎からいきなり秀家になったのかわからない。

家康とか信玄とか何回も名前が変わっているから俺も間に何かはさんでいるのかもしれない。

でもまあそんなことは些細なことである。

歴史は既に大きく変わっているのだ。

俺の名前など砂粒ほどの価値しかないだろう。

俺が考えている間も桃寿丸はひたすら慌てていた。

「八郎！ 大丈夫か？ 曲者はどこだ！！！」

桃寿丸は血相を変えている。

俺は目の前にいる桃寿丸を指差す。

桃寿丸はキョトンとしたあと後ろを振り返り誰もいないことを確認し、全てを理解した。

「八郎様、いえ秀家様、お戯れはよしてください。すでに元服しておられるのですからこういった子供じみたことはそろそろ卒業し

ていただけませんと」

「お前も忠家^{ただいえ}みたいなこというようになったな。桃寿丸のくせに、なまいきだぞお」

「おっしゃっている意味が理解できませんが、私の名は忠家様から一字貰いましたゆえ似てくるのも致し方ないかと」

「まったく、元服してから急に大人びちゃって」

「秀家様が子供なだけです。本能寺の活躍を聞いたときは心踊り、秀家様についていかなかった自分を責め、秀家様を尊敬したのに戻ってきてからずっとこの調子ですから私のあのときの気持ちを返してください」

他愛ない話をしているとドタツドタツドタツと音がしてすでに老齡に達した禿頭の男が入ってきた。

「八郎様、ご無事ですか？」

「おおっ！ 忠家、そんなに急いでどうした？ 何かあったのか？」

俺は心のそこから不思議がっているように言った。

「こちらから曲者という声が上がったのですが……」

俺は両手を広げて肩をすくめて見せた。うんっ すばらしいとぼけ方だ。

忠家は周りを見回し、再度俺が無事なことを確認した。

そして俺のほうを睨むと、ため息をついた。
ばれてしまったらしい。

「どうやら私の勘違いだったみたいですな」

「どうした？ もう年か？」

「はい。誰か様のおかげで内政問題が山積みしておりますので、最近ではまともに寝ることもありません。こう忙しくては年をとりたくてもとれませんなあ」

うわっ 最近では忠家のお叱りも愚痴っぽく、いやいやいや間接的になってきた。

これが結構効く。

「まあ、何も無いのならそれで結構です。ああ、忙しい、忙しい。次に無駄な用ができるのなら私も隠居を考えたくなりますなあ」

うう。戸川秀安が引退してからというものことあることに引退、引退と繰り返される。

うんざりだがここで筆頭家老だけでなく忠家も引退されてしまつてはたいへん困る。

こう言われるたびに俺は何も言えなくなってしまう。卑怯だ。

忠家は俺が何も言えなくなっているのを見ると満足そうにその場を退出しようとした。

その時、パタパタパタと足音が聞こえ、もう1人の来訪者が障子を開けた。

「秀家様、大丈夫ですか！！ こちらから叫び声が聞こえてきたのですが」

お香が血相を変えて飛び込んできた。

「うん。この通り大丈夫だよ」

お香は俺が無事でいるのを確認すると、ヘタヘタと腰を落とした。

「そうですか。よかったです。本当に良かったです」

そういつて少し涙が溜まつている目をこちらに向けた。

洗い物でもしていたのであろう。着物に前掛けをしている。手も濡れたままだ。

俺は罪悪感をごまかすために

「桃寿丸が勘違いしたんだ。全く、忠家を不審者と勘違いするなんて桃寿丸もそっかしいよな。まあ不審者と間違われる忠家も忠家だけ」

と嘘をついた。

桃寿丸と忠家が非難の目を向ける。

俺は心の中で「すまん」と謝っておいた。

「桃寿丸様も元服なさったのに変わっていないんですね。とても一城の主には見られないですね」

お香は安心したのだろう。ことさらおかしそうにそういつてクスクス笑った。

「また台所にいたの？ そんなこと台所係に任せておけばやってくれるのに……」

「いえ、慣れてますから。私、農民の出なんで得意なんですよ。こうみえても。それに何かしていないと落ち着かなくて。もしかして迷惑でした？」

「いや、迷惑ってことは無いけど……」

「そうですか。今晚は私が腕によりをかけて作りますから。期待しててください」

「それは楽しみだな。期待しているよ」

「はい。期待しててください。それでは私は仕込があるので行きますね」

とお香は満面の笑みを向けた後、その場から離れていった。

後に残ったのは気まずい空間だった。

俺を二人はものすごく批判する目で見ている。

「すまん」

俺は重い空気に耐えることができなく、謝った。

「いえ、私はいいんですよ。なんせ不審者と間違われるぐらいの者ですから。いえ、全くお気になさらず。本当にいらぬ気遣いは無用です。さて、私も退出しますね。何も無かったようですし、不審者に間違われないように身なりを整えてこないといけませんので」

忠家ははき捨てるように呟いた後、お香の後を追いかけるように出て行った。

桃寿丸と俺だけが残されることとなった。

「桃寿丸、すまん」

……

少しの沈黙の後、

「まあ、いいけどね。秀家様にめちやくちゃ言われるのは今に始まったことじゃないし」

といわれた。

「うう……」

ぐうの音も出ない。

「しかし、八郎も……失礼、秀家様も」

「2人つきりだから八郎が秀家でいいよ。そんな固っ苦しいこと無し無し」

「そうですか。それじゃあ遠慮なく。八郎もベタ惚れだね」

「ん？ あー、お香のこと？」

俺は少し恥ずかしくなつて頬をぽりぽりとかいた。

「見ててわかる？」

「まさかわからないと思つていたんですか？」

「えーっと、一応。ごまかせているのかな……と」

「見ててわからない人はいませんよ。2人を見れば一発です。よかったですね。城下町からこちらに転居することを了承してもらえて」

「まあね。五右衛門の報告を聞いたときは震え上がったけどね」

「八郎が無防備すぎたからだろ。少しは自分の立場を考えろよ。」

「俺も一応一国の当主なんだな。今更ながら実感がわいてきたよ。」

俺はそういった。

これに関しては反省している。

俺は本能寺の変から帰ってきた後、頻繁にお香の元に、以前にま
して訪れるようになった。

たぶん、浮かれていたのだろう。

対外的成功をおさめ、織田家の金銭的支援でガレオン船の建造に
も目処がつき始めていたからだ。

俺が何気ない気分で頻繁にお香の元に通ったことによりお香の立
場は非常にまずいものとなった。

俺が頻繁に通うことで近所からのやつかみ、ひがみが起こってい
た。

もちろんお香はそんなことおくびにも出さなかったため気づくの
が遅れた。

というか、俺は全く気づけなかった。

俺に知らせてきたのは石川五右衛門である。

体制こそ整っていないものの石川五右衛門は宇喜多家の情報を全
て扱う存在となりつつあった。

本能寺の変のでの情報がかなり信頼できるものであったこと、本
能寺から天王山までの各地の動向などを意外に堅実に調べていたの
で少し重く用いることにしたからだ。

俺から権限を委任された五右衛門は良く働いてくれていた。

さすがは後世に名の残る人物といったところだろう。

石川五右衛門はお香の周りで不審な動きがあると言ってきた。

宇喜多家の当主の寵愛を受けているものが城下にいるということ
がかなり広まっている。

このまま放置するならばお香の身に危険が及ぶこともある。

というようなことを報告してきた。

お香がどうかすれば、俺は救おうと精一杯頑張るであろう。

お香のためならある程度の無茶な要求なら受け入れてしまっただろ

う。

どのような不逞のやからにお香が狙われるかわからない。その危険性を俺は全く考えていなかったのだ。

お香は俺のアキレス腱なのだ。そのようなことにいつなってもおかしくない。

それで少し様子見と不穏な動きをしている者の特定を五右衛門に頼んだところ、お香がいじめのような状況に立たされているということが新事実として発見された。

俺は五右衛門からその情報を聞くとすぐに行動を起こした。

お香に対して何らかのいじめをしていた人物を特定させ、その者を国外追放にした。

もちろんお香にばれないよう秘密裏に処理された。

それでも不安だった俺はお香を城の中で住むように説得した。

前からそうしたいという話は俺からしていたのだが、お香がかたくなに拒むのでそう強く出れずにいた。

しかし、いじめや不審者に狙われているという状況ではそうもいつてられない。

無理にでも安全な場所に避難させなくてはということと、お香を半ば無理やりという形で城で匿うことになった。

もちろん最初はかなり抵抗された。

「そんな、恐れ多いことです」

「私には無理です」

とか、何とかいつていたが俺が無理にでも半ば連行のような形で城につれてくることになった。

城に来た当初、お香はかなり戸惑っている風だったが、さっきの様子のように最近では自分で台所を仕切るようになってきているいいことなのはあるが、俺は正室として迎えるつもりだったため、そのようなこと他のものにやらせて置けばいいのとも思ってしまう。

「それはいいとしてだ。八郎、僕が呼ばれた理由を話してもらいたいわけだが」

「ああ、そうだったな。すまん、すまん」

俺は飛んでいた思考を元の桃寿丸のほうに向ける。

「ずっと聞こう、聞こう。と思っていたのだがな。なかなか聞けなかったのだが、お前秀吉に何かしたか？」

「僕が？ 秀吉様に？ いや、特に何もしてないよ」

「そうか？ ならいいんだが……どうも俺に対する扱いが正史と違う気がしてならないんだよなあ」

「正史？ なんだそれは？」

「ああ、いや……せいし、政治、そう、政治的に俺に対する扱いが違うと思つてな」

我ながら苦しいなと思わず苦笑いしてしまう。

それでも桃寿丸は納得した。

「それは宇喜多家に対する扱いが軽いということか」

「いや、そういうことではないんだよな」

秀吉の宇喜多家に対する扱いは軽いというよりむしろ重いといつていいだろう。

丁重すぎるほど丁重に扱ってもらっている。

むしろ秀吉が自分より下の位なのではないかと錯覚を起こすほどである。

しかしそこがおかしい。

史実では秀吉の庇護の下で宇喜多家が繁栄したのだから身内のよきな扱いをしてもらうはずである。

秀吉がたまににこちらを見る視線も痛い。

俺が秀吉の秀の字を貰うときも喜んでくれていたのだがどこかそっけない印象を受けた。

もちろん、元服のときでもある。

まあ、これはある程度予想していた。

本能寺での俺の活躍が原因だろう。

が、一応「私は秀吉様の味方ですよ」と主張しておいたはずだから大丈夫だと思ったんだが……

「お前、中国大返しときに秀吉に何かした？」

「え？ 僕？ 何もしてないと思うよ。でも、秀吉様って良い人だよ。手紙を見せたら僕の手柄にしていって言うてくれたんだよ」

「見せたの……あの手紙……」

俺は口をあんぐりと開けた。

「見せてくれて頼まれたからね」

桃寿丸は平然と言う。

「見せたんだ……見せちゃったのかよ」

「え？ いけなかった？」

あれは俺が秀吉に嫌われたときのためにうつておいた策だったのに見せちゃったのかよ。

まず一手として、秀吉の中国大返しをスムーズに行わせるために兵たちの食料と休養を確保する。

そして、負け戦を負け戦とならないように士気を高めるために盛り上げさせる。

毛利家との戦争という限定的な条件でのみ考えればあれはまごうことなく負け戦なのだ。

負け戦では兵の脱走など心配すべき点が多くある。

その後の明智光秀との戦が待っている秀吉としてはそれは許されないことだった。

少しでも助けるために、勝ち戦と錯覚させるように仕組んだ。

これを行うことで秀吉の宇喜多家への心象が悪くならないようにしようと思った。

織田家が滅んでも秀吉様についていくというアピールをしたつも

りだった。

二手ではそれを桃寿丸に頼んだ点である。

俺は本能寺で事を起こすため、秀吉の心象が悪くなる可能性がある。

桃寿丸がすることにより、そして、本能寺の変が終わった後で俺が桃寿丸を重く用いることによって、桃寿丸を秀吉が抱え込むように仕向けたつもりだった。

桃寿丸を秀吉が抱え込むことで宇喜多家は御しやすいと思ってくればという展望を抱いていたのだが……

「見せちゃったのかよ……」

俺は頭を抱えた。

いや、ここで桃寿丸をせめるのは間違いか。せつかく自信をつけ始めたところなのだ。

まだまだポ力はするが……

「でも、八郎の手柄を俺のものに横取りするようで嫌だったんだよね」

「まあいいよ。原因がわかったのなら対処の方法は何かなるでしよ。お前は何にも気にするな。後は俺の問題だからな」

「すまん……」

やばい、落ち込ませてしまったか。

「いいって、いいって。そんな重要なことじゃあないから。俺が個人的に気になったただけだから」

「そうか、それならいいか」

桃寿丸は能天気に応えた。

いいぜ。お前のそう物事を深く考えないとこ好きだぜ。

「ああ、気にするな」

「用事はそれだけ？　なら俺も忙しいから城に帰るよ」

「おお、頑張つてな」

そうつと桃寿丸は退出した。

桃寿丸も忙しそうで何よりだ。

俺はこのところずっと暇だからなあ。

俺にとつては願つたりかなつたりだが、周りが忙しそうにしているといこごちが悪い。

暇をつぶす道具、テレビもパソコンも無ければよけいである。

お香が相手してくれればなあ……

今回、桃寿丸を呼び出したのも秀吉のことが気になったのもあるが、誰かにかまって欲しいところが多分にあった。

恥ずかしいのでそんなことおくびにも出したくないが。

秀吉の件は覚悟しておかないといけないかもしれない。

何かしらの障害になるかもしれないだろう。

26話 苦難の出発

「暇だ。暇すぎる」

俺は読みかけのたいして面白くない本を閉じるとねっころがったまま無駄に叫んだ。

もちろん誰の返事も返ってこない。

あたりはシーンと静まり返っている。

別の本を取り上げてパラパラとめくってみるがとても読む気にはなれない。

俺がここまで暇をもてあましているには理由がある。

織田信長が国内のゴタゴタにかかりつきりであるおかげで俺に何の命令も無いのである。

すでに俺は織田家の外様の家臣なのでどこかで大きな戦争が起こった場合駆けつけなくてはならないのだが、現在織田領内で起こっている戦しかないため外様で新参の俺がしゃしゃり出るわけにはいかない。

本能寺の変の後、織田家はその火消しに戸惑っていた。

各地で消極的な反乱が起こった。

消極的というのは俺の見解だ。本能寺の変の時、勝手な行動を取ったり、明智光秀方に付くそぶりを見せたものが山崎の戦の後でも徹底抗戦した。

そつとう信長が恐かったのだろう。

戦いたいのではない。ただ降伏した場合、信長は確実に許さないだろう。

今までの信長の例を見れば切腹は確実だ。

紀伊、美濃、山城などが代表的なものだった。

戦うものは徹底的に戦った。

死兵になると兵は強くなる。それを体現するかのような戦いぶりだったらしい。

もう1つ信長が動けない理由に本能寺で信長の森蘭丸を筆頭にした若手官僚集団が全滅したことにある。

若手官僚集団の主な役目は租税である。

農民から税を取り立てる。もちろん彼らが直接取り立てるわけではない。

事務手続き。どこからどれくらいの米が取れるか目算したり、商人と取引したりするのだ。

それが全滅した。これはかなり痛かった。

織田家の中枢を担うべき内政集団がいなくなってしまったのだ。

さらに彼らには今後、もし織田家が政権を担うときの次世代の官僚の役目も期待されていた。

明治維新に例えてみよう。

明治維新は成功した。しかし、伊藤博文^{いとうひろふみ}、山県有朋^{やまがたありとも}、松方正義^{まつかたまさよし}などの次世代を担うべき者たちが全滅したことになるだろう。

これはかなりの被害だ。

グダグダと述べてみたが信長が動けない状況ということだ。

といっても、秀吉に大阪城の建築をさせているあたりちゃっかりしている。

安土城が燃えてしまったのだから仕方ないといえば仕方ないかもしれない。

そんなわけで暇なのだ。

暇なのにはもう一つ理由があるのだが、もうひとつの理由はすぐにわかることだろう。

「秀家さま^{ひでいえ}ー。秀家様ー」

ほら来た。

「すでに皆集まっておりますぞ。何をしておいでか」

聞きなれた声が出た後、忠家ただいえが部屋に飛び込んできた。
はげ頭からは蒸気が噴出している。

おおっ！ おおおっ！ 相変わらず忙しいことで。

「やはり、ここにおられましたか、評定はすでに始まっておりますぞ。何をしておいでか」

当たり前だが怒られてしまった。

俺は今、評議、つまり会議をボイコット中なのだ。

「俺がいようがいまいが関係ないだろ。どうせ勝手に進んでいくんだし。俺がいないことで問題など無いだろ」

俺はそっぽを向いた。

「いい年をして拗ねなさるな」

まだ14歳なのでいい年というわけでもないが、既に元服している身なので大人と扱われることも仕方ないことだ。

「とにかく、形だけでも出席されないと。今以上にお立場が悪くなられますぞ。秀家様もそれは望んでおりますまい」

そういうと俺の返事を待たずに俺の手を取った。

そのまま忠家は寝転がっていた俺をズルズルと部屋から引きずり出した。

ながふねさたちか

広間に入ると筆頭家老の長船貞親を中心に全員すでに揃っていた。

俺が入ってきたことに気づくと、皆一斉に今までしていた議論を取りやめるが、すぐにまた喋りだした。

俺が忠家と席についてもそのままだった。

「ゴホンッ」

俺がわざとらしく咳払いをすると皆一斉に今気づいたような顔をして、わざとらしく平伏した。

形ばかりの平伏ほど腹のたつものは無い。

「うむ、続けてよい」

俺は頷く。

皆は再び堰を切ったように議論に戻っていった。

俺はボーっと広間に集った面々の顔を眺める。

左から一門筆頭、宇喜多忠家。うきたただいえ 浮田宗勝。うきたむねかつ 明石全登。あかしただけり 八浜七本槍

として毛利との対戦で名を上げた馬場ばばなどが連なっている。

右には前筆頭家老、戸川秀安とがわひでやすから地位を受け継いだ現筆頭家老で

政務担当、事実上の宰相である長船貞親。ながふねさだちか

そして長船と同じく俺の父の代からの重臣である岡家利。おかいえとし その子

である岡利勝。おかとしかつ

前筆頭家老戸川秀安の息子である戸川達安とがわたつやすなどが面々連なっている。

皆俺のことを半ば無視して勝手に議論している。

いつごろからこのようなことになってしまったのであろうか。

2年前。

本能寺の変の直後はまだ今よりも良かった。

本能寺の変で勝ち取った功績を盾にしてある程度思うことが実行できた。

信長ゆきなから功績として貰った備中、備後を直轄領とし、財務に小西こにし行長ゆきなの父であり、元宇喜多家の御用達商人である小西隆佐こにしりゅうさをあてた。

桃寿丸とうじゅうまるにも城を1つであるがあげることができた。忠家の領地を分けてもらっただけだ。

それでもこれから少しずつ俺の子飼いの家臣、小西行長、石川五右衛門いしかわごえもん、後藤又兵衛ごとうまたへえらを宇喜多家の要職に付け、勢力を拡大していこうと思っていた。

そのつもりだった。

しかし、当時の政務担当であつた戸川秀安とがわひでやすが引退し、その戸川秀安と忠家の推薦により長船貞親ながふねさだちかが次の政務を担当しだしてからおかしくなってきた。

父、直家からの家臣で、忠家からの絶大の信頼を得ている長船貞親はそれを傘に来て専制をふるいだした。

まず、どうやったのか知らないが、俺が信頼を置いていて、しかも重臣として唯一ねじ込むことができた小西隆佐が長船貞親についてた。

どうやって丸め込んだのかはわからないが、小西隆佐があからさまに俺を避けるようになり、長船に追随することが多くなった。

俺が気づいたときには既に小西隆佐は長船貞親のイエスマンに成り下がっていた。

元々、忠家から絶対の信頼を得ていた男である。直家の初期からの家臣であつた男なので諸將の信頼も高い。

そして、政治において初心者な俺と百戦錬磨で経験の豊富な長船貞親である。

俺が争つて齒が立つものではなかった。

そして何よりも悪いことにこのころから俺の内政の失敗が徐々に明るみに出だした。

多分、財政を担当している小西隆佐のせいである。

ガレオン船はどうにかなった。

織田家からの資金提供を受けたことで、不可侵のものとなつたた

めだ。

今更やめることの方が難しくなった。

しかし、採算の取れない活版印刷、莫大な輸入費のかかる軍馬、風土に合わないサトウキビ畑の全滅。

これらのことが諸将に知られるうちに俺の立場はだんだんと追い込まれることとなった。

当初はそれほど気に留めず、何とかなると思って捨て置いておいた。

そうしているうちにのつぴきならないこととなっていた。

最終的に重臣で擁護してくる人は、忠家1人のみだった。

そして忠家1人の力では如何ともしがたい状況になっていた。

俺が三ヶ月でした内政で今でも残っているのは資金の目処が付いたガレオン船といまさらどうしようもない軍馬ぐらいとなった。

「との、殿！ 御採決をお願いします」

俺を現実と呼び戻したのはその張本人である長船貞親だった。

「うん？」

俺が現実に戻ると、広間にいる全員が俺のことを見つめていた。

「すまん。聞いていなかった。」

俺はやり場の無い視線を泳がせる。

「はあ」

長船貞親はこれ見よがしに、わざとらしく大きなため息をついた。

「殿にはどうも難しすぎたようで」

長船貞親の言葉に周りから失笑が漏れる。

「いや。すまん。考え事をしていた」

「はあ」

長船貞親は再度今度はより大きくため息をついた。

「殿におかれましてはこのようなこと些細なことでございまして

う。

しかし民にしてみればどのようなことであれ、ここで語られることは非常に重大なことです。

まあ、殿は戦において全てをかたづけてしまうつもりなのでしょうな。

もう少し下々のことをお考えください」

再び失笑が漏れる。もはや隠そうともしない。

「悪いとは思っている。だから謝っているでないか」

「謝ることなど童でもできますよ」

小西隆佐が横槍を入れてくる。

再び笑いがおこった。

俺はイラッとした。

きつと眉間には青筋が浮かんでいることだろう。

やはり来るべきでなかった。

帰ろう。と席を立とうとすると忠家と目が合う。

忠家は「こらえてくだされ」と目で訴えている。

俺もこらえなくてはならないということはわかっているが、今回のことが初めてではない。

我慢できる限界はとうに超えていた。

俺が立ち上がるうと腰を浮かすと、機先を長船貞親に制された。

「私を花房正幸のように鞭でも打とうというのですか。いいでしょうとも。受けてたちましよう。私は花房のように簡単にはいきませんよ」

俺は機先を制されたことでこれから立ち上がることも、家臣に八つ当たりすることもできなくなった。

「すまん。本当に聞いていなかったのだ。もう一度説明してくれ。この通りだ」

俺は仕方なく頭を下げた。

忠家がすかさず助け舟を出してくれた。

「旭川の治水のことです。旭川の河川の氾濫が頻繁に起こってい

ると報告があります」

「ですから旭川付近の年貢を他と比べ低くしようとしております」
続けるのは戸川達安。とがわたつやす 前の筆頭家老兼政務担当の戸川秀安の息子である。

戸川秀安の後任という形で重臣に迎えられた。

初陣で小早川隆景を撃破したこともある軍事面においては申し分の無い男である。

俺にも少なからず応援してくれている人がいるのかと感動した。

「旭川というところの岡山城のすぐ東にある旭川か？」

「それ以外にございますか？」

長船がさかさ茶々を入れに来た。

どうも北海道の旭川が最初に頭に浮かんでしまう。

「こここのところ被害が多発するようになっておりますので、早急な対策を。ということですよ」

戸川達安が補足する。

俺は少し考えた後、発言した。

一応発言する機会是与えられている。

「忠家、達安。旭川の氾濫は昔からのことなのか？」

「どうでしたかな。私が子供のころもたびたびあったような気がします、最近ほど頻繁というわけではなかったような気がします」
忠家は答えた。

「達安は？ どう思う？」

「私は忠家様ほど長く知っているわけではございませんが、過去の文献からはそこまで氾濫する川では無いように思われます」

達安は少し考えた後、自信がなさそうに答えた。

「ふむ。そうか。よくわかった」

「いったいそのようなことを聞いてどうすると。既に皆、年貢の軽減と旭川の治水工事ということで評定は決しておるのです。

あとは秀家様が領けばそれで良しということまできてるのです。

今更蒸し返すようなことなど……」

長船貞親は大きく首を振る。

俺は途中で手を前に出して会話をとめた。

「長船。確か旭川は上流でたたら製鉄をおこなっておったな？」

「はあ。そうですか」

それが何か？　と言わんばかりの顔だ。

たたら製鉄。

この時代の一般的な製鉄法である。

製鉄に必要な空気を送り込む機会をたたらと読んでいたためたたら製鉄と呼ばれるようになった。

砂鉄などをとかし、刀などの原料にするものだ。

これは大量の木炭と砂鉄が必要である。中国の産地はこの条件に適した地が多かった。宇喜多家領地も例外ではない。

わかりやすいのは、某アニメ映画の大手が放映した映画だろう。

狼に育てられた少女（なぜか美少女）とイケメン男子との恋愛のやつである。

イケメンが憎い。

驚いたことは俺は一度驚いたことはあの映画、かなり忠実に作られているということだ。

つまり、あの映画の現状そのままなのだ。

違うところといえば、狼に育てられた美少女がいないということぐらいか。

俺のところにも来ないかな……

「少しの間たたら製鉄を中止させてみてはどうだ？」

皆が一様にポカーンとする。

「たぶん、旭川の氾濫は上流の森林の伐採が原因だろう。」

たたら製鉄を少しの間中止させて見てはどうだ？

森林の機能を取り戻すことができれば自然と旭川の氾濫も少なくなるわ」

俺は得意げに一気に続けた。

ジリ様様だ。

「どうだ長船？」

俺は勝った。

しばらくの沈黙があつた後

「はーはっはっはっはっは」

と長船貞親は笑い出した。

それにつられて他の重臣も最初のしのび笑いからだんだん笑い声が大きくなった。

笑つていないのは忠家と達安のみである。

忠家は頭を抱えている。

「笑わせてくれおるわ。たたら製鉄の中止だと？ ふざけるな小

童め！！！」

我らの領地は他と比べて石高が少ないことを知るっておるのか！

！！

そしてどれほどたたら製鉄に我らが依存しているのか考えたことがあるのか。

我らがやっていけるのは製鉄に伴う産業があるからなのだぞ。

それを少しでも考えたことがあるのならそのようなこと口が裂けてもいえぬわ。

そもそも、なぜたたら製鉄が旭川の氾濫につながるのだ。いつもでも夢の続きを見ておるようではどうしようもないわ」

長船は怒りの形相で俺を睨みつけた。

「いえ、それはわかっているのだが……」

「わかっている？ わかっているのならそのようなこと言えますまい。」

少しは民の暮らしも考えるがよろしかろう。既に評定は決しているのです。今更蒸し返すようなことはせんでも良いわ！

誰もお主の様な少し戦ができるだけで鼻が高くなっているような小童の意見など当てにしておらんは。我らの言うことに頷いておればそれで良いのだ」

俺は血相を変えて反論する。

自分でも顔の色が変わっていくのがわかる。

俺は精一杯反論しようとする。

自分でもそのようなこと認めたくは無い。

「しかし、俺にも……」

そこで言葉は切れてしまった。

考えがあるのだが

とはいえなかった。

誰も俺のことは見てくれていない。

それ以上に長船に同調するように相槌をうったり、忍び笑いをしているものもいる。

自分がここで何を言っても無駄だとわかる。

なんとも腹の底がむせ返るような嫌な気分になった。

そもそも環境問題など明治でさえ問題にされてなかったことなのだ。戦国時代に認知されているはずも無い。

たたら製鉄には大量の木炭を使用する。

その木炭は砂鉄が採取される、溪流の山間部を中心に利用されることとなる。

禿山となった山から土砂が流出することによって下流の農業に影響を与える。

ここらへんは某アニメのおかげで間違っていないと断言できるだろう。

俺は嫌な気持ちをはたか飲み込み、話を進めようとした。

「それで、旭川の治水はどうするのだ？ 農民に負担させるのか、商人に頼むのか？」

「商人？ どうしてそこに商人が出てくるのだ？ 商人如きがこのようなことに役に立つとお思いか！！！」

商人など金勘定しかできぬ輩ではないか」

「うう……」

俺はもう言葉を発することができなくなった。

できなかったし、したくもなかった。

俺が発言することはどのようなことであれ否定されるだろう。

一考もしてくれない。

そう思うと気力も体力も奪われてしまった。

後の会議の内容は覚えていない。

皆なにやらこの後もいろいろしゃべっていたのだが俺がしたことは「ううむう」

という領きとも、うめきとも聞こえるような返事と

「長船の好きにするが良い」

という投げやりな返事だけだった。

こうなると評定はスムーズに進んだ。

基本的に誰も長船貞親の意見に反対することなく、長船貞親の意見が通るためである。

最近はいつもこのパターンだ。

俺が最初頑張るのだけれど、打ちのめされてしまい、後は長船の思うがままというわけだ。

そして評定が終わった後、俺が自室に帰ると忠家がやってくる。

「殿、入りますぞ」

ほら来た。

「なんだ。また説教か。もう評定で聞き飽きたよ」

「殿。ですが、もう少し殿のほうでも考えるよう促してもよろしいのではないでしょうか。」

長船の意見を通しすぎです」

「じゃあいつたいどうしろというのだ。そもそもお前は長船のことを信頼しておるのだろうか？」

俺はやつあたりだとわかつているがブ千切れる。

「それは……」

長船様とは殿のお父上からの付き合いですし、人柄は存じております。信頼できる人物だと思っておりますが」

何が信頼できる人物だ。

そのうち宇喜多家がのつとられるわ。

「なら良いではないか。信頼できるものの意見を通して何が悪い」俺が声を荒げる。

「いえ、それは重要なことです。あまりに一人に任せるのもいかななものかと」

「他のものは長船に追随するばかりではないか。それに、評定のたびにああまで言われる俺のみにもなってみろ」

「それは殿にも悪い面がございましょう」

俺は鼻で笑う。

「はっ 俺にも悪いところがあると。俺が意見を言っても誰も耳を傾けてくれない。そもそも傾ける気が無いというのに。」

だいたい一人に任せるなというが、筆頭家老の長船に任せて何が悪い。

お前も信頼してるみたいだし、家臣からの信頼も厚い。良いことずくめではないか」

俺は思ってもいないことを口に出す。

「岡家利の意見を聞いてみてもよろしかったでしょうに。」

彼は自分から発言することはありませんが、冷静な人物です。長船様と同じく殿の父からの家臣でもあります。

きつと殿にとって良い意見を述べてくださったでしょうに」

「お前が言えばよかったではないか。なぜ評定のときに言わなかったのだ」

「私が言ってもどうしようもありますまい。殿には前々から言っていたはずなのですが」

「そんなもん、忘れてしまったわ。評定の前に言え。そのようなことは」

「殿が遅刻なさるからという機会も無かったのですよ
そついうと忠家は何かを諦めるように
はあ

とため息をついた。

「今日はこれぐらいで帰ります。くれぐれも今後評定には出席なさるように。形だけでもいいですから」
そついうと忠家は出て行った。

もうため息は聞き飽きた。

これでやっと自分の時間を取れることになる。

この後来客が訪れることはないだろう。

評定が早く終わることとなったのでまだ日は高い。

しかし今回の評定はいつものことであるが精神的にこたえた。

このまま部屋にしよう。

と考えていると思いがけず来訪が訪れることとなった。

「入ってもよろしいですか？」

聞きなれない声だ。

珍しい。

俺に忠家やお香や桃寿丸以外の来訪者が訪れるとは。

拒む理由は無い。

「どうぞ」

俺は外向けの返事を返す。

「失礼いたします」

そういつて2人の若い男が入ってきた。

とがわたつやす
「戸川達安と岡利勝か。どうした？」

戸川秀安と岡利家の息子である。

両名とも若いながら宇喜多家の重臣である。

先ほどの評定にも参加している。

両名は平伏している。

「面を上げてよいぞ」

こう言わないと普通の会話もできやしない。

めんどくさいことだ。

「で、一体なんのようだ？」

両名はかしこまって答える。

「此度の評定で思うところがございまして。ぜひお人払いを」

「大丈夫だ。ここには俺以外にいない」

もともとここには俺の世話をする人や護衛などが何人かいたのだが俺が追っ払った。

基本的に現代人の気質である俺には四六時中誰かと一緒にいることには耐えられない。

例え何も言われなくてもただ他人に見られるというのは思った以上に辛いものがある。

「単刀直入に申します。最近の長船様の言動は目にあまるものがあると思います。

殿はいかがお考えか。是非殿のお考えをお聞かせ願いたい」

戸川達安が口上を述べる。

「利勝も同じ意見か？」

「はい。私も最近の長船様はあまりにも殿を蔑ろにしていると思います」

俺以外にもこのように思っていてくれる人がいるというのは嬉しいことだ。

「確かに長船は最近専制が過ぎると思っではいるが……

すまん。今の俺にはどうにもできん。おぬしたちも知っていると
思うが今の俺にはあまり家臣たちへの求心力が無いのだ。

俺にもう少し力があればこんなことにはならなかったのに……」

「殿がそのように嘆かれることはございますまい」

岡利勝が俺のフォローをしてくれる。

「そうです。殿の責任ではございますまい。

私らは何時でも殿の味方です。いかなることがあろうと殿のため
に馳せ参じましょう」

戸川達安はこういつてくれた。

俺にはかなり嬉しい一言である。

「良くぞ言ってくれた！！ そちたちの忠誠俺は忘れんぞ」

「殿もこのまま黙っているおつもりではないということですか」

戸川達安が念を押してくる。

「もちろんだ」

俺は即答する。

「その時は是非私どもに人働きさせて頂きたい」

それが狙いか。可愛いものだ。

「うむ。お主達にも頼ることになろう。その時はよろしく頼んだ
ぞ」

「はっ 命に代えまして」

そう言うのと2人は俺の部屋から出て行った。

俺は先ほどとは違った晴れ晴れとした表情になっていた。
次代の重臣となる2人が俺の味方だと知れたのはでかい。

まだ宇喜多家の中にも俺の味方はいる。

まだまだ懸念はたくさんあるが、少しは気持ちが楽になることが
できた。

まだ日も沈んでいないしお香を誘ってどこかへ言ってみようかな。
どこに行こうか？

今からだとあまり遠くに行けないのが痛いところか。

たしか後藤又兵衛が兵の鍛錬をしていたような。

しかし、デートに練兵を見るといのはどうなんだろうな。

水族館も遊園地もない戦国時代ではどうしようもないことが。

とりあえず、お香を誘ってみるか。

お香を見つけることはそう難しくなかった。
いつものように台所にいたからだ。

ちょうど手が空いたところだったらしく喜んで俺に付き合ってくれた。

「どこか行きたいところある？」

「八郎様が行きたいところならどこでも」

いつも、ついついこの言葉に甘えてしまうことになる。

どこへ行ってもうれしそうにしてくれる。

こっちも楽しい。

「ちょっと兵の様子を見に行こうと思っているんだけど……」

「兵ですか？」

お香が小首をかしげる。

「ごめん。女の子を連れて行くところじゃあなかったね」

「いえ、私は大丈夫です。お仕事ですからね」

「そう。つらくなったらいつでも言ってよ」

最近はそのでもなくなっただが、お香は侍を恐がっていたこともある。

「大丈夫です。最近はまだ慣れました」
そういつて胸を張る。

俺はその胸を凝視した。男の性で。

それに気づいたお香は慌てて両手で胸を隠した。

「何見てるんですか。もう」

そう言ってこっちを見てくる。

「いや、すまん。そんなつもりは無かったんだ」

「もう。慣れてきたのも八郎様のおかげなんですからね」

「ん？ 何か言った？」

「いいえ、何も」

他愛ない会話であるが今の俺にはかけがえの無いものだ。

幸せを実感できる唯一のひと時である。

城を出るときにその俺のひと時をぶち壊す人物と出会うことになった。

長船貞親である。

ちょうど本丸前の門で出会うことになった。

長船は俺がいることを確認するとすぐにこちらの方にやってきた。さりげなくお香を俺の後ろに追いやる。

まずいところで会う。

「これは殿どちらに行かれるおつもりですか？」

長船は俺が何か言う前に先に発言した。

俺は身構えて答える。

「いや、兵の様子でも見に行こうかなと」

「本当に戦がお好きなようで」

嫌味な奴だ。

長船は俺の後ろを覗く。

そしてすぐに眉をひそめた。

やばい。気づかれた。

「秀家様。またそのような下賤の者と共におられるのですか。いいかげん、自分のご立場を考えなされ。城下ではあらぬ噂が横行してまずぞ。」

殿に取り入った女狐やら、宇喜多の殿は下賤のものを囲っているとか。

宇喜多家の威信に関わります。そのような者、即刻城から追い出して頂きたい」

「貞親！！！！言葉が過ぎるぞ！！！！俺を侮辱するか！！！！」
俺は怒鳴りつけた。

「いえいえ、ただただ殿を案じておるだけでございます。」

それもこれも、殿が側室を1人も持たぬがため。

側室の1人でも持ち、女を知り申せばこのような女への執着も晴れるでしょう」

「考えておく」

俺は投げ捨てるようにいい、この場を早く離れようとする。

そんな俺の気持ちを知ってか知らずか長船貞親はそ知らぬ顔で話を続ける。

「まさか、その女を側室にするつもりではないでしょうね。」

そのようなこと、まさか無いでしょうが。

いやいや、殿ならばそれもありえましょう」

長船は大げさに首を振る。

そしてさらに続ける。

「元服したものに言うことではないでしょうが、側室とは、特に一国の領主の側室は家臣から娶るものです。」

家臣から側室を貰うことでその家臣との絆を深めるものです。

そのような下賤の者など言うに値しません。

どうです？ 私の娘に手ごろな年齢のものがおります。是非これを機会に」

それが言いたかったわけか。

お前の娘など死んでも嫌だわ。

それで子供など生まれてはたまったものじゃあない。

「そのような心配無用じゃ」

俺は言い捨てる。

「そうですか。それは安心しました。是非殿には私たち家臣がしつかりとした者を選ばせていただきますゆえ」

長船は「うんうん」と頷いている。

「ふん。好きにせい」

長船は機嫌良さそうに頷いていたが、いきなり俺を睨みつける。

「まさか殿。その者を正室にするおつもりではないでしょうね」

凶星をつかれてしまった。

「えっ んん、それは」

言いよどんでしまう。

長船はますます表情を険しくした。

「殿はうつけだうつけたと思っておりましたがまさかこれほどとは。」

一国の領主の嫁取りとは外交です。しかるべきところ、しかるべき地位の者から正室を迎えなくてはなりません。

まあ、うつけ者に言っても無駄でしょうがな」

長船はそういうと深いため息をついた。

「はあ」

そうしてこれ以上は何を言っても無駄だと言つように肩をすくめると城に向かって帰っていった。

「お香、大丈夫？」

長船が去っていったのを確認すると背後を振り返る。

「はい。私は。もう言われ慣れておりますから」

そういつて気丈にもお香は笑って見せた。

「そうか。すまん。俺がふがいないばかりに」

「いいえ。そんなことは……」

その後はたいして会話も無く目的地まで移動することとなった。
城からはなれたところで後藤又兵衛は指揮を取っていた。

辺りには轟音が鳴り響いている。

お香は目をパチクリさせてびっくりしている。

無理も無い。

鉄砲の音でさえ一般人には刺激が強すぎるのだ。

俺は又兵衛の近くにまで行くと大声を張り上げた。

「どうだ！！！！調子は！！！！」

「これは殿！！！！いらしたのですか！！！！」

又兵衛も同じく声を張り上げる。

「総員、休め！！！！しばらく休息とする」

又兵衛は傍らにいた兵にそう告げる。

それを聞いた兵が旗を揚げた。

すると全員の砲撃がびたりとやんだ。

見事なものだった。

「これで大丈夫です。おちおち話すこともできませんな」

そういつてがっはつはと笑う。

「また評定で何かありましたか？」

「よくわかるな」

「それはもう。評定で何かある度にここに来られれば嫌でもわかりますよ」

「お前には隠し事できんな」

「殿はわかりやすいですからね」

そんなにわかりやすいのか。

なんかシヨックだ。

「相変わらずですか？」

「相変わらずだねえ。鹿之助がいたらなあと思ってしまっ自分が

情けないよ」

「山中鹿之助殿がいなくなったのは確かに惜しいですね。

しかし、行長殿は喜んでおられましたよ。

殿はどのような約束でも守るお方だ。私もよおるっぱに行ける日も近い。とか言っていましたよ」

山中鹿之助は本能寺の変の功により尼子家の再興を許された。

領地は出雲東部の月山富田城がっさんとだじょうを与えられた。

大豪族を抑えるために小勢力をいくつか大豪族の側に置いておく。信長は統治政策として郡県制をなそうとしていたことはよく知られていることである。

全国に郡県制をしき、代官を任命し、代官がその地区を統治する。いわゆる中央集権制である。

しかし、それでも今まで功績のあつた武將、柴田勝家や丹羽長秀、滝川一益、羽柴秀吉などはそうもいかない。

彼らには土地を与えなければ納得しない。

そこで彼らにはその抑えとして信長自身の配下である武將を小大名として側に土地を持たせるわけである。

柴田勝家の例を上げよう。

北陸総司令官であり、越前を任されていた柴田勝家は信長から部下を与えられていた。

前田利家と佐々成政である。

彼らは信長の命によって柴田勝家に仕えている。

そして領土を与えられている。いざとなった時の抑えとするためである。

「鹿之助の方はうまくいっておるのか？」

「うまくいっておるようですよ。」

毛利家から尼子義久殿あまごよしひさを解放して当主としました。もちろん倫久ともひさ殿、秀久殿ひでひさは未だに人質のままですが。

もともと民からの人気が高い人物ですからね。山中鹿之助殿は。山陰では尼子家の人気も未だに強いですから。当分は順調でしょう」

ちなみに尼子義久は尼子晴久の嫡男である。

尼子晴久が有名な尼子常久の孫であるから義久はひ孫となる。

毛利との戦により毛利家に幽閉されていた。倫久、秀久は義久の弟たちである。

彼ら三人を合わせて尼子三兄弟という。

「そうか、俺がうまくいっていない分、嬉しいものがあるな」

「鹿之助殿でしたら、心配無用でしょう」

「そうだな」

「せっかく来たのですから兵を見ていかれますか？ 大分形にはなつてきましたよ」

「いや、いい。お香が驚いてしまうからな」

お香はやつと驚きが収まったようだ。

それでも胸に手をやっている。

「調子は良さそうだな」

「まあ、形にはなりました。問題はまだまだありますが」

そういつてがっはつはと又兵衛は笑う。

「やはり問題は多いか……」

最近良いことなしの俺は自然と顔が暗くなる。

「そうですね。いろいろ御座いますが。一番は輸送面ですね。

やはり厳しいですね。とても実戦に耐えられるものとは」

「実戦では無理か……」

「行軍にはとても付いてはいけないでしょうね」

「行軍は無理か。それについては俺に少し考えがある。うまくい

ったら儲けと思つさ」

「船ですか」

こいつ、俺と同じ考えをしてやがる。

「そうだな。次の戦は地形は有効に使えそうだから」

「島津ですか」

こいつ……さすがとしか言いようがない。

「輸送はいいとして他は？」

「そうですね、やはり技術が追いついてませんね。」

織田家でやっているように大々的にできないのが痛いです」

「ふむ……資金力が圧倒的に違うからな。技術提供してもらえないかな？」

それも次の戦しだいといったところか」

「なんとか数だけはそろえることができましたから。何とかして見せますよ」

「悪いな。頼む」

お互いみつめるところは1つだ。

不意に又兵衛が聞いてきた。

「次の戦が楽しみですか？」

「うん？ いきなりどうした？ まあ評定よりかは好きにできそうだな。」

年寄りどもが来なければのびのびとできるだろうし」

又兵衛は俺の答えを聞くと何か言いたそうにしたが、口をつぐんでしまう。

「じゃあ、俺は帰るわ。そろそろ日も沈んできたし。又兵衛もあり兵を疲れさせるなよ」

「加減はしております」

夕日に向かって去っていく秀家を見て又兵衛は不安を覚えた。
「殿は戦を待ち望んでおられる」

先ほど言えなかったことを口にする。

あの年で家中をまとめることはさぞ大変だろう。

殿の精神はわしが思うよりずっと脆くなっているのかもしれない。次の戦、殿自信が出られる必要は無い。

もちろん殿自ら出たほうが織田家への対応としては正解だ。

しかし、こうも家中がまとまっていな中、国元を離れることは危うい。

いや、殿は今、次の戦とお香とでなんとか踏ん張っているに過ぎない。

「危ういな」

再び呟く。

もしどちらかが崩れたら殿自信も崩れてしまうのではないか。

そうまで考えて後藤又兵衛は自嘲気味に笑った。

らしくない。

もともと、ここも腰掛程度にしか考えていなかったはずだ。

戦功を立てる場がありさえすればよい。そのつもりで黒田家を飛び出したのだ。

眼下にいる兵を見つめる。

鍊度も悪くない。いや、申し分無いぐらいだろう。

なによりわしはあの殿の構想を見てみたいと思う。

「官兵衛様。もう戻ることは無いかもしれませぬ」

そういつと後藤又兵衛は再び兵の指揮に戻るのだった。

帰り道。

お香と俺は気まずい中を帰ることとなった。

どう考えても長船との一件が後を引いているということはわかる。

「八郎様」

ふいにお香から話しかけてきた。

「私、ここを出ることにいたします」

お香の急な言葉に俺は動転した。

「ど、ど、ど、どうしたの？ 急に？」

「やはり私がここには八郎様に迷惑がかかります。

そのようなこと私には耐えられません」

「ちょ、ちよつと待ってよ。ここを出てどこに行くっていうんだ。

慶明さんはまだ帰ってきていないし」

ちなみに慶明さんはまだ毛利との交渉中である。

領地の引渡しは無事に済んだが、毛利との戦後処理はまだいくつが残っている。

あと少しで終わるとの連絡はあったのでそのうち帰ってくるだろう。

「私1人でもお寺に帰ろうと思います」

「そんな……」

俺は放心する。

「長船が言ったことを気にしているのか？ あんなの気にすることないって。

どちらかといえば俺の力が足りないのが悪いんだし」

「いえ、そういうことでは……」

お香はそういつてうつむく。

「やはり私は身分が違います。城に来ることも私は気が進みませんでした。

私は耐えられません。八郎様がこのまま離れていってしまうことに」

「そんなこと無いよ。俺はずっとここにいるよ。どこにも行かないし」

「やはり勘違いしておられます」

「じゃあいったいどういうことだよ。はっきり言ってくれなきゃわかんないって」

お香はしばらく黙り込んだ。

そして意を決したようにしゃべりだした。

「八郎様にはお立場がございます。長船様がおっしゃっていたようにそのうち正室をとられになります。」

側室も何人も抱えられるでしょう。それをまじかで見てるのが辛いのです。

そのような方には私より身分も容姿もふさわしい方がたくさんおられます。

八郎様もきつと心変わりされるでしょう。それを見ているのはつらいんです。

わかってください」

お香は一気にまくし立てた。

目には涙が浮かんでいる。

俺はその涙を手でぬぐう。

「ばかだなあ」

「バカとはなんですか。私なりに必死に考えたのです。」

私たちはふさわしくありません」

「大丈夫。長船は俺が何とかする。家臣どもには何も言わせないだけの力を見せ付けてやる。」

それをやるだけの覚悟も準備もしてきた。きつとうまくいく」

俺は自信を持って答える。

「お香は何も心配しなくていい。そのうち正室に迎えてやる。だからそれまで待っていてくれないか？」

お香は涙をためたままの顔で精一杯の笑顔で

「はい」

と微笑んだ。

27話 九州征伐1

同年 8月 厳島^{いつくしま} 安芸^{あき}

「さすがは大毛利家」

俺の横にいる秀吉は素直に褒めちぎった。

厳島の宮尾城から眺める広島湾は絶景だった。

日本三景と名高い景色なのだから感動もひとしおである。

景色もそうだが、厳島神社の影響力、海上交易の利点から日本の歴史にもたびたび登場する。

波がまだ出てから時間の経っていない太陽に反射してきらめいている。

「殿様、これは」

秀吉は傍らにいる人物に視線を移す。

「おお」

陽光差し込むような笑みを浮かべて信忠は答えた。

信忠も眼下に広がる景色に驚きを隠せていない。

ここにいる人物で例外はいないだろう。

広島湾には織田家の幟をたてた軍船で埋まっていた。

数百名をのせた大安宅船^{おおあたまね}、鋭い船首の関舟、海面をイナゴのように無数に飛び回っている小早船。

その数はおそらく千隻を超えている。

これらの船は外洋に出る能力は低い。しかし、日本近海では圧倒的な力を持っているだろう。

もちろん忘れてはいけない。

俺の手勢。

宇喜多水軍のガレオン船もこの中に含まれている。

質では負けていない。いや、むしろ勝っていると自信があるが数ではとても太刀打ちできない。
できるものではない。

千隻を超えるであろう大船団が湾一杯に広がっている。

信忠は2代目にふさわしい、素直な心をそのまま出した。

「さすがは毛利軍……！」

織田水軍の主力である九鬼水軍が今北条に向かっていて。

だというのにそのはるかに離れた西でこれほどの艦隊を編成することができなのだ。

この時代、日本最強の水軍の名をほしきままにしていた毛利だからこそだろう。

敵にするにはこの上なく恐ろしいが、味方となるとこれほど頼もしいものは無い。

先年（とはいっても1581年なので3年前）の織田との戦からここまで立ち直った。

毛利水軍、完全復活といってよい。

秀吉も信忠も俺と同じ意見だろう。
目と顔の表情も見ればわかる。

秀吉は小早川隆景の方に振り向き

「こりゃあ」

と呟いた。

それ以上は何もいわない。

褒め言葉は秀吉の主である信忠に言わせたほうが良いという配慮である。

秀吉はこういうことによく気の回る男だった。

「又四郎殿。見事な働き、感謝する」

信忠は秀吉の意図を汲み、信長譲りの高く、するどい声で言った。
しかし、天性のものである、天真爛漫な明るさが自然と備わっている。

2代目気質らしい信長には無いものだっ

た。小早川隆景は思慮深そうな顔に控えめな忍び笑いを添えて答えた。

「全てはわが主、輝元様が上様のために一意専心に尽くした故でございます」

わざわざ輝元の名を出す。

先代の毛利家当主、毛利元就の教育が行き届いているというのか、律儀なのか。

凡将である輝元をいちいち立てる。

いずれにしろ小早川隆景という人柄がよくわかる。

真面目な男だ。

「うむ。上様もこれを聞けば喜ぶこと間違いないだろう。よう伝えしておく」

もし、本当に信長がこれを見る。もしくは知ったらどうなるのだろうか。

毛利をいつかは滅ぼそうとするに違いない。

いや、まずはあの手この手を使い毛利の力を削ぎ、その後ゆっくりと毛利を追い込んでいくだろう。

どちらにしろ毛利に生き残る道は無い。

「宇喜多殿のがれおん船といったか。あれも見事のものよ。見よ。ひとときわ大きく、異彩を放っておるわ。期待した以上のものではあった」

信忠、いや信忠様はありがたくも俺へのフォローも忘れなかった。

「は、全ては上様のご意向と信忠様の徳、故にございます」
俺は答える。

「うむ、うむ。父上にもしかと伝えおく」

信忠は満足げに頷いた。

俺や信忠、秀吉が安芸にいるのはもちろん戦のためだ。

九州征伐。

もしくは九州攻め、島津攻め、九州平定など呼び名はいろいろある。

史実では近畿、四国、中国を平定し天下統一への道を順調に進んでいた秀吉と島津との戦いである。

しかし、今総大将は織田信忠であり、副大将として羽柴秀吉が任命されている。

信忠と秀吉は安芸に来る前、俺の領地である備前にも足を運んだ。当然である。通り道なのだから。

俺はこれを機会に信忠にガレオン船を見せた。

性能の面ではまだまだポルトガルから取り寄せたガレオン船にはとてもかなうものではない。

しかし、形だけはしっかりとしたものができている。

信忠は素直に驚いてくれた。

「おお、これは船なのか。わしはこのような巨大な船始めてみたぞ。

これを見ただけでも父上に取り成したかいがあったものだ」
と子供のように目を輝かせてくれた。

その後、九州で戦ということだった。

俺はこれをいい機会ととらえ、城を飛び出した。

信忠と秀吉を伴って喜んで安芸までガレオン船で案内した。

後の領地の運営は長船貞親に任されることとなった。

不本意ではあるが……

そこで俺はなんともいえない不満と不安を消し去るために城に詰めている兵の指揮権を戸川達安と岡利勝に任せることにした。

長船の悔しそうな顔といったら。

ざまあwww

そんなこんなで安芸まで来ることとなったわけである。

元に戻そう。

信忠はそのまま広島湾に目を向けたまま子供のころからの呼び方で

「籐、申せ」

そう秀吉に言った。

九州征伐の作戦概要を述べよということだった。

すでに作戦計画は評定を経ており、皆も承知である。

俺も出席した。

もちろん信忠も参加している。

もう一度、この景色、艦隊を眺めながら聞きたくなったのだろう。

気持ちはずごくわかる。

無邪気なものだ。

「へっ」

秀吉は素っ頓狂な声を出した。

が、目は真剣だ。頭はフルに回転しているのだろう。

「わが方は四国の長宗我部元親の軍を合わせますと15万になり申す」

ちようそかべもとちか

長宗我部元親。

土佐の小さな、そして貧乏な国人からいっばしの戦国大名に出世し、四国の覇者となったところには、自信のあずかり知らぬところで既に天下の情勢は決していた。

この不幸は男は、信長という才能を最も早く気づき、評価していた人物の1人である。

信長がまだ地方の1大名に過ぎないうちから親交を深めていた。

彼の不幸はその地理的情勢から始まる。

戦国時代の土佐、いや、現在の土佐もそうであるが山地率は90パーセントに及ぶ。

ちなみに全国平均は約50パーセントと考えればその険しさがわかるだろう。

これは耕地面積が日本で最低であるということである。

長宗我部元親は家臣を食わせていくために土佐の統一を決意する。この当時土佐は土佐七雄、もしくは土佐七豪族といわれる本山氏、安芸市、一条氏、吉良氏、津野氏、長宗我部氏、香宗我部氏等の群雄割拠であった。

この中で長宗我部元親は一代で勢力を拡大し、土佐を統一する。土佐を統一した長宗我部元親が次に目指すのは四国の統一だった。特に阿波、讃岐は混沌としていた。

京に近かったためである。

京で敗れた魑魅魍魎の輩（三好氏など）がいったん讃岐や阿波に逃れ再び力をつけようと雌伏の時を過ごすことが繰り返されてきたからである。

しかしそれらも武力と調略を織り交ぜ突破する。

そしてあと少しで四国統一も目前というところまでこじつける。

しかし、彼の本当の敵は時流にあった。

既に信長が畿内を統一し、その手は四国にまで及ぼうとしていたからだ。

四国という京に近い地理上、信長にとっては四国はただ刈り取る場であった。

譜代の家臣への領地、自信の直轄領を増やすための選択だった。

そして何より不幸なことは信長が長宗我部元親への評価としてただの地方の一大名としてしか見ていなかったことにある。

信長は長宗我部元親に向かって「あれは鳥なき島の蝙蝠こつもん」と揶揄した。

「鳥なき里の蝙蝠」という慣用句をもじった言葉である。

優れた武将のいない島（四国）で幅を利かせている蝙蝠（長宗我部元親）ということである。

本能寺の直前、ちょうど信長は正にそれを実行しようとしていた。信長は三男、信孝、丹羽長秀に命じて四国の切り取りを実行しようとした。

しかしそこで本能寺の変が起こる。

信長自信は辛くも落ち延びることとなったが他のものはそうではなかった。

一時は近畿一帯を支配することとなった明智光秀によって政権の中枢を担うべく育ててきた官僚がいなくなった。

森蘭丸もりらんまるという信長の小姓として、けつを差し出すぐらいの価値しかないと思われがちだが、それ以上に膨れ上がった信長の領地の行政担当の面のほうが大きかった。

さらに各地に飛び火した反乱の目を消す必要も出てきた。

信孝、丹羽長秀の軍勢は本能寺の変で自然と立ち消えることとなる。

信長に四国の相手をしている暇は無かった。

この空白のときを狙い、長宗我部元親は四国を統一する。

信長はこれを見て昨年、嫡男信忠と羽柴秀吉に命じて四国征伐を命じる。

俺、宇喜多家にも四国征伐への参加を命じられるかと思ったが案外あつけなく四国征伐は終わった。

もともと信長について他者よりも高い評価を持っていた男である。戦国の習いにしたが、勝てないとわかると和平交渉を早急に進めだす。

もちろん、信長はすぐには納得しない。

長宗我部元親は苦渋の決断をする。

自身の息子、それも嫡男を和平交渉の使者として使った。

暗黙の無条件の人質である。

この時代人質は珍しいことでない。

が、嫡男はめったに無い。それもまだ敵国であるのにだ。
俺など母しか出していない。

桃寿丸を出さなくてはいけないとは思っているし、催促もきているのだがなんとか待って貰っている。

少し渋ったほうが桃寿丸の価値も上がるし、宇喜多家で少し実績を積んだほうが織田家での待遇も良くなると判断したからだ。

信長はこの長宗我部元親の覚悟を受けて和平を受け入れる。

もちろんただではない。

阿波、讃岐さぬき、一伊予（伊予）の一部を条件とした。

長宗我部元親も粘るに粘ったが最終的には受け入れることとなった。

これにより、長宗我部元親は織田家の外様となった。

「まず吉川元春が、大友宗麟と合流し東から豊前、豊後に進みま
する。

備後の日向において長宗我部元親ら四国勢と合流しさらに日向に
向かって進捗いたしまする。

わが弟、小一郎らは筑後、肥後の西を行きます。途中龍造寺と合
わさりまする」

そういつて秀吉は自身の2本の手をうねうねと動かす。

九州は2本の手でからめると言いたいのだろう。

簡単にいえば九州北部の在郷勢力と手を結び、東と西から2手に
分けて進軍するつもりだということだ。

「この軍勢は各々3万5千。合わせて7万になりやあす。

島津10万にはちと足りませぬ」

ここで秀吉は手を叩いた。

「島津はこれぞ好機と見、うつてでるりやあす。

これを見てわしらはあの波のようにゆらゆらただよいまする」

そういつて広島湾を指差した。

「島津が勝どきを上げんとするころ、殿様率いる12万が錦江湾へとなだれ込みまする」

そういつて広島湾に集結している大船団を両手で包み込んで抱き上げた。

うん。わかりづらい。

簡単にしよう。

秀吉が言いたいことを要約するならば、織田軍は手勢を3つに分けることになる。

大分から宮城へと東のルートに行く吉川勢。西から佐賀、熊本と下がつていく小一郎秀長の部隊。

この2つが陸のルートに行くことになる。

この2つの部隊はそれぞれ約3万程度。島津は総勢10万ある。

島津はこのチャンスに逃すはずがない。

各個撃破の好機と取り、軍勢を北へと動かすに違いない。

もちろん陸のルートに行く2つの部隊は勝てないだろう。

いや、負ける。

しかしこの計画の立案者、秀吉、もしくは官兵衛その両名はそれでいいと考えている。

負けたら引けばよい。相手が出てきたら引く。

相手が引いたら出て行く。これを繰り返せばいい。

島津はどちらかに戦力を集中させ一方を叩いた後、もう一方を叩こうとする。

各個撃破の習いどおりに。

島津が戦力を集中させたほうは逃げ、その隙にもう一方がより深くに侵入する。

これを繰り返せばよい。

そして北部に釘付けになっているうちに信忠率いる主力軍が鹿児島湾に上陸し内城を包囲、殲滅する。

前線で戦っている兵は、いきなり本拠地が落とされることとなる。

おとり部隊が敵をひきつけその隙に敵の根拠地を奪う。

なんてことは無い。良くある、従来の戦である。常識といってもいい。

それを陸と海でやってのけることと、総勢12万と言う大群でやってのけることが秀吉の恐ろしさだろう。

秀吉の得意げな様子はここにいるもの皆に静かな笑いを誘った。

信忠も例外ではなかったのだろう。

「見事な策だな。しかし島津がそれに乗ってこなければいけがする」

信忠は微笑とともに質問した。

本気で問うているのではない。それがはたから見てもわかるものだった。

「せん無きこと。そのような時は陸から押し出す軍勢が島津の支城を落とし、ゆるゆると進みましょうぞ」

真面目な小早川隆景さえも自然と笑みが漏れている。

「籐、よう言った」

信忠は信長譲りの褒め言葉を口にした。

如何に強兵でもってなる島津兵でもこれではどうしようもないだろう。

九州が織田の傘下となることは決まったも同然である。

あとはどれほどの時間がかかるかだけだった。

「行っただか」

長船貞親はボソリと呟いた。

「左様で、ここぞとばかりに嬉々として飛んでいかれたようですね。」

いやはや、そうとう嫌われたようですね」

傍に控えていた小西隆佐は主である長船貞親の顔色をつかがうように見上げた。

「ふんっ」

長船貞親は鼻で笑う。

「支障なく進んでおろうな」

長船は立ち上がり西の方角を見下ろした。

岡山城には未だ天守閣はない。

しかし城の頂上、今、長船貞親がいる場所からは城下一円が見渡せた。

本来なら、秀家のみが座れる席に長船は座っている。

止めるべき唯一の人物である忠家は岡利家と共に安芸まで軍を率いているので止めるものもない。

「それがですね……」

小西隆佐は言いにくそうに続ける。

「それが、秀家様は留守役の内政を長船様に任せることを了承されましたが、

城に残る兵の統治権を岡利勝様と戸川達安様に譲られました」

長船は苦味をつぶしたような顔をする。

「秀家め。愚作だな。わしへの牽制ということか。それ以上の含みがあるのか……」

長船は思考をめぐらした。

「あの小倅どもは秀家派ということか？」

「いえ、表立ってそのような態度を示したことはないと思います
が。

多分、少し性急に事を起こしすぎたのでしょう。長船様に対する
不満が出てきたのかもしれませんが」

「我らには時間が無いのだ。わかっておろうな」

「はい。幸い計画の障害とはならないと」

「まあ小倅どもに何ができるというわけでもないか」

そういつと高笑いをする。

「御意。それと詮家様から不穏な動きがあるという報告も上がっております」

「それも問題ないだろう。早急に何かを動かすわけでもないだろう」

「はい。まだ、そこまでは至っていないかと」

忠家の息子も困ったものだ。

一門なら何をしてもうまいと思っているのか。

秀家への対抗心が強すぎるな。

詮家の父である忠家が秀家にべったりなのが許せないのだろう。捻じ曲がっているな。

それにしても高をくくりすぎている。

いつかは、対処が必要だろう。

今はまだいい。今はまだ。

「しかし、長船様もまるで奸臣ですな。主の留守を喜んで、その間に計をめぐらす」

小西隆佐は目を伏せたまま言う。顔は歪んでいた。

「まるで？ 奸臣そのものだよわしは。少なくともこれからそうなる」

長船は西を眺めながら答えた。

28話 九州征伐2

「何と言ってきた？」

「小一郎様が総員、隈本くまもとの城まで退却とのことです」

岡家利おかいえとしが報告を受けてきた。

「既に準備はできておりますゆえ、後は殿の一声のみでござい
ます」

準備のいい奴だ。

「わかった。全軍に撤退の命令をだせ。大筒おおづつを優先的にな
それにしても驚くぐらいに弱いな織田の兵は。」

安芸いつくしま（あき）の一厳島で本軍をつれてきた岡家利おかいえとしと合流した後、
俺は九州まで乗り込むこととなった。

ちなみに一緒に厳島まで訪れた忠家ただいえは後のことを岡家利に任せて
岡山まで帰っていった。

俺は岡家利を副官に迎え、船に揺られ、陸をテクテクと歩き九州
までやってきた。

今の所、九州征伐は順調にいつていると行ってよいだろう。

今回の遠征は北九州の在郷の勢力、大友義鎮や龍造寺隆信などが
織田家に協力的だったため上陸するさいにも障害は無かった。

正確には両勢力は既に九州を統一しかかけている島津に対して織
田家に救援を求めたというところだろう。

退却なのに順調？ と疑問があるかもしれないがこれが本当の戦
略的撤退ということだろう。

撤退が戦術の中に含まれている。

西と東で両方から攻めているため損害さえ受けなければいくらでも撤退して問題ない。

俺たちのいる西ルートが撤退したら島津の兵力は西に集まっているということなので東のルートからはやすやすと侵攻できるというわけだ。

まあ、実際は今俺がいる西よりは東のほうが大変らしい。

どちらかといえば島津家は東のほうに兵力を集中させているし、東のほうが地理的にも侵攻しづらいからだ。

島津としては先に東から南下ルートをとっている軍をつぶしたあと俺たちのほうに来るつもりなのだろう。

背筋にゾクツと怖気が走った。

俺は当初東のルートに行くはずだったからだ。

そう秀吉に告げられた。

最初の評定での秀吉の案の段階では俺は吉川と共に東を南下し、長宗我部ら四国勢と合流するはずだった。

それを止めてくれたのは織田信忠だった。

「宇喜多殿はまだ若い。小一郎殿に学ぶこともあるう」といつてくれたことで危うく難を逃れることとなった。

その時にはわからなかったが今になるとどういうことがよくわかる。

信忠は俺を庇ってくれたのだろう。

秀吉は自身に不利となるであろう軍勢を東に集め、これを機会に勢力の削減を狙ったのであろう。

面子を見てみればわかる。

小早川と比べ秀吉に対して好意を持っていない吉川。

最近織田勢力の外様となった宇喜多。ちなみに宇喜多はまともに織田家と戦争してないため戦力はそのままだ保持している。

東のルートを南下している味方は俺たちよりかなり深くまで進撃している。

多分俺たちより撤退も簡単にはできないだろう。
本当に危ないところだったのだ。

「撤退は順調か？」

「はい。われらもそろそろ」

岡家利が立ち上がって言う。

「そうか、では陣を引き払うか。大筒は？」

「壊れたものもございましてその回収に手間取っているようです」

「捨て置け。欲しいのはノウハウだ」

「ノウハウ？」

不思議そうに岡家利は首をかしげる。

「今回の戦を体験した兵のほうが重要ということだ。物はまた作ればいい。総指揮は任せる。連絡だけは徹底させてくれ」

「馬廻うまわりを貸していただいても？」

「既に任せた」

もう全権は岡家利に任せている。

俺はそういつて立ち上がる。

そして近習がもってきた馬に乗り込むと北に向けて出発した。

前線基地である隈本城まで撤退のためだ。

城にいるより全然いい。

軍事状況下では俺をのけ者にするなどできない。

さすがに不満はあってもこのような状況では表に出すことは無い。
宇喜多家の諸将は親父の時代からさまざまな経験を つんだものが
多いためそれぐらいのことはわきまえてくれている。

すがすがしい気分だった。

岡家利がお目付け役としてくることもいやいや引き受けること
になったが、今ではなくてはならない存在である。

俺の言うことを反対することはしない。

間違っている場合、ゆつくりと気づかせてくれる。

さらに冷静な判断力に大局的な視野も持っている。

こっちへ来てから知った大きな収穫だ。

長船がいなくてもだけで気分が晴れ晴れとしてくる。

空もいつもより青い気がする。

お香には悪いが城に帰りたくない。ずっとこのまま続ければいいの
にと思ってしまう。

……

というかゲームならやり直し決定だな。

何より今回の戦には俺にかかる責任は限りなく薄まっている。

さらに命の危険も少ない。

味方が心強すぎるためだ。

おだのぶただ 織田信忠、はしばひでよし 羽柴秀吉、くろだよしとか 黒田考高、はちすかまさかつ 蜂須賀正勝（小六）、はしばひでなが 羽柴秀長、
こばやかわたかかけ 小早川隆景、きつかわもとはる 吉川元春らの秀吉との結びつきが強い兵とさらに

ちようそかへもとちか 長宗我部元親らの四国勢。そして九州の大名である龍造寺隆信、
おおもともよしげ 大友義鎮らも加わっている。

戦国時代のオールスター勢ぞろいといってもいいだろう。

俺1人が失敗してもたいした問題にはならない。

これを機会にいろいろと実験しても罰は当たらないだろう。

俺はふと思いついて近くににいる兵に呼びかけた。

俺はこれを機会に高みの見物としゃれ込むことができるのだが、

俺の領民である兵たちはそうはいかない。

戦は戦だ。

どのような戦であれ真っ先に死ぬのは末端の兵、つまり足軽である。

ちなみにこのころ、戦国の末期になると足軽といわれる末端の兵はより軽装になってくる。

無論戦国時代の初期と比較しての話だ。

陣笠に鉄の鎧、籠手、陣羽織などが装備としてあげられる。

最近では鉄の鎧ではなく、和紙、皮などのより軽いものに変わっている。

守備力よりも機動力を重視していった結果である。

その反対で武将クラス、より地位の高いものは重装備になってきている。

鉄砲の普及により、大将クラスの人物でもやすやすと討ち取られることが多くなったためだ。

士気をするものが死んだ場合、その者の兵は四散する。

鉄砲で撃たれてもある程度耐えられる作りとなっている。

なので上から下まで鉄の塊として歩いているようなものである。

満足に動くこともできない。

他聞に漏れず俺の前を歩く兵も軽装だった。

言い方は悪いが肉の壁要因だ。

「なんで今回の戦に参加しようと思った？」

俺は同情から出た言葉を口にする。

一歩間違えれば俺も似たように戦に狩り出されていたのかもしれない。

運良く宇喜多家の当主として生きることができただけだ。

呼び止められた兵は驚いた。

いきなり呼びかけたため当然の反応だ。

呼ばれた兵はしばらく逡巡した後、答えた。

「あつしは農家の三男坊でして、継ぐ土地がありやあせん。戦で

手柄を上げれば土地も貰える聞いたもんで」

「そうか、家族も心配しているだろうな」

「いえ、余計な食い扶持が無くなったと喜んどります」

兵は照れたように頭をかき、苦笑いをする。

「長男ならまだよかったんですがね。無事帰ったら流行の商いでもするか土地を買おうと思っとります」

そう付け加えた。

「怖くないのか？」

「そりゃあ、怖いっちゃあ嘘になりますかね。

他にどうしようもないですし、何よりどうせ一度っきりの人生華々しく散ってみるのもわるかねえです」

そういつてこの時代特有のさっぱりした自棄とも底抜けに明るいともつかない笑いで返した。

農民もたいへんだ。

好んで戦に出ているというわけではないということか。

それにしても百姓になるために戦に参加するというのは皮肉が利いている。

無事撤退が終了し、隈本城に戻った俺たちを迎えてくれたのは先に撤退した後藤又兵衛と桃寿丸だった。

両名とも元気そうである。

問題なく撤退できたみたいだ。

又兵衛は火薬の影響かこころもち煤けて見える。

俺は馬から助けを貰ってずり落ちると声をかけた。

「桃寿丸、初陣の感想はどうだ？」

俺は気を使っている。

「うーん。あんまり実感ないなあ。馬場職家に任せっぱなしだし、僕が何かしなくちゃいけないということはあんまりないし」

岸本惣次郎、国富貞次、小森三郎右衛門、宍甘太郎兵衛、能勢頼

吉、栗井三郎兵衛、馬場職家。

彼ら七人を八浜七本槍という。

一昨年、俺が内政を散々に好き勝手やっていたとき、毛利と戦っ

て勇名を上げた男たちである。

八浜七本槍と聞くと若く、豪傑な武将という印象を受けるがその実態は平均年齢50歳ぐらいの年寄りが多い。

その分、俺の親父、直家以来の家臣であり、経験に裏打ちされた老練した戦の運びは頼りになる。

俺が思っていたよりも頼りになる。

「余裕だな。そのうち後ろからブスツとやられるぞ」

桃寿丸はビクツとして後ろを振り返った。

相変わらずからかいがあるなあ。

「今言つと冗談に聞こえないからやめて」

桃寿丸が泣き声をあげた。

「まあ、緊張してないならいいよ。肩の力を抜いて楽にいけば。なかなかこんな戦ができるときなんてないよ。危なくなったらすぐ逃げれるし」

俺はヘラヘラと笑って手を振ってみせる。

上が撤退を推奨しているため俺らが撤退することになんら負い目が無い。

というか俺らが頑張って踏ん張っていると織田家の兵はボロボロと面白いくらいに逃げていく。

もう少し踏ん張れよと突っ込みたくなるくらいだ。

すごいところは逃げた兵が前線基地に戻ると続々集まってくるところだ。

ゴキブリ並みのしぶとさだ。

「又兵衛、どうだ？」

俺は視線を隣の煤けた男に目を向ける。

「あー、耳をやられてますんでもっと大きな声で頼みます」

又兵衛は手に耳を添えた。

自分が聞こえないためだろうが、声を大きく張り上げている。ものすごく大声になっている。

「お前耳栓とかしなかったの？」

俺も声を張り上げた。

「すっかり忘れておりました。めんぼくない」

又兵衛はそういつてガッハツハツと笑った。

「大筒はどうだ？ まあある程度は俺の位置からでも確認できたが、やはり壊れたのもあるみたいだな」

又兵衛はあたりを見回して

「ここでもよろしいのですか？」

と耳打ちした。相変わらず声がでかくなっているため耳がキーンツとなる。

俺も同じように見回す。傍にるのは桃寿丸ぐらいだ。

少しはなれたところに兵に指示を出している岡家利の姿が見えた。俺は利家の名前を呼んでこっちに招いた。

「今更機密も何も無いだろう。あんだだけ派手にやっただ」

と俺が言つと、まあそれもそうかと又兵衛は頷いた。

「見てらっしゃったのである程度わかると思いますが、思った以上に使いづらいですな。

途中で動かなくなる物が多すぎます。一発打った後、時間も喰いますし、安定した使用は無理でしょうな。

なにより輸送が大変です。いくらある程度海上から輸送されているといつても行軍にかかる兵の負担などを考えますと割に合っていないですね」

しょっぱなから手厳しい批判が飛んできた。

まあ、ある程度予想できていたことではある。

「ですが、はまれば効果は絶対です。見ました？ 島津の兵ども明らかにこちらに仕掛けてくる兵は足がすくんでいましたよ」
事実である。

足がすくむというほどではないが、意図的にこちらに攻めてくる兵は少なかつた。

その分砲火が無い地帯、俺の軍の両隣に突撃していく兵は多くなくなつてしまつたが、まあそんなことは俺には関係ない。

まさかそれで撤退じゃないよな……

「わしとしてはできればこれつきりにしたいですな。」

いや、こつちも楽しいのですが、やはり軍の駆け引きの楽しさには比べられません」

そういつて又兵衛は締めくくった。

「わかつている。此度の戦で適任だろうと思われるものをしたから引き上げてくれればそれでいい。」

もちろんそれを率いるものはこちらで用意させてもらうが、その者が凡将だとしても下で勝手にやっていけそうなものが欲しいな」

「めぼしはつけておりますれば」

「大丈夫そうだな。家利、何かあるか？」

「いえ、殿の行いたいことは此度の戦で大体わかりました。」

私個人の葛藤はあれど、今後有効になるかと」

岡家利は不承不承ながらも賛同の意を表した。

「それと大筒部隊を率いるものではありませんが、私の部下で推挙したいものがおります。」

この場を借りて是非に」

「ほう。まあ見るだけは見てみるか」

「すぐ呼んでまいります」

そついうと岡家利は一礼し、推挙するものを呼びにいった。

「桃寿丸はなにかあるか？」

先ほどから参加できていない桃寿丸に話を振る。

「僕にはよくわからないけど大筒つてずいぶん苦労していたやつですよ」

「そうそう。何とか製造にまでこぎつけたんだけだなあ。」

あれはなかなか大変だったなあ」

大砲、現在ではこう呼ばれている兵器は戦国時代では大筒と呼ばれていた。

大砲を想像してはいけない。

大筒という名の通りどちらかといえば大きい鉄砲といった方が近いだろう。

ちなみに大きい鉄砲のことは大鉄砲という名がついたものがある。これは本当に大きい鉄砲と考えてもらって構わない。城の城壁、壁などの破壊に使われる。

では、大筒とはいったいどういったものなのか。

大筒は前装式、前から火薬と玉を入れるものだ。

形としては大砲を想像していいだろう。

担ぐことなどできないし、大きさも相当なものである。

射程も破壊力も十分すぎるほどある。

では、何を持って大きい鉄砲と言い表したのか。

それは砲口の大きさと玉の大きさ、そして玉の種類に関係する。

今回なんとか製造にこぎつけることができたのは口径20cm、

3貫（約12kg）であった。

10cmの玉と大砲と言い表すにはずいぶんと小さいものだ。俺の感覚からしたら小さいだけであって戦国時代の人から見れば十分に大きいものであることは又兵衛や家利の反応からもうかがえる。

それでももう少しどうにかならなかったのかと欲を出したくなる
ところではある。

10cm……

この時代の鍛造技術ではかなりの肉厚の砲身で無いと玉を飛ばす爆発に耐えうることができない。

大砲を飛ばす穴に比べて、その周りの部分を重厚に丈夫にしないとならなかった。

しかもそれでやっと飛ばした玉は一切爆発しない。

ゴロンツと転がるだけである。

地面に落下した後爆発する、前世では一般的な玉は榴弾りゅうだんといわれる。

榴弾……だつたとおもう。

すでにオスマン帝国では実用していたような気がする。
オスマンといったら大砲だし大砲といったらオスマンだからな。
そう考えると日本すでに遅れてんなあ。引き離されてんなあ。

こう述べていくと兵器として使い物にならないのではないかな。
何を持って有効とするのか疑問が出てくる。

事実、実際に相手に被害を与える効果は少ない。
それよりも相手に与える心理的影響が大きい。

この点は鉄砲と大差ない。

10cmの砲弾が轟音と共に空から降ってくる。

誰がわざわざその中を突っ込みたいと思うだろうか。
兵に与える心理的なものは大きい。

四散するとまではいかなくとも、意図的にもしくは無意識に弾着
地点には近づかなくなる。

それだけで十分なのだ。

敵の指揮を削るだけで効果は十分に発揮されている。

「最初は鉄で作ろうとしてたんだよねえ」

桃寿丸はしみじみと遠くを眺めた。

こいつ、なかなか見てんな。

「あれは失敗だったなあ。

俺の領地は結構鉄が出るからそれでいけたらやりいっと思つてた
んだがなあ」

「結局、青銅器になったんだっけ」

「鉄がダメなら青銅器、青銅器がダメなら銅、銅がダメなら石と
手当たりしだいいくつもりだったからなあ」

青銅器で何とかなったのは幸運だった」

俺は素直に認めた。

「僕は八郎様が苦勞しているの知ってますから。批判は無いですよ」

そういつてニコニコと笑う。

俺はそう言われて一瞬啞然となった。

そして桃寿丸の頭をゴツンツと殴った。

照れ隠しだ。

「何するんですかよ」

敬語がおかしくなっている。

「いや、なんとなく」

少し救われた気がしたのは絶対に桃寿丸には知られたくない。

「も」。すぐ手が出るんだから」

と文句を口にする。

俺は聞こえない振りをした。

戦場の中の日常を精一杯に謳歌していると岡家利が戻ってきた。推挙するつもりであろう人物を伴っている。

20代後半から30代ぐらいだろうか。

体格は細身だ。戦場で駆け回るには向いていなさそうだ。

足軽特有の薄っぺらい防具をつけているところを見ると身分はそう高くないみたいだ。

良くて足軽大将といったところだろう。

近づいてくる。

よく見てみると防具はよく手入れが行き届いていた。戦闘の後のため汚れているのは否めないがそれでも綺麗なほうだろう。

誰かに似ている気がするのだが、どうも思い出せない。

「そいつか？」

俺は岡家利に尋ねる。

「はい。できれば殿の元で召し抱えていただけないかと思いましたが」

「確認するが、見込みはあるのだろうか」

「そう思ったからこそその推挙です」

うむ。俺は頷くと岡家利の横で平伏している男に向かう。

「その方、なんと申す」

「権兵衛でございます。殿様」

苗字は無いか。武士でないものや商人でも許されていないものは苗字を名乗ることは許されていない。

お香のように。

この男もそうなのだろう。

「何ができる？」

「一通りできます」

大きく出たものだ。若いからだろうか。

俺がいたことではないか。

「そうか、では……そうだな。今は何をしておる？」

「足軽です」

「そうか、とりあえず足軽大将あたりか。この戦で役に立つのなら続きを考えてやる。」

家利の期待を裏切ることなきよう励め」

「ははっ」

どうも誰かに似ているような気がしてならない。

記憶を頭の中で掘り返そうとしたが、それはすぐに中断させられた。

「殿」

岡家利の方から俺に呼びかけてきたからだ。

珍しいこともあるものだ。

俺は最近信頼を置くようになってきたこの年寄りに耳を傾けた。
「傍によっても？」

「許す」

「くだんの話、上に伝えましたところ」

俺はすぐにピンと来た。

「どうなった!!!」

「秀吉様にご判断を仰ぐとの事です」

俺は少し落胆する。

「そうか、何か動きがあつたら教えてくれ。」

あつ！ そうだ。それから小西^{こにしゆきなが}行長に今回の戦が終わつたらすぐ

にヨーロッパに向かえと伝えておけ」

「わかりました」

岡家利が少し不満そうな顔をする。

口では賛同しているがたぶん反対なのだろう。

「すまんが、譲れないぞ。」

約束してしまったことだからな。それにこれから海外に渡航する

のは少し厳しくなりそうだ。

今しかない。織田政権もまだ、まだ今なら見逃してくれる」

「そこまでわかつているなら私が言えることはなにもありません」

といって岡家利は不承不承ながら同意した。

約束は後1つ残っている……

29話（前書き）

27話における盗作では誠に申し訳ございませんでした。
私の認識が甘かったことを痛感しました。

できるだけ早く、正式な謝罪文と27話の差し替えをおこないます
ので少々お待ちいただきたいと思います。

本当に申し訳ございませんでした。

少々不謹慎ですが、この回はR - 18のような過激な描写が出てき
ます。

嫌な方は飛ばし読みを推奨いたします。

29話

時間は半月前まで遡る。

船から第一歩を踏み出す。

自分の故郷に足を踏み入れたのは約一年ぶりのことだった。

次に戻ってこれるのはいつのことだろうか。

もうここに来ることは無いのかもしれない。

そう思うと、たいしていい思い出があつたわけでもない、むしろ悪い思い出のほうが多いこの故郷も感慨深いものに変わつていった。感慨深い？ 僕が？ まだそのようなことを考えることができることに自分自身で驚く。

肺には船倉の火薬特有の臭いがこびりついていた。

ゆつくりとゆつくりと肺に溜まつた空気を吐き出し、新鮮な外気と入れ替えていく。

潮風特有のネバツとした生暖かい空気であつたが、贅沢はいつていられない。

ここぞとばかりに精一杯胸を膨らませる。

「何をしている！ ちんたらするな。遊びに来たわけじゃあないんだぞ」

先を歩く大男に怒号を浴びせられた。

しまった。

距離をかなり離されてしまった。

追いつかなくては。

先を歩く男はただでさえ歩幅が大きい。

まだ体が成長しきっていない僕には追いつくことは一苦労だ。
それでも縦にも大きく、横にも大きいため大人としては比較的歩
くのは遅い。

港の喧騒を縫うようにして走る。

目標は目立つため、はぐれたり見失う心配は無い。

そんなことより追いつくことが遅れて、鞭で打たれるほうがよ
ほど怖い。

せつかくあの狭い船の中から出てきたのだ。今日ぐらいは鞭に怯
えることなく過ごしたい。

できれば屋根のあるところで眠らせてくれればそれに越したこと
は無い。

ドンッ！

考え事をしながら走っていたため道行く人にぶつかってしまっ
た。しかし、そんなことに構っていられない。わき目も振ることなく
走る。

「こらあ、クソガキ！！どこに目えつけてんだ！！！」

僕の背中に向けてであろう罵声が飛んで来る。

すいません。過去の僕なら謝っただろう。

残念ながらそのような心の余裕は持ち合わせていない。

最初はもっていたのかもしれないが、多分どこかに置き忘れてし
まったのだろう。

未来を捨てたのはいつからだろう。

明日を考えなくなってからどれぐらいたっただろうか。

今日を生きるということはそれほどまでに得難く困難だ。

「このガキ。どれだけ迷惑をかければ気がすむんだ。貴様のよう
な者は今日の飯を食えるだけありがたいと思えよ」

頭上から罵声が飛んでくる。

よかった。今日はご飯を抜かれることはなさそうだ。
例えば残飯同然のものだろうと。

「ありがとうございます。ご主人様」

僕は安堵と共にいいなれた言葉を口にする。

「だが、その前に罰として鞭をうたなくてはな」

大男は青い目と分厚い唇を歪ませて小気味良さそうに顔を崩した。僕は落胆し、顔を暗くする。

その反応に満足したのだろう。

それ以上の罰は追加されることは無かった。

宿屋は港町のはずれにあった。

宿屋の人には最初から何かしらの連絡があつたのだろう、すんなりと中に通してくれた。

「この、たたみというのはいつ来ても慣れんな。いちいち靴を脱がなくてはいけないなどと野蛮な国なだけのことはある」

忌々しそうに靴を脱ぎ捨てると青い目をした大男は畳の上に胡坐をかいた。

「こんな辺境の戦争しかない蛮族のところまで来なくてはならんとは」

なら来なければいいのに。と思うがそのようなことはおくびにも出せない。

「とつととやることを終わらせて植民地に帰りたいぜ」

「ですが、今しばらく時間がかかると思いますよ。領主様に話を通さなくてはなりませんし」

ギロツと男はこちらに青く大きい瞳を向ける。

しまった。

後悔したがもう遅い。

「貴様っ！ 口答えするきか！ いい度胸だな。奴隷の分際で」僕は慌てて訂正する。

「いえ……そのようなつもりは」

男は嬉しそうな笑みを浮かべる。

「そうだったな。先ほどの罰がまだだったな。服を脱いで背中を

向ける」

有無を言わせぬ口調でそう告げる。

僕は黙って言われたとおりにした。

反抗したところで今以上に辛い罰が待っていることは明白だ。

「ほら、猿轡だ」

男は布を放り投げる。

素直に従うことが最良だ。

経験からの判断だ。

せめて前の罰の傷がいてからにしてもらいたかった。

背中には何本もの鞭後と、最近できた新しい赤い痣が残っている。肌色の部分などがすかにしか残っていない。

男はそのようなことお構いなしに輿に常備している奴隷用の鞭を取り出すと躊躇無く振り下ろした。

「ンゲッ」

くぐもった悲鳴が部屋に立ち込める。

男は鞭を振るわせるたびに息を荒くしている。

疲れているためではない。興奮しているのだ。

意識を失ったほうが楽なのだが、男はそこは心得たもので意識を失わないギリギリのところで鞭を休ませる。

男は容赦なく鞭を叩きつける。

そのたびに僕の背中に赤いみみずばれのような傷が増えていく。

「ガッ　グッ　ンンッ」

猿轡の上から我慢できない悲鳴が漏れる。

どれだけ我慢したのだろうか。

限界寸前のところで拷問は終わった。

僕はゆかに俯けに倒れていた。

既に息も絶え絶えだ。

男はそれを見ると満足そうにし、さらに息を荒くした。そして、そのまま下腹部をまさぐり一物を取り出した。

凶悪なまでにそれは直立していた。

デブツと突き出た腹の下にいきり立ったものがあつた。

僕の下半身をまさぐり、着物を脱がし無理やりねじ込もうとする。すでに抵抗する気力も無い。

もしあつたとしても抵抗はしないだろう。

いつものことなのだ。

後ろの穴に異物が入ってくる感触がする。

ものすごく痛い。苦痛の悲鳴を上げる体力はもう残っていない。

「猿ばかりで文化も三流なこの国だが1つだけいいところがあるな」

そういつて僕の尻を優しくなでる。

「脱がしやすいこの服だけはわが国も参考にする価値はあるな。

すぐ挿入できる」

「んっんっ」

なすがままだ。

「かわいい顔に産んでくれた両親に感謝するんだな。そうでなかったら貴様など鉱山送りぐらいしか使い物にならんだろう？」

そういつている間にも男は容赦なく腰を動かした。

「おいっ！何とか言えよ」

男は全く反応のないぼくに嫌気がさしたのだろう。

鞭でできた新しい傷跡をぐじぐじと指でかき回した。

無理やりこじ開けられる傷口から血がたれているのが僕からでもわかる。

「ぐっぐあっ」

たまらず嗚咽が漏れる。

「鉱山だけは勘弁してください。何でも望むようにいたします。ですから鉱山だけは」

僕は必死に言葉をつむいだ。

男はそれを聞いて満足したのだろう。

「そうだっ！ 貴様ら猿は白人様の言う事を聞いていればいいん

だ」

男は満足そうに溜まっていたものを僕の腹の中に放出していった。

はあ。はあ。

夜の闇の中をひたすら走る。

周りは真っ暗で何も見えない。なので僕はひたすら前を走る背中を追った。

だんだんと傾斜が激しくなる。

足がもつれて転びそうになるのを何度もこらえながらひたすら走っていく。

必死で走っているのだが前の背中に追いつくどころか離されていくばかりだ。

このままでは捕まる。

僕の頭に嫌な想像が浮かぶ。

「あっ」

思わず転んでしまう。

前に石があつたことに気がつかなかった。

前にのめりこむように倒れてしまう。

体が泥だらけになってしまう。

置いてかれる。

捕まってしまう。

そう思うと自然と涙が出てきた。

「うっ　うえっ　ヒック　ヒック」

必死に涙を飲み込もうとするが、体は僕の言う事を聞いてくれない。

嗚咽にも似た声が出てくる。

「だいじょうぶ？」

前を走っていたはずの、置いていかれたと思った少女がそこには

いた。

「ああっ　こんなに汚れちゃって。ほら、だいじょうぶ。ね？」
そういつて僕の体中にこびりついた泥を手で払ってくれる。

「はしれる？」

少女は手を差し伸べてくれる。

「うん」

勝手に出てくる涙をこらえながら少女の手をとる。

「うん。おとこのこだ」

そう言つてこんな状況でも少女は笑顔を向けてくる。

ああっ　そうだ。僕は子供のころからずっとこの笑顔に救われていたんだ。

僕を救ってくれた笑顔。そしてこれからも僕を守ってくれるだろう笑顔。

そう、このとき僕は幼いながらこの少女を守りたいと思っていた。

僕の住んでいた村は小さな、そして平和な村だった。

村の人は全員顔見知りだ。

小さく、のどかの村だった。

ここ以外では戦という恐ろしいことが起こっているらしかったが、ここではそんな心配は無用だった。

よそ者もめつたに來ないこの地ではそのようなことに巻き込まれるはずもない。

僕はよくいじめられていた。

村の僕と年の近いの子はみんな僕より背が高く体が大きかった。

近い年の子はみんな僕より年が大きかったからだ。

この村では僕が最年少だ。

僕より小さい子はあるがその子はまだ2歳だ。一緒に遊ぶことはまだできない。

年も大きく、体も大きい子に大勢で囲まれては何もできなかった。
「戦ごっこしようぜ」

含みを持った笑顔で誘われる。

そういつて誘われたときは最後にはいつも僕がボコボコにされてしまう。

そしていつも助けてくれるのが彼女だった。

「コラーッ 何やってんの！！！」

「げえ！！！！ ちぬの奴だ！ みんなにげろ」

そういつていじめっ子たちはみんな蜘蛛の子を散らしたように逃げていった。

「この男女がー 今に見てろよー。たすけー、おまえもだー。女にばかり助けられてそれでも玉ついてんのかー！」

「男女と女男とおにあいだー」

「ちぬとたすけはおにあいだー」

いじめっ子たちは遠くから捨て台詞をはいていく。

「うるさいぞ！ お前ら。やるならかかってこい」

ちぬと呼ばれた少女は威勢良く怒鳴った。

「ほら、だいじょうぶ？」

いつも通りそういつて僕に手を差し伸べてくれた。

ちぬは村一番の美人だ。

僕より5歳年上だ。

長い黒髪に肌は透き通るように白い。

大きく切れ長の目は少女として不釣り合いなものだったがそれは色気となって表れていた。

庄屋の息子かどこぞの偉い人の側室にでもなるだろうというのが村の大人たちの意見だった。

そんな子がなぜ僕をいつも助けてくれるのかはわからない。

たぶんいじめが許せないんだろう。

「かえろっ」

そういつてくれた。

僕は差し出された手をつかんだ。

夕日の中を2人で歩いていく。

「わたし隣町の庄屋の息子に結婚を申し込まれたんだ」

ちぬは突然切り出した。

「へえ、隣町ってあの大きな蔵のある？」

「そうよ」

周囲が暗くなってきたからだろう。ちぬの顔が暗くなっているように見える。

「受けるの？」

寂しくなっちゃうなあと思いつながら質問する。

「いやよ。あそこの息子、女ったらしだもの。隣町の女の子なら見境なしなんだって。

それにわたし、普通の生活がいいんだ。貧乏でも、好きな人と畑を耕して、ゆっくり暮らしたいんだ。

あつ こどももたくさん欲しいな」

僕は何を言っているのかよくわからず不思議そうにちぬの顔を見上げた。

「まだ早すぎたか。君がもっと大きければいいのにね」

そう言ってちぬは少し悲しそうな顔をした。

「すぐ大きくなるよ。去年はたくさん身長が延びたんだよ」

僕はちぬを勇気付けようと口にする。

ちぬはフツと笑うと小さな声でそういうことじゃないんだよなあと呟き

「期待してるぞ」

と言ってくれた。

「うん」

僕は精一杯大きな声で明るく答えた。

「わたし、待ってるから」

ちぬは再びそう呟いた。

ちぬはどこかのお金を持つている偉い人に嫁いで幸せな生活を送るだろう。

僕はたぶん父の跡を継いで農地を耕して暮らす。

少し寂しいけどそういうものだと思っていた。それでいいと思っていた。

このときは。このときまでは。

それからしばらくは何も変化の無い生活だった。

最初は大人たちがする噂話からだった。

「近くで戦が起こるらしい」

詳しくはわからないが、戦は怖いものという認識はあった。

「この村は大丈夫だろ。とる物も無い小さな村だ」

笑い話にもならず、だんだんこの噂は人々の頭から忘れ去られていった。

次が起こったときには既に手遅れだった。

村に大量の兵が押し寄せてきた。

いや、僕は兵といえばもつと綺麗なものを着て、威厳のあるものだと思っていた。

しかし村に来たのは山賊と間違えるほど恐ろしい風貌をしたものたちだった。

村の大人たちは僕たち子供を先に逃がしてくれた。

一緒に逃げてきた子供は他にもたくさんいた。

今は僕とちぬの2人だけだ。

村がどうなったのかはわからない。

後ろで煙を上げているのは多分村だろう。

最初はわざわざ僕たちなんかを追いかけてくることはないと思っ

ていた。

しかし何度か怒声が聞こえてそんな考えは甘いものだとわかった。僕たちは必死に走った。

走り続けた。

しかしこどもの足だ。だんだんゆっくりになっていく。

走りが駆け足に変わり、歩きになり、最後にはその場から一步も動けなくなってしまった。

僕だけではない、ちぬも既に肩で息を置いて次の一步を踏み出すこともできなさそうだった。

僕は最後の力をふりしぼり、近くに手ごろに隠れることができそうな木のうろを見つけた。

その中に入ると、2人ともヘタリとその場に座り込んでしまった。もう歩くこともできない。

「ここまで来ればだいじょうぶだよな？」

僕は不安からくる恐怖を考えないようにする。

「ええ。だいじょうぶよ。きつともうあきらめたわ」

「そうだよな。村のみんなだいじょうぶかな？」

「きつとだいじょうぶよ。明日には私たちを探しに来てくれるわ」
そういつてちぬは僕の頭を抱きかかえてくれた。

かすかに震えているのが着物ごしからわかる。

僕も抱きしめ返す。

怖いのはみんな一緒だ。

きつとだいじょうぶ。明日には何も変哲の無い生活が待っている。
そう自分に言い聞かせて深い闇に落ちていった。

「起きて。起きて」

誰かが僕を起こそうとする。

「ん、んんっ」

体を起こそうとすると体中に痛みがはしった。

「ここどこ？」

「わたしよ。ちぬよ。わかる？」

僕は昨日何が起ったか改めて理解した。

確か村に兵隊が押し寄せて、村はたぶん燃えていて、何とか僕たちだけ逃げる事ができたんだ。

僕は昨日を思い出してブルツと体を振るわせた。

「だいじょうぶ。もうだいじょうぶよ。」

ほら、聞こえるでしょ。村の大人たちが迎えに来てくれたのよ。そういつてちぬは耳に手を添える。

僕も同じように耳をすまして、手を添えた。

かすかに声が聞こえる。

「おい。もうだいじょうぶだよー。兵たちはかえっていったぞー。」

でてこーい。どこにいるんだー。あとはおまえたちだけだぞー」
本当にかすかであるがうつすらと聞き取れる。

村からの迎えた。

よかった。みんな無事だったんだ。

「やった。これで帰れるね」

僕は喜び飛び跳ねながら言う。

「そうよ。本当に良かった。よかった」

ちぬはへなへなとその場に崩れ落ちた。

安心して気が抜けたのだろう。

「早く行こう。僕たちに気づかないで行っちゃうかもしれない」

僕ははやる心のままにせかすように言う。

「そうね。早く行きましょう」

ちぬは起き上がり、笑顔を見せて振り向いた。

本当に良かった。わき目も振らずに走ってきたから僕道わからなかったんだ。実は私も。

というような他愛も無い会話をしながらかすかに聞こえる声を頼りに山道を下っていく。

だんだんと僕たちを呼ぶ声が大きくなっていく。

はつきり聞こえるくらいになると僕たちは声を張り上げた。

「ここよー。わたしたちはここにいるわー」

「とおちゃーん。かあちゃーん。」

精一杯おなかから声を出す。

「おおっ！！！ いたぞ、生き残りがいたぞ！！！」

そんな驚いたような声が聞こえた後、再び声が返ってきた。

「どこだー！ どこにいるー！！！！ 無事なのかー？ ででこーい！ でてきてくれー。」

あとはお前たちだけだぞー。ここまで来てくれー」

とおおぜいの人が僕たちの声に答えてくれた。

再びその声を頼りに僕たちは声の主を探していく。

「おーい。ここだよー」

そういいながら見通しの悪い山道を必死に探していく。

声が近くなつて来ると少し開けたところに出た。

見通しもいい。

「おーい。おーい」

僕は必死に叫んだ。隣にいるちぬも同じように叫ぶ。

「やつと出てきたか」

そう声が聞こえた。

「え？」

と僕は声のした方角のほうに顔を向けなおす。

そこには村人ではなく、昨日村を襲った兵隊たちがいた。

皆一様に派手な着物を着込んでいる。赤や黄などをたくさん使ったものだ。

鉢巻をしているものや、腰巻をしているもの、着物をわざと着崩しているものまでいる。

そしてその背後には昨日村から一緒に逃げてきて、途中で僕たちとはぐれたはずの村のこどもたちが縄でくくられていた。

「やつと、でてきたか」

一番偉い人だろう。頭に赤い布を巻いていて、着物の片方をずら

している男が出てきた。

「このガキが。てこずらせやがって。これもそれもおめえらの対応の悪さがいけねえ」

部下をかき分けて出てきた男は近くにいた男に八つ当たりをした。
「へい。ですがこの作戦ばっちりでしたでしょ。所詮はガキ。ノコノコとでてきやしたぜ。

あつしがこれを思いついたことを忘れないようにおねげしやすぜ。頭領」

「ばかが。おめえらが手間取らなけりやあもつと手早くすんだんだ」

頭領と呼ばれた赤い鉢巻をしている男は部下を小突いた。

「おめえら、こんなガキ2人、とつとと捕まえちまえ」

頭領は指示を出した。

周りにいる兵が一斉に武器を構え、僕たちを睨みつける。

僕は震える足を叩きつけた。

隣でペタンツと尻餅をついて泣きそうになっているちぬの手をつかみ元来た道を走り出した。

畏だった。

殺される。

わかったことはこれだけだった。

父ちゃんや母ちゃんがどうなったか、村のみんなはどうなったのか。

つかまってしまった子供たちはどうなってしまふのか。

次々沸いてくる不安と恐怖を飲み込み、ただひたすらに足を動かした。

しかし、所詮は10にも満たないこどもの足である。

すぐに周りは塀に囲まれてしまった。

僕は必死に抵抗した。

武器も何も持っていないが、大声を上げて手足をばたばたと動かし、捕まるまい、殺されるまいと反抗を試みた。

ちぬを守らなくては。

その思いで一杯だった。

「うるせえ、ガキ」

ゴンツと音がした。

頭に鈍い感触がし、意識が遠くなっていくのを感じた。

「おい、こいつらやっちゃっていいよな？」

「おいおい。まずいつて。頭領から止められてるだろう」

「いいつて、いいつて。ばれりやあしないさ。これは俺たちの戦利品なんだろう？ なんも問題ないさ

今なら男だつてかまやあしないさ」

「お前……衆道の気があつたのか」

「いやいや……普段は無いさ。坊主じゃああるめえし。しかしこ
うも溜まつてくるとな」

「まあ。気持ちはわかるさ」

「おつ！ 兄弟話せるな」

「俺もおこぼれに預からせてもらつとするかね」

だんだんと意識がはつきりしてくる。

うつすらと目を開けると着物をたくし上げようとしている男の姿
が一番に目に入った。

「選り取りみどりだ。どいつにしようかなあ」

そういいながら男は1人1人無遠慮に物色していく。

どうやらここは小さな小屋のようなところだった。

その狭い中に大勢が押し込められている。僕の村の人もしれば全

然知らない人もいる。

そうだ！！ ちぬは、ちぬはどうなった。

僕はガバツと跳ね起きた。

「よかった。気がついた」

目の前にちぬが飛び込んでくる。

「本当に良かった」

目には涙が溜まっている。

「おつとうとおつかあは？ どこ？」

「ごめんなさい。探したのだけどここにはいないみたい。わたしの両親も……」

目の涙を拭いながらちぬは答えてくれる。

「おいっ そこっ うるせえぞ」

そういつてさっきまで物色していた男がこっちに向かって肩を揺らしながら歩いて来た。

「このガキどもっ！！ 少しはおとなしくできねえのか」
そういつて男は拳を振り上げた。

「おっ！ こいつぁ。田舎者ばかりで、芋くせえ奴としょんべんクセエやつしかいないと思っていたがこいつは……なかなか……いや、上玉じゃねえか」

そういつて男はちぬのあごを乱暴に持ち上げ、下種な表情を浮かべる。

「へへっ こいつはいいやぁ。おいっ！ こいつはどうだ？」

「おおっ！ いいの見つけたなぁ。俺はこいつにするぜ」

そっいいながらもう1人の男は女の髪を引っ張りあげる。

「いたいいっ！！ お願い助けてっ。なんでもする。何でもするから命だけは」

「姉ちゃん。よくわかってんじゃねえか。なーにおとなしくしてれば命ばっかりは助けてやるさ。」

おめえも気持ちよくしてやるよ」

もう1人の男は嬉しそうに腰の辺りをモゾモゾとさせた。

「きがはええなぁ。まあいいか、俺もこっちでお楽しみといくか」
男はちぬの腕を引っ張り連れて行こうとする。

「いやっ！！ やめてっ！ はなして！！！」

させるもんか！

僕は男に掴みかかろうとしたが、縄で両手がふさがれていることに今更ながら気づいた。

思うように動きがとれない。

ガブッ

僕は必死に体を動かして男の腕に噛み付いた。

「なんだっ！ こいつっ！ ちくしょー。離せよ。このガキッ」

「ふあなあふふあんが」

噛み付いたまま声を上げる。

「生意気なガキめっ 身の程を教えてやる」

男は空いているほうの手で剣を取り、手を振り上げた。

そのまま振り下ろされるかに見えたときギイイッと扉が開く音がした。

「騒がしいな。何をしている？」

新しい男が小屋に入ってきた。

「お、お頭……これはその……」

さつきまで威勢が良かった男たちがしどろもどろになっている。

「そう、あれです。こいつらがおとなしくないので少し躡けてやろうと思ひまして」

僕が噛み付いていた男が必死に言い訳をする。

お頭と呼ばれた赤い鉢巻の男はジロツジロツと2人の男を交互に見る。

たぶん一番偉い人なのだろう。

「ほう、お前らの躡けとやらは女限定なのか？」

「へへっ」

男たちは追従の笑みを浮かべた。

「お前ら、大事な商品に手をつけようとするとは何事だっ！！！」

少し外に出て頭を冷やして来い」

「お頭。それは誤解ですぜ」

「もういい。わかったから外に出てる。少し用があるから出てる」

お頭は真に受けることなくしっしつと手を振って退出を促した。

2人の男はしぶしぶちぬともう1人の女を放して小屋から出て行った。

「おいっ！ 入って来い」

お頭は外に向けて言い放つ。

呼ばれて出てきたのは背の小さい小太りの男だった。

「あつしに用ですかい？ 肩もみでも何でもいたしますぞ」

もみ手をしながら追従の笑みを浮かべている。

「あいつはっ」

ちぬは驚きの声を上げる。まさかいいえ、いくらあいつでもそこまではっ。

「知り合いなの？」

僕はちぬに質問する。

「ごめんっ。後から説明するからお願い。私を隠して」

ちぬは僕の後ろに隠れる。

「お前の言っていた女はここにいるのか？」

「へいっ。拝見させてもらいます」

男はもみ手と愛想笑いをしながら1人1人丹念に顔を確認していた。

腰を低くしたままジロジロと目を動かしていく。

ゆつくりとこちらの方に近づいてくる。

僕の前に来るとそこでピタリと止まった。

背中越しにちぬが震えているのがわかる。

「その女、こっちへ出て来い」

男はさっきまでとはうってかわって、居丈高な口調で命令する。

「いたのか？」

赤い鉢巻を巻いた男はたいげそうに尋ねる。

「いえ、この小僧の後ろにいる女の顔がみえねえもんでして。はい……」

はあ。鉢巻の男は深くため息をついた。

「今は悪いようにはしねえからでてこい。確認だけだ。な」

僕の後ろで震えているちぬはそんなこと聞こえていないようだった。

「み、みがしてください」

僕は勇気を振り絞る。

「ああ？ てめえには聞いてないんだが」
ものすごい目で僕をにらめつける。

「俺はてめえの後ろにいる姉ちゃんに話しているんだが。
優しく聞いてやってるうちに、な。俺はお前らを手荒に扱おうっ
ていうんじゃない。

むしろ丁重に扱っているほうだ」

そう言っつて鉢巻の男は刀を抜いた。

トントントツと手持ち無沙汰に肩に刀のみねを置く。

ちぬはおずおずと僕の背中からでてくる。

それでも震えているし、僕の服から手を離さない。

「こいつです。間違いありません」

小太りの男がちぬを指差す。

「ほう。ではこれで全員というところか」

刀を見つめながら鉢巻の男は確認する。

「へい。たぶん。それで約束のほうは？」

「約束？ なんのことだ？」

鉢巻の男はつまらなそうに相手をしている。

「そんな！？ 旦那。忘れてもらっちゃあ困りますぜ。

私のところの村と隣の村を全員差し出したらこの女を貰ってもいい。そう約束したはずですぜ」

小太りの男は形相を変える。

「ああ、全員差し出したら。な。

逃げられたじゃあないか。少なくともこいつらを探し出したのは俺の部下だ」

「そいつはねえですぜ。ちゃんと隣の村まで案内までしたつていうのに」

「うるさいやつだな。おい、入って来い」

外に出ていた男たちが頭領の声を聞いて入ってきた。

「なんかありました?」

「こいつを縛れ。少々手荒にしてもかまわん」

「いいんですか?」

「まあ、どうせこいつは二束三文ぐらいしかならなさそうだしな。ただしこいつと違ってガキと女は高く売れる。丁重に扱えよ」

頭領は部下をにらみつけた。

先ほどのことがあつた負い目だろう。部下たちは罰の悪そうな顔をする。

「へへっ　じゃあこいつも縛つて放り込んでおきやすね」

そういつて小太りの男を縛り上げようとする。

「何をする!?　私は村で一番の地主だぞ。こんなこと許されるはずが無い。」

父に、父に言いつけてやる!　こくら辺を支配する大名にもあつたことあるんだぞ。

お前らのような奴はすぐに捕まるさ。ざまあみろ」

小太りの男はひたすらに暴れている。

鉢巻の男は吐き捨てるように言つた後出て行つた。

「おまえの父ならあまりにもうるさかつたから切つたよ。」

あと今回のこの命令はその大名様とやらさ。こくら辺は近く戦争になるらしいからそれなら有効活用しようというわけさ。

運が無かつたな」

場面は変わる。

男は目を血走らせていた。

「え?　かわいがつてほしいんだろ?」

はあはあと声が出るくらい息が荒くなっている。
眼下には尻で後ずさるよく知っている顔がある。
ちぬだ。

男は卑猥な形に似たランプを高く高く掲げた。

船倉は暗いため、人の顔は良く見えない。

やはり上玉だ。

男は舌なめずりをする。

乱れた黒髪と細い肌に吸い付くような着物である。

肩はあらわに露出され、ランプに照らされて青く光っている。

雪のような白い肌にランプの明かりが注ぐ。

「ほら、かわいいがつてほしいんだろ。いってみな。私をかわいが
ってください。おいしく頂いてくださいって」

そういった後、ゲラゲラゲラと笑う。

ちぬは答えなかった。

何を言っているのかわからないからだ。もちろん僕にも理解でき
ない。

ちぬは円らかな瞳に困惑の色をのぞかせながら後ずさるだけだった。
へへっ そそりやがるっ きつと生娘なんだろっ

言葉が通じてないことは男も承知なのだろう。さつきから盛んに
呟いている。

「ほら、いってみ。アントニオ様に初めてをささげたかったんで
す。私の膜はアントニオ様にとっておいたのです」

たまんねえぜ。男は自分の言葉に酔いしれながら涎を拭う。

もちろん僕には言葉などわからない。

わかるのはずっと後のこと、僕がポルトガル語をある程度しゃべ
れるようになってからだった。

しかし、今この男が何をしようとしているのかはわかる。
それぐらい明白だった。

僕が捕まった後につれてこられたのは船だった。

異人の船、異人、鬼のような顔をした全く違う人間に僕たちは売られた。

火薬と交換に。

異人の男は腹に樽ほどの脂肪を抱えている。

頭は卵のようにつるつるで禿げ上がり、油によってテカテカと光っている。

唯一の若かりしころの名残である髪は後頭部に少し残る程度である。

腕も足もぶくぶくに超え太り、動かすのも億劫そうである。

ピシッとしている服が余計に滑稽さをもし出している。

誰がこのような中年男に初めてをささげたいと思うだろうか。

男はそれぐらいわかっていた。

人一倍外見にコンプレックスを抱いていた。

まともに望んで、望んだままを得られるとは思っていない。

だからこのような植民地くんだりのさらに奥の辺境までわざわざ人を買いに来ているのだ。

植民地にさえ来ればポルトガル人になわない望みは無いといっている。

男もそれを望んできたのだった。

どうせこいつらのなかで本国、ヨーロッパまで生き残るのは半分もない。

ならつまみ食いしても構わない。なに、みんなやっている。

役得という奴だ。

15世紀以来ポルトガル王国は拡大の一途をたどっていた。

航海王子と呼ばれるエンリケ王子は多くの航海者を育てた。

1488年にアフリカ大陸最南端からインド洋に航海する道を見つけたことにより、ヴェネツィア共和国により独占されていた香料

を仕入れることに成功する。

得た利益によりさらに各地に植民地の拠点を築き上げた。

海外各地を植民地支配し、交易体制を築きあげた。

ポルトガル海上帝国の誕生である。

日本に最初にやってきたのはキリスト教だった。

宣教師の次にやってきたのは人買い、奴隷商人だった。

奴隷商人と普通の商人はみわける事ができない。同時に両方経営していることが普通だ。

奴隷といっても勝手に他の国の人をさらっていくわけではない。

そのようなことは稀だった。

その国の指導者と友好関係を築き、穏便に商品を受け取るだけだ。男なら奴隷として鉱山かどこかに売り払う。

女なら、淫売屋に放り込むか、買い手がつけばどこかの家にメイドとして送り出す。

家畜のように手縄をかけ、連れて行く道中に、男は荷物運搬として酷使される。

それが女となれば味見を楽しむ権利も奴隷商人には当然の権利だった。

これが後300年も続くヨーロッパの植民地政策の実態だった。

「だからやめられねえ」

この土地はポルトガル人であるというだけで人としての格が1段も2段も上がった。

原住民を見下しながら、本国では王侯貴族しかできないような特権を享受することができた。

「ひへっひへっ たまんねえぜ」

下腹部に溜まったものから心地よい痺れを受ける。

周りから嗚咽がこぼれている。

すすり泣くものもいる。

別にわざわざ船倉でこのようなことをすることはない。

別の部屋には暖かいベッドとワインが置いてある。

アントニオという男の完全な趣味だった。

一番の器量良しを他の女のすすり声というスパイスを聞きながら
味わうことが最高の贅沢だと心得ていた。

「どうだ？ え？ 見るのは初めてか？」

アントニオは前をはだけて自分の物をさらけ出した。

ちぬは涙目になりながらさつと顔を伏せる。

男はそれをみていつそう陵辱心を駆り立てられる。

「どうなんだ？ いったみる？ え？」

太鼓腹の下についた露なものをちぬの頭の上に迫らせた。

「ひへっひへっ ほしいんだろ？ これが、え？ このアントニ

オ様の大きなものが欲しいといってみな。

遠慮することは無いさ。周りの皆も見ている。お前だけじ

やない。これからもう2、3人は試したいからな」

涎を手の甲で拭う。

へへっ まだ少女だ。

あそこの毛は生えているのか？ いや、案外剛毛かもしれない。

いやいやいや、全く無いかもしれない。うん。きつとそうだ。

この航海中は2、3人綺麗どころを見繕ってずっと俺に奉仕させて
やろうか。

口もいいし、膣でもいい。

なに、時間はたっぷりあるさ。ゆっくり楽しもう。

「へへっ ちょっと見せてみな。だいじょうぶ。だいじょうぶ。

何も怖いことは無い。

ちよつと確認するだけだから」

下卑た笑いと共に太い指がちぬの股に侵入する。

「いやっ」

ちぬは精一杯声を張り上げ、必死に抵抗するが2倍も3倍も大きい男の力にかなうはずも無い。

やすやすと侵入を許してしまう。

剛毛だ。

こんなかわいい顔をして。へへっ。

男はまた別の快感を得る。

「ひへっ ひへっ ほーら、じゃあ本番だ」

アントニオは自分の股間のものをわざとちぬの顔の前にもって言った後、下のほうに下ろしていく。

ちぬは精一杯の抵抗を示すが、抑え付けられているからどうにもならない。

鮮血が弾ける。

「おおっ なかなか使い心地がいい。誇っていいぞ。俺のもので初めてを迎えられるからな」

げへげへ笑いながら男は腰を振っていた。

僕は眠りから跳ね起きた。

嫌な夢を見た。

僕は、僕は何もできなかった

いつぶりだろうかこの夢は。懐かしい地に帰ってきたからだろうか。

嫌な汗をかいている。服も下に敷いている藁もびっしょりだ。

あの後ちぬがどうなったかはわからない。

事が終わった後、他の2、3人の女と共に連れて行かれてそれつきり合うことは無かった。

僕は鉱山に売られた後、必死にポルトガル語を勉強し、今の主人様にそれを見込まれて買われる事となった。

「おい、お前何してる。早く準備しろ」

叩き起こされる。

「はい……」

寝ぼけた目をこすりながら答える。

「主人より遅いとはいい度胸だ。いつもなら罰を与えるところだが……」

気味の悪い笑顔を顔いっぱいにした。

「だが今日は機嫌がいい。早く支度しろ。港に行くぞ」

この地方を治める大名からいつもより早く品の受け渡しをするとの連絡があつたらしい。

僕は急いでご主人様の後を追う。

「この分だと早く帰れそうだな」

満足そうにご主人様は呟いた。

今日はかなり機嫌が良い。

「とつとと受け取って早く帰りたい。お前もそう思うだろ？」
そういつて僕のほうを向く。

「はい」

とりあえずのおざなりの同意を口にする。

「うん。うん。お前もそう思うか」

相当機嫌がいいのだろう。

自分の太鼓腹をバチンツバチンツと叩きながら僕に話しかけてくる。

普段は用を言いつけるとときと罰を考え付いたときしか僕に話しかけることは無いのに……

すぐに品の引渡し人だろつ男が現れた。

「待たせたな。品もすぐつくはずだ」

僕は通訳してご主人様に伝える。もちろんもっと優しい言葉には

修正している。

「それは、それは。忙しいところすみませんね。こちらも今回はたつぷりと火薬を用意しております。

見ていかれますか？」

これはご主人様。商売だと口調が変わるのもいつものことだ。

「うむ。そうだな。先に見ておこうか」

「了解しました。今運ばせます」

愛想笑いを顔に浮かべている。

水夫たちが火薬の入った樽を持ってくる。

その数は相当なものだった。

「うむ。それでは」

そういつて男は樽の1つを開けて中を確認する。

「うむ。確かに」

男はそういつて頷いた。

「あの、それでは私も品を確認したいのですが」

ご主人様がいうのを通訳して男に伝える。

「ああ、そうだったな。すぐ来るだろう」

そういつたとおりすぐに品はやってきた。

手に縄をかけられた人々、大勢過ぎてどれだけいるのかわからない。

「ほう、これはまた集めましたね」

感心してご主人様は頷く。

「今回は多くの火薬がほしかったからな。量だけじゃなく質も良いぞ。

こいつなんてどうだ？ まだ若いぞ。いくらでも働ける」

そういつて男は僕とそう年の変わらない子を指す。

僕より薄汚れた服を着て、腕も細い。触れれば折れてしまいそうなくらいだ。

「女はいるんでしょうね？」

「もちろん揃えたさ。今回は若いが多い。それと丈夫だ。長い航海でも耐えられるぞ」

「種類は多いほうがこちらとしても嬉しい。いつも通り1樽50人でよろしいですか？」

「うむ。そのつもりだ」

「わかりました。また次回もよろしく願いしますね」

「ご主人様はそういうと水夫に命令する。」

「おい、こいつらを連れて行け。いつも通り船倉に閉じ込めておけ。決して逃がすなよ」

「旦那様」

水夫は確認するようにご主人様に伺いを立てる。

「わかつとる。わかつとる。この後で選別をする。いいか？ いつも通りわしが最初だぞ」

水夫たちはそれを聞くと嬉しそうにはしゃいだ。

選別と呼ばれる一種のこの船の儀式だった。

船には女性を乗せる習慣は無い。

船乗りに女というのは縁起が良くないとされている。

それでは今買った女はどのようなのか？

今買ったのは女ではない、いやそれ以前に人ではない。商品なのだ。

長旅をしてきた水夫にとって女にありつける機会は大変限られている。

商品を仕入れた後は貴重なその機会となる。

僕が買われた時と同じように。

火薬も運び終わり、奴隷という商品も運び入れた。後は出航を待つばかりとなった。

その時、ちょうど周りがばたばたと忙しくなった。

どうも戦が近くに起こるらしい。

もつともそれは最初からわかっていたことだった。

戦があるから僕たちはここにいるのだ。

事前に情報を掴んでいたため、火薬をいつもより多く運び込むこととなったのだ。

しかし、なにやらあわただしい雰囲気というだけで、ただの通訳の僕には何が起こっているのか全くわからなかった。

「積荷は全部のせたな。ならぐずぐずするな。早く出航しろ」

ご主人様の怒号が飛ぶが、急な出航のため他の水夫たちの足並みは揃わない。

「くそつ。変な因縁をつけられるのはごめんだぞ」

その場をウロウロと行ったりきたりしている。

いったい何が起こっているのだろう。

と疑問に首をかしげる。

と、1人の若い男が大勢を伴ってこちらにやってくるのが見えた。僕と同じくらいの年齢だろうか？

ずいぶんと若いのに、その格好は高貴なものだった。

僕には一生縁の無い世界だ。

「ここか？」

「はい。そうですが…… いったい何をするおつもりで？」

若い男の堂々とした態度に相反して案内している年を取った男はオドオドしている。

「おい。そこのお前！ この船の所有者だな。中を見るぞ」

若い男はご主人様に有無を言わせぬ口調で迫った。

「いや、それは、ちよつと……」

ご主人様は愛想笑いともみ手を崩さなかったが、内心は頭にきているはずだ。

頭に青筋が浮かんでいる。

「まあなんといわれようと勝手に入るんだけどね」

そういつて若い男はズンズンと勝手に中に入っていた。

「ご主人様は必死に止めようとするが後ろに伴われてきた男たちに阻まれてしまう。」

「あー、やっぱりか」

若い男はいつの間にか船倉への扉を開け勝手に中を覗き込んでいた。

その若い男に伴われてきた多くの男たちは中を見て絶句している。中には奴隷が所狭しと敷き詰められているはずだ。

手には縄をかけられ、着るものも満足ではない。

若い男は表面上は涼しげな表情を崩さない。

「おい。切れ」

若い男は端的に言い放った。

それを受けた老人といってもよいほどの年齢の男がすぐさま命令を出す。

すぐに命令どおり水夫の1人が切られた。

「ひいつ」

ご主人様が突然のことに驚いて悲鳴を上げた。

さっきまで平静だった若い男がピクリと眉を上げた。

「俺は切れといったぞ」

「ですから、水夫を1人切ったまでです」

平然と老齢の男は答える。

「そのような木っ端な者な者などいくら切ったところで」

声に怒りがこもっている。

「お望みとあればもう1人切りますが」

「俺はあいつを切れといったのだ。あいつを」

若い男はご主人様のことを指差した。

「そのような人手は余っておりません」

「んなバカな。ああ、もういい。わかった。全員捕らえろ。一人

も逃がすな。

あと繋がれている人たちを開放した後、事情を聞いておけ。すぐに上の判断を仰ぐ」

「御賢明な判断。感謝します」

「ふんっ」

若い男はそのまま僕のほうに向かって歩いてきた。

「ん？ お前は？ 日本人か？」

僕に気づき声をかけてきた。

日本人？ 何のことだろう？

「すみません。何のことでしょう？」

「ほう。日本語ができるのか？ 中国人？ というわけでもなさそうだな。

お前、いったいここで何をしている？」

「僕ですか？ 僕はご主人様に通訳として買われただけです」

「ご主人様というにあいつか？」

若い男はご主人様を指差す。

ご主人様はちょうど縄をかけられているところだった。

「はい」

「そうか。通訳といったな。ポルトガル語ができるのか？」

「はい。必死に勉強しましたから」

ほうつと若い男は感心したように頷いた。

ご主人様を買われなかったら今でも鉱山にいただろう。

死んでいただろう。

「これから行くあてがあるのか？ もしないのなら一緒に来るか？ 今回のことでのいるいる聞きたいこともある」

ご主人様がとらえられた今となつてはもちろん行く当てなど無い。

「はい。お願いします」

僕は二つ返事で答えた。

いったい何ものなのだろう。

「失礼ですがお名前をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

若い男はぶっきらぼうにそういった。

「宇喜多、宇喜多秀家だ」

30話

「とりあえずの諸將の領土分配は目処ができました。信忠様にも目を通していただき、快い言葉を承りました」

くろだかんべえよしたか
黒田官兵衛孝高は神妙な顔をして上司に当たる男、秀吉に報告をしていた。

「ほうか。ほうか。そちもこれで少しはゆるりとできそうだな」

実際この所、官兵衛は多忙を極めていた。

戦の最中よりも事後処理のほうが悪かった。

在来の豪族、手柄を上げたもの、織田軍に味方したものの、それぞれに満足するよう論功交渉をしなくてはならなかった。

官兵衛がこのようなことにたづさわらなくてはならなかったことは織田家の官僚不足にある。

織田家の次代を担う官僚が本能寺の変で消失したことにより、本来秀吉の官僚役を務めるはずの石田三成、かたぎりかつもと片桐且元、ながつかまさいえ長束正家などが代わりとして召し抱えられることになったためだ。

「であればよろしいのですが」

「まだ仮の話ではあるが、今回でそちにも城をやることができる。わしの気も楽になるうものよ」

官兵衛は秀吉が姫路に入るときに自身の城を無償で秀吉に与えた。

織田家への忠誠を示すために。

秀吉はそのことを気にしていた。

官兵衛は豊前国の6郡を与えられることとなった。やはり、秀吉なりに思うところがあったのだろう。

「ありがたく」

官兵衛は頭を下げる。

「よいよい」

秀吉は満足そうにそして満面の笑顔をうかべた。

「ところで此度の呼び出しがなされましたか？」

「ああ、そちも知っておろう」

それだけで官兵衛は合点がいった。

「南蛮の件ですか？」

秀吉は重く頷いた。

「弟から報告があがつとりゃあ」

秀吉は離れた場所にいるであろう秀長を思い浮かべるような優しい眼をした。

秀吉は秀長を愛していた。

百姓上がりの身内の少ない秀吉にとっては身内は大切だったものもある。

純朴な性格な秀長は誰からも愛された。

そしてそれ以上に秀長は戦闘指揮官として並以上に優秀だった。

「早いうちに目を摘んでおくことが肝要です」

手短にそう答える。

「信忠様はいかに」

「前右大臣様の判断に任せるそうだ。今はほおっておけと」

信忠自身の責任では決めることのできない問題だった。

父である信長野判断を要した。

「的確な判断でしょう」

「下につくものしだいでえ」

秀吉の信忠への評価だった。

「どうだ？ 洗礼せずによかったんなあ」

秀吉はそういつてウヒヤヒヤと面白そうに笑った。

「少し考えさせてもらいます」

官兵衛は揺れていた。

「ゆつくり選べや。急ぐ必要もあるまい」

神など何するものぞ。とても思っているかのように軽く秀吉は言い流した。

「ところで……だな。官兵衛」

官兵衛は身構えた。今までのことはたいした話ではなかった。

ということはここからが本当の自分呼びつけた理由だ。

「もうひとつ摘んでおきたい芽があるのだ」

官兵衛は少し考えた後、

「私にはとんと思いつきませんな」

と、とぼけた。

「宇喜多秀家のことだ」

「秀家？ 宇喜多殿が？」

何か問題でも？ というように聞き返す。

「今は特に何もありやあせん。だがちと怖い。元服も済ました」

今までは後見人として秀吉の力を発揮できた。

しかし、このまま維持できるとは限らない。

「織田家への忠はあると思いますが」

「そりゃあ本能寺があるからな。問題は……わしの元につくかだ」

「そこまで心配ですか？」

「心配だ」

また悪い癖が出た。

たまに2人になるとこのように弱気になることがある。

いや、元々秀吉の性格はこの弱気で猜疑心の強いほうなのかもしれない。

信長の前で大気者と評されている秀吉は後に作られたものと官兵衛は最近思うようになった。

秀吉自身演技ということに気づいていないかもしれないが……

「でしたら……」

官兵衛はしぶしぶ答える。

官兵衛は個として宇喜多秀家のことを気に入っていた。本能寺の時にしてやられた時はやられたと思うと同時にどこかすがしかった。

そして何より、官兵衛のお気に入りの後藤又兵衛が仕官し、重用されている。

官兵衛は息子の長政より又兵衛のほうを気に入っていた。しかし、あくまで個人としてであって秀吉の実質的参謀としての立場ではそうはいってられない。

「宇喜多殿は未だに縁談の話は無いとお聞きしております。身内になってしまうというのはいかがでしょう」

「わしの母ちゃんでもやれというのか。それに信忠様はまだしも前右大臣様はよく思われないだろうな」

秀吉には身内が少ない。

「前田殿、細川殿あたりからとってこれば前右大臣様の心証もよろしかろうと。」

それを秀吉殿の養子ということにし、縁談をまとめるというのは「ほう。悪くない案だ。しかし秀家は懇意にしている女子がいるという話ではないか」

「懇意にしているといっても正室ではあるますまい」

「手をかまれることはないと言い切れまい」

「それは……」

「まあそれならそれで良いか。その時は芽を摘み取ってしまうまでか」

柴田修理亮勝家謀反の報が伝えられたのはそれからすぐのことだった。

秀吉の思惑通りに事は運んだ。

秀吉は計画通りに島津の兵を北に釘付けにし、その隙海上から上陸した本隊により城を囲んだ。

島津義久は抗戦を早期に諦めた。

秀吉、しいては織田家に服従の姿勢をとった。

秀吉はそれを快く受け入れる。

もちろん条件はそれなりに厳しいものであったが、それでも信長の処置と比べれば優しいものだ。

結局島津は大隈と薩摩の領土を秀吉と信忠から安堵されることで決着がついた。

と、あっけなく決着がついてしまった。

これで自分の領土、岡山に帰らなくてはなくなってしまうた。せつかくのびのびと生活できているのに、これでまた肩身の狭い環境が待っていると思うと鬱になってくる。

俺は船に乗りながらこれからのことを考えて暗くなっていた。

ちなみに既に小西行長はヨーロッパに向けて大半の船を伴って旅立っていった。

今残っているのは俺が乗っているこの船をいれても数えるほどしかない。

新しく建造したガレオン船は全て小西行長がもって行ってしまっ

たため、ここに残っているのは旧式の沿岸専用の船しかない。

といつても船は毛利に頼めば帰りの都合ぐらいはつけてくれるかもしれない。

九州から岡山まで歩いて帰ることは俺には不可能だ。俺は馬に乗れないのだから。

「帰りたくないなあ」

俺は思わず思っていたことが口につ出てしまう。

「なんで？ お香ちゃんに会いたくないの？」

横から桃寿丸が口を挟んでくる。

いつの間にやら近くにいたようだ。

「そりやあまあお香には会いたいけどねえ」

「そうだよ。帰ったら一緒になるんでしょ」

初陣を終え、少し大人っぽくなってきた桃寿丸がわかったようなことをいう。

「何で知ってんの？」

「こういうことは広まりやすいからねえ。知らないのは本人たちだけかもよ。」

城下でももつぱらの噂だったよ」

「うそ！？ 俺そんなの聞いたことなかったよ」

桃寿丸は笑った。

「そりやあ城主の耳に入るようにそんなこと言う人はいないですよ」

衝撃の事実を突きつけられた。

「そんなものか」

「そんなものだよ。八郎、まだ城主としての自覚が足りてないんじゃない？」

生意気なことを言う様になった。

そんなことを言っても帰りたくないものは仕方がない。

はあ。

俺はため息を洩らし思考に区切りをつけた。

「秀家様、秀家様はおられますか？」

岡利家が老体をおこしてやってきた。

「利家殿。どうされましたか？」

桃寿丸が返答する。

今まで気がつかなかったけど又兵衛って野次馬根性が強いんだな。

「どうした秀家」

「殿、秀吉殿から使いが参られました。至急殿にお会いしたいとのことです」

船に慣れないのか足元がおぼついている。

「そうか。通せ」

「ここで、ですか？」

「至急なのであろう？」

「はっ」

岡利家が後ろに振り向くとすぐに使者と思われる人物がいた。

こいつ、俺の性格をわかってきたな。

あらかじめ俺がここに使者を通すことをわかっていやがった。

「これはこれは、よく来てくださいました。

それなりのもてなしの準備はできておりますが、まずは用件のほうをうかがってもよろしいですか？」

使者は少しむっとしたが諦めたのだらう。

素直に手紙を差し出した。

俺は紙を広げ、読み進めていく。

此度の戦、そして先年の戦、宇喜多の家の忠義あっぱれである。信忠さまも大変お喜びである。

前右大臣様の御威光もよりいつそう増すばかりである。

ここら辺の前口上は飛ばす。

前右大臣様がご子息である信忠様の九州征伐と北条征伐とを平行して進められていることは貴殿も存知のことであろう。

よって、我ら前右大臣家は東方と西方に兵を集めている。

先年の本能寺の変の例もあり中央を長期に空けておくことは危ういと存じる。

よって我らは早急に中央に戻り後詰としたい。

前右大臣様に後顧の憂いなく存分に采配を振るってもらおうようにしたい。

宇喜多殿には恩賞も存分でないうちに次の戦に発ってもらうことになる。

大変心苦しい限りである。

先年の働きと此度の働きとあわせできうる限りのことをしたいと考えた末、良案を思いついた。

宇喜多殿は未だ正室がいないと聞く。

元服も済ませ、武者働きも優れる宇喜多殿に未だ正室がいないのは由々しき限りである。

わしが前右大臣様に掛け合おう。

信忠様も是非にといって喜んでくださった。

というようなことが書かれていた。

俺は読み進めるたびにワナワナと手が震えてきた。

バカな！

バカな！

こんなことが……

俺はもう一度手紙を読み返した。

が、手紙の内容が変わるはずもなかった。
俺はしばらくの間放心していた。

「失礼します。拝見します」

そんな俺を不思議に思ったのか岡利家が俺の手紙を奪い取った。
俺と同じように手紙に目を通していく。
真剣な顔で読んでいく。

「ふむ」

読み終わると一言頷く。

「悪い条件ではないな。いや……むしろいい条件ともいえる」
「どれどれ」

横から桃寿丸が手紙を覗き込んだ。

桃寿丸も前者2名と同様に読み進めていった。

「これは……ああ……そういうことか」

桃寿丸は納得するように頷いた。

場の空気が静まった。

しばらくして、桃寿丸が沈黙を破った。

「でも、岡利家の言うのと折り悪い条件ではないよね。むしろうまくいけば……」

というか多分秀吉殿もしくは織田家との縁組の可能性も高い」

桃寿丸はいったん言葉を切って俺の顔を見た。

「これは受けるべき条件だよ。迷う必要なんてないよ。利家殿も同じ考えでしょ？」

「むしろ断ることは不可能でしょう。当家は秀吉様と前右大臣殿に多大の恩があり申す」

「だってさ。八郎」

そう言ってから俺に話を振ってきた。

桃寿丸なりに俺に気を使ったのだろう。

「織田信長が今回の九州征伐と同時並行で北条征伐を行ってたことは知っていたが。」

でも少しおかしいな。

本能寺の変から織田領が少し騒がしかったのは確かだが。

それも2年たっている今では大分おとなしくなっているはずだ。わざわざ秀吉が大兵力をつれて後詰に行く必要があるのか？」

「確かに。言われてみると。九州征伐での全軍をそのままということではないでしょうが、

秀吉様には秀次様も蜂須賀様もいらっしやる」

岡利家は首をかしげた。

「そうだ。わざわざ秀吉が引き返す必要はないはずだ。

九州は平定されたとはいえまだ日は浅い。反乱もおきないとは限らない」

「中央で何かあったと」

岡利家は俺に鋭い視線を向けた。

「そう考えるのが妥当だ。本能寺ほどのことではないことを祈るだけだな」

既に歴史は大きく変わってしまったている。

もう一度本能寺の変と同じようなことが起こっても俺に対処する手立てはない。

「まあこちらには次期当主の信忠がいる。そこまで慌てるほどのことはないだろう」

「じゃあ、そんな感じで、今までどおりこちらから動くことはせず、上からの指令で動きましょるか」

俺はそういつてみんなの顔を見て締めくくった。

「ちよっと待ってよ八郎。こっちはどうするの。縁談の話はどう

すんのさ」

俺は苦虫を噛み潰したような表情を顔に浮かべてしまう。

「丁重に断りの返事を書くさ」

言ったとたん場の空気が凍りついた。

「断るのですか!？」

「断るの!？」

岡利家と桃寿丸はそれぞれに声を上げた。

「そりゃあ断るさ。俺にはお香がいるんだから」

「側室でいいじゃん」

「側室ではなかったのですか」

ハモっている。

「いやいやいや。正室しかないでしょ。側室なんてかわいそうじゃない」

2人は頭を抱えてため息をついた。

「八郎様。本気でそのようなこと考えていらっしやったんですか？」

岡利家は苦言を洩らした。

「なんか悪いの？」

俺は少しむつとする。

「いや、八郎。そこはおかしいでしょ。良い悪いの問題じゃあないよ」

桃寿丸まで文句を言ってきた。

「お前らまで長船みたいなこと言うなよな。」

わかった。わかった。返事は保留な。この内容だと今すぐ返事しろってことはないだろ。

後から秀吉や信忠に頼んでみるよ」

俺は吐き捨てるように両名に告げた。

「とりあえず、全軍移動だ。戻るぞ」

岡利家と桃寿丸は頭を抱えるしかなかった。

30話（後書き）

更新遅れてすみません。

引越し、新生活いろいろ大変でした。

関東にやってきました。友人が1人もいません。
だれか友達になってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9517/>

戦国異端記

2011年7月11日00時09分発行